

633-56



1200501542010

33

56

口
複
写

事 故 本

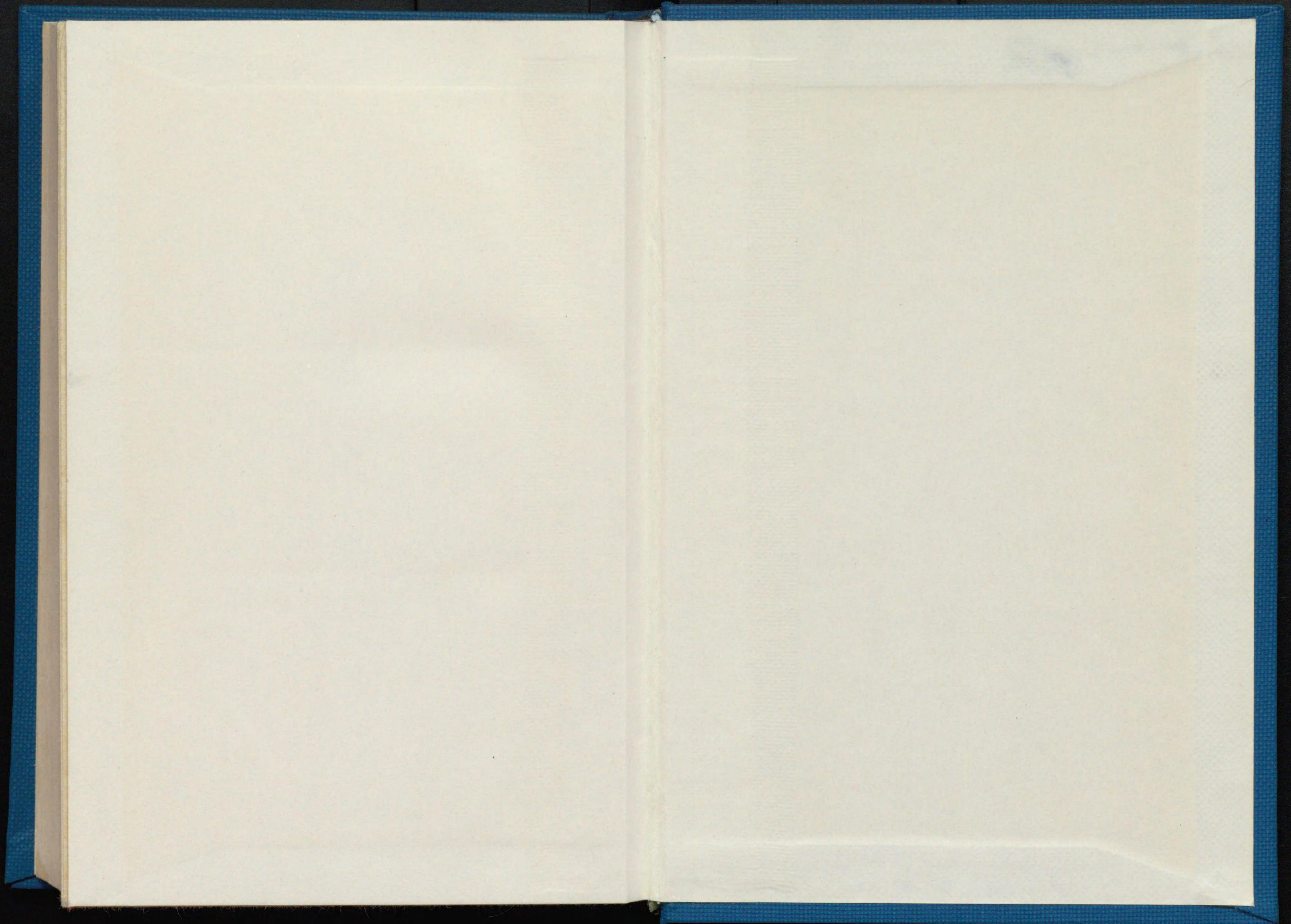
欠ページあり

[P.1~10],

P.43~60

複本・同本なし

2007.5.1 発見



30.51

133-56

魯
迅
全
集

17-024

呐

喊

狂人日記

某君兄弟數人はいづれもわたしの中學時代の友達で、久しく別れてゐるうち便りも途絶えがちになつた。先頃ふと大病に罹つた者があると聞いて、故郷に歸る途中立寄つてみると僅に一人に會つた。病氣に罹つたのは其人の弟で、君が折角訪ねて来て呉れたが、本人はもうスツカリ全快して官吏候補となり某地へ赴任したと語り、大笑ひして二冊の日記を出した。これを見ると當時の病狀がよくわかる。舊友諸君に獻じてもいいといふので、持ち歸つて一讀してみると、病氣は迫害狂の類で、話が頗るこんがらかり、筋が通らず出鱈目が多い。日附は書いてないが墨色も書體も一樣でないところを見ると、一時に書いたものでないことが明かで、間々聯絡がついてゐる。専門家が見たらこれでも何かの役に立つかと思つて、言葉の誤りは一字もなほさず、記事中の姓名だけを取換へ

て一篇にまとめしてみた。書名は本人平癒後自ら題したもので、そのまゝ用いた。七年四月二日しるす。

一

今夜は大層月の色がいい。

乃公は三十年あまりもこれを見ずにゐたんだが、今夜見ると気分が殊の外サッパリして初めて知つた、前の三十何年間は全く夢中であつたことを。それにしても用心するに越したことはない。若し用心しない方がいいのなら、あの趙家の犬めが何だつて乃公の眼を見るのだらう。乃公が恐れる理がある。

二

今夜は丸切り月の光が無い。乃公はどうも變だと思つて、早くから氣をつけて門を出たが、趙貴翁の目付がをかしいぞ。乃公を恐れてゐるらしい。乃公をやつつけようと思つてゐるらしい。

ほかに未だ七八人もゐるが、どれもこれも頭や耳を密著けて乃公の噂をしてゐる。乃公に見られるのを恐れてゐる。往來の人は皆そんな風だ。中にも薄氣味の悪い、最もあくどい奴は口をおツびろげて笑つてゐやがる。乃公は頭の天邊から足の爪先までひいやりとした。解つた。彼等の手配がもうチャンと出来たんだ。乃公はびくともせず歩いてゐると、前の方で一群の子供が又乃公の噂をしてゐる。目付は趙貴翁と酷似で、顔色は皆鐵青だ。一體乃公は何だつてこんな子供から怨みを受けてゐるのだらう。逆もたまつたものぢやない。大聲あげて「お前は乃公にわけを言へ」と怒鳴つてやると彼等は一散に逃げ出した。

乃公と趙貴翁とは何の怨みがあるのだらう。往來の人にも又何の怨みがあるのだらう。さうだ。二十年前、古久先生の古帳面を踏み潰したことがある。あの時古久先生は大層不機嫌であつたが、趙貴翁と彼とは識合ひでないから、定めてあの話を聞傳へて不平を引受け、往來の人までも乃公に怨みを抱くやうになつたのだらう。だが子供等は一體どういふわけだえ。あの時分には未だ生れてゐる筈がないのに、何だつて變な目付でじろく見るのだらう。乃公を恐れてゐるらしい。乃公をやつつけようと思つてゐるらしい。本當に恐ろしいことだ。本當に痛ましいことだ。

救救 納戸 納戸

お、解つた。これはてつきり彼奴等のお袋が教へたんだ。

三

一晩ぢう睡れない。何事も研究してみるとだん／＼解つて来る。

彼等は——知縣に鞭打たれたことがある。紳士から張手を食つたことがある。小役人から鼻を取られたことがある。又彼等の親達が金貸からとちめられて無理死をさせられたことがある。

その時の顔色でもきのふのやうなあんな凄いいことはない。

最も奇怪に感じるのは、きのふ往來で逢つたあの女だ。彼女は子供をたゝいてちつとわたしを見詰めてゐる。「叔さん、わたしやお前に二つ三つ咬みついてやらなければ氣が濟まない」これにはわたしも全くおどかさされて仕舞つたが、あの牙ムキ出しの青ツ面が何だかしらんが皆笑ひ出した。すると陳老五がつか／＼進んで来て、わたしをふんづかまへて家へ連れて行つた。家の者はわたしを見ても知らん振りして書齋に入ると鑰を掛け、丸で鶏鴨のやうに扱はれてゐるが、このことはどうしてもわたしの腑に落ちない。

四五日前に 狼村の小作人が不況を告げに來た。彼はわたしの大アニキと話をしてゐた。村に

一人の大悪人があつて寄つてたかつて打殺して仕舞つたが、中には彼の心臓をえぐり出し、油煎りにして食べた者がある。さうすると肝が太くなるといふ話だ。わたしは一言差出口をすると、小作人と大アニキはじろりとわたしを見た。その目付がきのふ逢つた人達の目付に寸分違ひのないことを今知つた。

想ひ出してもぞつとする。彼等は人間を食ひ馴れてゐるのだからわたしを食はないとも限らな

い。

見給へ。……あの女がお前に咬みついてやると言つたのも、大勢の牙ムキ出しの青面の笑も、先日の小作人の話も、どれもこれも皆暗號だ。わたしは彼等の話の中から、そつくりそのまゝの毒を見出し、そつくりそのまゝの刀を見出す、彼等の牙は生白く光つて、これこそ本當に人食ひの道具だ。

どう考へても乃公は悪人ではないが、古久先生の古帳面に蹶躓いてから逆も六ツかしくなつて來た。彼等は何か意見を持つてゐるやうだが、わたしは全く推測が出来ない。況して彼等が顔をそむけて乃公を悪人と言ひ布らすんだからサツパリわからない。それで想ひ出したが、大アニキが乃公に論文を書かせてみたことがある。人物評論で如何なる好人物でも一寸くさした句がある

と、彼はすぐに圈點をつける。人の悪口を書くのがいいと思つてゐるので、さういふ句があると「翻天妙手、衆と同じからず」と譽め立てる。だから乃公には彼等の心が解る筈がない。況して彼等が人を食はうと思ふ時なんかは。

何に限らず研究すればだん／＼わかつて来るもので、昔から人は人をしよつちう食べてゐる。

わたしもそれを知らないのぢやないがハッキリ覚えてゐないので歴史を開けてみると、其歴史には年代がなく曲り歪んで、どの紙の上にも「仁道義徳」といふやうな文字が書いてあつた。すつと睡らずに夜中まで見詰めてゐると、文字の間からやうやく文字が見え出して來た。本一ぱいに書き詰めてあるのが「食人」の二字。

この澤山の文字は小作人が語つた四方山の話だ。それが皆ゲラ／＼笑ひ出し、氣味の悪い目付でわたしを見る。

わたしもやつぱり人間だ。彼等はわたしを食ひたいと思つてゐる。

四

朝、靜坐してゐると、陳老五が飯を運んで來た。野菜が一皿、蒸魚が一皿。この魚の眼玉は白

くて硬く、口をばくりと開けて、それが丁度人を食ひたいと思つてゐる人達のやうだ。箸をつけてみると、つる／＼ぬら／＼して魚か知らん、人か知らん。そこではらわたぐるみそつくり吐き出した。

「老五、アニキにさう言つて呉れ。乃公は氣がくさ／＼して堪らんから庭内を歩かうと思ふ」

老五は返事もせずに出て行つたが、すぐに歸つて來て門を開けた。

わたしは身動きもせずに彼等の手配を研究した。彼等は放す筈はない。果してアニキは一人のおやぢを引張つて來てぶら／＼歩いて來た。彼の眼には氣味悪い光が満ち、わたしの看破りを恐れるやうに、只管頭を下げて地に向ひ、眼鏡の横べりからチラリとわたしを眺めた。アニキは言つた。

「お前、けふは大分いいやうだね」

「は」

「けふは何先生に來て戴いたから、見て貰ひな」

「あゝさうですか」

實際わたしは此親爺が首斬役であるのを知らずにゐるものか。脈を見るのをつけたりにして肉

付を量り、其手柄で一分の肉の分配にあづからうといふのだ。乃公はもう恐れはしない。肉こそ食はぬが、膽魂はお前達よりよつぽど太いぞ。二つの拳固を差出して彼がどんな風に仕事をするか見てやらう。親爺は坐つてゐながら眼を閉ぢて、しばらくはさすつてみたり、又ぼかんと眺めてみたり、さうして鬼の眼玉を剥き出し

「あんまりいろんな事を考へちやいけません。靜かにしてゐるとぢきに好くなります」

フン、あんまりいろんな事を考へちやいけません、靜かにしてゐると肥りまさあ！ 彼等は餘計に食べるんだからいいやうなもの乃公には何のいいことがある。ぢきに「好くなります」もないもんだ。この大勢の人達は人を食はうと思つて陰になり陽になり、小盾になるべき方法を考へて、中々手取早く片付けて仕舞はない、本當にお笑草だ。乃公は我慢しきれなくなつて大聲上げて笑ひ出し、頗る愉快になつた。自分はよく知つてゐる。この笑聲の中には義勇と正氣がある。親爺とアニキは顔色を失つた。乃公の勇氣と正氣のために鎮壓されたんだ。

だが此勇氣があるために彼等はます／＼乃公を食ひたく思ふ。つまり勇氣に肖りたいのだ。親爺は門を跨いで出ると遠くも行かぬうちに「早く食べて仕舞ひませう」と小聲で言つた。アニキは合點した。偕てはお前が元なんだ。この一大発見は意外のやうだが決して意外ではない。仲間を

集めて乃公を食はうとするのは、とりもなほさず乃公のアニキだ。

人を食ふのは乃公のアニキだ！

乃公は人食の兄弟だ！

乃公自身は人に食はれるのだが、それでもやつぱり人食の兄弟だ！

五

この幾日の間は一步退いて考へて見た。たとひあの親爺が首斬役でなく、本當の醫者であつても矢張り人食人間だ。彼等の祖師李時珍が作つた「本草何とか」を見ると人間は煎じて食ふべしと明かに書いてある。彼はそれでも人肉を食はぬといふことが説き得ようか。

家のアニキと來ては、全くさう言はれても仕方がない。彼は本の講義をした時、あの口からぢかに「子を易へて而して食ふ」と言つたことがある。又一度、偶然或る好からぬ者に對して議論をしたことがある。其時の話に、彼は殺されるのが當然で、將に其肉を食ひ其皮に寝ぬべしと言つた。當時わたしは未だ小さかつたが、しばらくの間胸がドキ／＼してゐた。先日狼村の小作人が來て、肝を食へた話をする、彼は格別驚きもせず絶えず首を揺り動してゐた。そら見たこと

か、おほ根が残酷だ。「子を易へて而して食ふ」がよいことなら、どんなものでも皆易へられる。どんな人でも皆食ひ得られる。わたしは彼の講義を迂濶に聞いてゐたが、今あの時のことを考へてみると、彼の口端には人間の脂がついてゐて、腹の中には人を食ひたいと思ふ心がハチ切れるばかりだ。

六

眞黒けのけで、晝か知らん夜か知らん。趙家の犬が哭き出しやがる。

獅子に似た兇心、兎の怯懦、狐狸の狡猾……

七

わたしは彼等の手段を悟つた。手取り早く殺して仕舞ふことは、いやでもあるし、又やらうともしないのだ。罪祟りを恐れてゐるから、衆の者が連絡を取つて網を張り詰め、わたしに自害を迫つてゐるのだ。四五日このかた往來の男女の様子を見ても、アニキの行動を見ても八九分通りは悟られて來た。一番都合のいいのは、帯を解いて梁に掛け、自分で縊れて死ねば彼等に殺人の

罪名がないわけだ。さうすれば自然願ひが通つて皆大喜びで鼠泣きするだらう。しかし驚き恐れ憂ひ悲しんで死んでも、いくらか瘦せる位で萬更役に立たないことはない。

彼等は死肉を食べつゝある！——何かの本に書いてあつたことを想ひ出したが、「海乙那」といふ一種の代物がある。眼光と様子が逆も醜い。いつも死肉を食つて、どんな大きな骨でもバリバリと咬み碎き、腹の中に嚙み下して仕舞ふ。想ひ出しても恐ろしいものだが、此「海乙那」は狼の親類で、狼は犬の本家である。先日趙家の犬めが幾度も乃公を見たが、偕てこそ彼も一味徒黨で、もう接洽もすんでゐるのだらう。あの親爺がいくら地面を眺めたつて、乃公を胡魔化すことが出来るもんか。中にも氣の毒なのは乃公のアニキだ。彼だつて人間だ。恐ろしい事とも思はずに何ゆる仲間を集めて乃公を食ふのだらう。やつぱり永年のしきたりで悪い事とは思つてゐないのだらう。それとも良心を喪失して仕舞つて、知つてゐながら殊更犯してゐるのだらう。わたしは食人者を呪ふ。先づ彼から發起して食人の人達を勧誘し、又彼から先手をつける。

八

實際此種の道理は今になつてみると、彼等もわかり切つてゐるのだ。

ひよつくり一人の男が来た。年頃は二十前後で、人相はあまりハッキリしてゐないが、顔ぢうに笑ひを浮べてわたしに向つてお辭儀をした。彼の笑ひは本當の笑ひとは見えない。わたしは訊いてみた。

「人食ひの仕事は旨く行つたかね」

彼はやつぱり笑ひながら話した。

「饑饉年ぢやあるまいし、人を食ふことなど出来やしません」

わたしは彼が仲間であることにすぐ気がついた。人を食ふのを喜ぶのだらうと思ふと、勇氣百倍して無理にも訊いてやらうと思ふ。

「うまく行つたかえ」

「そんなことを訊いてどうするんだ。お前は本統にわかるのかね。冗當を言つてゐるんぢやないかな。けふは大層いい天氣だよ」

天氣もいいし月も明るい。だが乃公はお前に訊くつもりだ。

「うまく行つたかえ」

彼はいけないと思つてゐるのだらう。あいまいの返辭をした。

「いけ……」

「いけない？ 彼奴等はもう食つて仕舞つたんだらう」

「ありもしないこと」

「ありもしないこと？ 狼村では現在食べてゐるし、本にもちやんと書いてある。出来立てのほ

やほやだ」

彼は顔色を變へて鐵のやうに青くなり目を睜つて言つた。

「あるかもしれないが、まあそんなものさ……」

「まあそんなものだ。ぢや旨く行つたんだね」

「わたしはお前とそんな話をするのはいやだ。どうしてもお前は間違つてゐる。話をすればするほど間違つて来る」

わたしは跳び上つて眼を開けると、體ぢうが汗びつしよりになり、其人の姿は見えない。年頃はわたしのアニキよりはずつと若い。此奴はテッキリ仲間の一人に違ひない。屹度彼等の親達が彼に教へて、さうして又彼の子供に傳へるのだらう。だから小さな子供等が皆憎らしげにわたしを見る。

自分で人を食へば、人から食はれる恐れがあるので、皆疑ひ深い目付をして顔と顔と覗き合ふ。此心さへ除き去れば安心して仕事が出来、道を歩いても飯を食つても睡眠しても、何と朗らかなものであらう。只此一本の鬮、一つの關所があればこそ、彼等は親子、兄弟、夫婦、朋友、師弟、仇敵、各々相識らざる者までも皆一團にかたまつて、互に勧め合ひ互に牽制し合ひ、死んでも此一步を跨ぎ去らうとはしない。

朝早くアニキの所へ行つてみると、彼は堂門の外で空を眺めてゐた。わたしは彼の後ろから近寄つて門前に立ち塞がり、いとも静かにいとも親しげに彼に向つて言つた。

「兄さん、わたしは貴郎に言ひたいことがある」

「お前、言つて御覽」

彼は顔をこちらに向けて頭を動かした。

「わたしは二つ三つ話をすればいいのだが、旨く言ひ出せるかしら。兄さん、大抵初めの野蠻人は皆人を食つてゐた。後になると心の持方が違つて来て、中には人を食はぬ者もあり、其人達は質のいい方で人間に成り變り、眞の人間に成り變つた。又或者是蟲ケラ同様にいつまでも人を食つてゐた。又或者是魚鳥や猿に變化し、それから人間に成り變つた。又或者是善いことをしようとは思はず、今でも矢張り蟲ケラだ。此人を食ふ人達は人を食はぬ人達に比べてみると、いかにも忌はしい愧づべき者ではないか。恐らく蟲ケラが猿に劣るよりもつと甚しい。

易牙が彼の子供を蒸して桀紂に食はせたのはすつと昔のことだつてよくわからぬが、盤古が天地を開闢してから、すつと易牙の時代まで子供を食ひ續け、易牙の子からすつと徐錫林まで、徐錫林から狼村で捉まつた男まですつと食ひ續けて来たのかもしれない。去年も城内で犯人が殺されると、癆症病みの人が彼の血を饅頭に蘸して食つた。

あの人達がわたしを食はうとすれば、全く貴郎一人では法返しがつくまい。しかし何も向うへ行つて仲間入をしなければならぬといふことはあるまい。あの人達がわたしを食へば貴郎も亦食はれる。結局仲間同志の食ひ合ひだ。けれど一寸方針を變へて此場ですぐに改めれば、人々は太平無事で、たとひ今までの仕來りがどうあらうとも、わたしどもは今日特別の改良をすることが

出来る。なに、出来ないと被仰るのか。兄さん、貴郎がやれば吃度出来ると思ふ。此間小作人が減租を要求した時、貴郎が出来ないと撥ねつけたやうに」

最初彼は只冷笑するのみであつたが、まもなく眼が氣味悪く光つて来て、彼等の秘密を説き破つた頃には顔ぢうが眞青になつた。表門の外には大勢の人が立つてゐて、趙貴翁と彼の犬もその中に交つて皆恐るゝ近寄つて来た。或者は顔を見られぬやうに頬かぶりをしてゐたやうでもあつた。或者はやはりいつもの青面で出齒を抑へて笑つてゐた。わたしは彼等が皆一つ仲間の食人種であることを知つてゐるが、彼等の考が皆一様でないことも知つてゐる。其一種は昔からの仕來りで人を食つても構はないと思つてゐる者で、他の一種は人を食つてはいけないと知りながら、矢張食ひたいと思つてゐる者である。彼等は他人に説破されることを恐れてゐるのでわたしの話を聞くとますます腹を立て口を尖らせて冷笑してゐる。

此時アニキは忽ち兇相を現はし、大喝一聲した。

「皆出て行け、氣狂を見て何が面白い」

同時にわたしは彼等の巧妙な手段を悟つた。彼等は改心しないばかりか、すでに用心深く手配して氣狂といふ名をわたしにかぶせ、いづれわたしを食べる時に無事に辻褃を合せるつもりだ。

衆が一人の悪人を食つた小作人の話も正に此方法で、これこそ彼等の常用手段だ。

陳老五は憤々しながらやつて来た。どんなにわたしの口を抑へようが、わたしは何處までも言つてやる。

「お前達は改心せよ。眞心から改心せよ。ウン、解つたか。人を食ふ人は將來世の中に容れられず、生きてゆかれる筈がない。お前達が改心せずになれば、自分も亦食ひ盡されて仕舞ふ。仲間が殖えれば殖えるほど本當の人間に依つて滅亡されて仕舞ふ。獵師が狼を狩り盡すやうに——蟲ケラ同様に」

彼等は皆陳老五に追拂はれて仕舞つた。陳老五はわたしに勧めて部屋に歸らせた。部屋の中は眞暗で横梁と椽木が頭の上で震へてゐた。しばらく震へてゐるうちに、大に持上つてわたしの身體の上に堆積した。

何といふ重みだらう。撥ね返すことも出来ない。彼等の考は、わたしが死ねばいいと思つてゐるのだ。わたしは此重みが諺であることを知つてゐるから、押除けると、身體中の汗が出た。しかしどこまでも言つてやる。

「お前はすぐに改心しろ、眞心から改心しろ、ウン解つたか。人を食ふ奴は將來容れられる筈が

太陽も出ない。門も開かない。毎日二度の御飯だ。

わたしは箸をひねつてアニキの事を想ひ出した。解つた。妹の死んだ譯も全く彼だ。あの時妹はやうやく五歳になつたばかり、そのいちらしい可愛らしい様子は今も眼の前にある。母親は泣き續けてゐると、彼は母親に勸めて、泣いちゃいけないと言つたのは、大方自分で食つたので、泣き出されたら多少氣の毒にもなる。しかし果して氣の毒に思ふかしら……

妹はアニキに食はれた。母は妹が無くなつたことを知つてゐる。わたしはまあ知らないことにして置かう。

母も知つてゐるに違ひない。が泣いた時には何にも言はない。大方當り前だと思つてゐるのだから。そこで想ひ出したが、わたしが四五歳の時、堂前に涼んでゐるとアニキが言つた。親の病には、子たる者は自ら一片の肉を切取つてそれを煮て、親に食はせるのが好き人といふべきだ。母もさうしちやいけないとは言はなかつた。一片食へばだんくどつさり食ふものだ。けれどあの

日の泣き方は今想ひ出しても、人の悲しみを催す。これは全く奇妙なことだ。

想像することも出来ない。

四千年來、時々人を食ふ地方が今やうやくわかつた。わたしも永年その中に交つてゐたのだ。アニキが家政のキリモリしてゐた時に、丁度妹が死んだ。彼はそつとお菜の中に交ぜて、わたしどもに食はせた事がないとも限らん。

わたしは知らぬまに何程か妹の肉を食はない事がないとも限らん。現在いよく乃公の番が來たんだ……

四千年間、人食ひの歴史があるとは、初めわたしは知らなかつたが、今わかつた。眞の人間は見出し難い。

人を食はずにゐる子供は、或はあるかも知れない。

救へよ救へ。子供……

(一九一八年四月)

孔乙己

魯鎮の酒場の構へは他所とは違つていづれも皆、曲尺形の大櫃臺を往來へ向けて据え、櫃臺の内側には絶えず湯を沸かして置き、燗酒がすぐでも間に合ふやうになつてゐる。仕事をする人達は正午の休みや夕方方の手終ひにいち／＼四文錢を出しては茶碗酒を一杯買ひ、櫃臺に靠れて熱燗の立飲みをする。——これは二十年前のことで、今では値段が上つて一碗十文になつた。——若しモウ一文出して差支へなければ、筍の鹽漬や茴香豆の皿盛を取ることが出来る。若し果して十何文かを足し前すれば、葷さの方の皿盛りが取れるんだが、かういふお客様は大抵袴天著の方だから中々そんな贅澤はしない。中には身装のぞろりとした者などあつて、店に入るとすぐに隣接した別席に著き、酒を命じ菜を命じ、ちびり／＼と飲んでる者もある。

わたしは十二の歳から村の入口の咸亨酒店の小僧になつた。番頭さんの被仰るには、此奴は、

見掛けが野呂間だから上客の側へは出せない。店先の仕事をさせよう。店先の袴天著は取付き易いが、わけのわからぬことをくどく喋舌り、漆濃く絡みつく奴が少くない。彼等は人の手許をじろりと見たがる癖がある。老酒を甕の中から汲み出すのを見て、徳利の底に水が残つてゐやしないか否かを見て、徳利を熱湯の中に入れておくと、そこで漸く安心する。かういふ厳しい監視の下には、水を交ぜることなんか逆も出来るものではない。だから二三日経つと番頭さんは「此奴は役に立たない」と言つたが、幸ひに周旋人の顔が利き、斷りかねたものと見え、改めてお爛番のやうな詰らぬ仕事を受持たされることになつた。わたしはそれから日がな一日櫃臺の内側で此仕事だけを勤めてゐたので、縮尻を仕出かすことのないだけ、それだけ單調で詰らなかつた。番頭さんはいつちも佛頂面してゐなされるし、お客様は一向構つて呉れないし、これぢやいくらわたしたつて活潑になり得る筈がない。只孔乙己が店に來た時だけ初めて笑聲を出すことが出來たので、だから今だに此人を覚えてゐる。

孔乙己は立飲みの方でありながら長衫を著た唯一の人であつた。彼は身の長けが甚だ高く、顔色が青白く、皺の間にいつも傷痕が交つてゐて胡麻鹽鬚が蓬々と生えてゐた。著物は汚れ腐つて、ツギハギもせず洗濯もせず、十年も一つものでおつとほしてゐるやうだ。彼の言葉は全部が漢



文で、口から出るのは「之乎者也」ばかりだから、人が聞けば解るやうな解らぬやうな變なもので、その姓氏が孔といふのみで名前をよく知られなかつたが、或人が紅紙の上に「上大人孔乙己」と書いてから、これも亦解るやうな解らぬやうなあいまいの中に彼のために一つの確たる仇名が出來て、孔乙己と呼ばれるやうになつた。

孔乙己が店に來ると、そこにゐる飲手は皆笑ひ出した。

「孔乙己、お前の顔に又一つ傷が殖えたね」

と其中の一人が言つた。孔は答へず九文の大錢を櫃臺の上に並べ

「酒を二合爛けて呉れ。それから豆を一皿」

「馬鹿に景氣がいいぜ。これやテッキリ盗んで來たに違ひない」

とわざと大聲出して前の一人が言ふと、孔乙己は眼玉を斜き出し

「汝はなんすれぞ斯の如く空に憑つて人の清白を汚す」

「何、清白だと？ 乃公はお前が何家の書物を盗んで吊し打ちになつたのをこなひだ見たばかりだ」

孔は顔を眞赤にして、額の上に青筋を立て

「竊書は盗みの數に入らない。竊書は讀書人の爲す事で盗みの數に入るべきことではない」さうして後に續く言葉は逆も變挺なもので、「君子固より窮す」とか「者ならん乎」の類だから衆の笑ひを引起し店中俄に景氣づいた。

人の噂では、孔乙己は書物を澤山讀んだ人だが、學校に入りそこなひ、無職で暮してゐるうちにだん／＼貧乏して、乞食になりかゝつたが、幸ひに手すぢがよく字が旨く書けたので、あちこちで書物の淨寫を頼まれ、飯の種にありつくことが出来た。ところが彼には一つの悪い癖があつて、酒が大好きで飲み出すと怠け出し、注文主も書物も紙も何もかも、たちまちの中に無くして仕舞ふ。かういふことがたび／＼あつて、終には字を書いて呉れといふ人さへ無くなつた。そこで日々の暮しにも差支へ、或場合には盗みをしなすではゐられなくなつた。けれど此店では、彼は誰よりも品行が正しく、曾て一度も借り倒したことがない。現金のない時には黑板の上に暫時書き付けてあることもあるが、一月経たぬうちにキレイに拂ひを濟ませて、黑板の上から孔乙己の名前を拭き消されて仕舞ふのが常であつた。

偕て孔乙己はお碗に半分程酒飲むうちに、赤くなつた顔がだん／＼元に復して來たので、側にゐた人は又もやひやかし始めた。

「孔乙己、お前は本當に字が讀めるのかえ」

孔乙己は辯解するだけ阿呆らしいといふ顔付で、その人を眺めてゐると、彼等はすぐに言葉を添へた。

「お前はどうして半人前の秀才にもなれないのだらう」

この言葉は孔乙己に取つては大禁物で、忽ち不安に堪へられぬ憂鬱な状態を現はし、顔全體が灰色に覆はれ、口から出る言葉は今度こそソツクリ丸出しの「之乎者也」だから、こればかりは誰だつて解る筈がない。一同は此時どつと笑ひ出し、店の内外は逆も晴れやかな空氣になるのが常であつた。

此場合わたしが一緒になつて笑つても番頭さんは決して咎めないし、その上番頭さん自身がいつもかういふ問題を持出し、人の笑ひを誘ひ出すので、孔乙己は仲間脱れになるより仕方がない。さういふ時にはいつも子供を相手にして話しかける。一度わたしに話しかけたことがあつた。

「お前は本が讀めるかえ」

「……………」

「本が讀めるなら乃公が試験してやらう。茴香豆の茴の字は、どう書くんだけ知つてるかえ」

わたしはこんな乞食同様の人から試験を受けるのがいやさに、顔を素向けてみると、孔乙己はわたしの返辭を暫く待った後、甚だ親切に説き始めた。

「書くことが出来ないのならうな、では教へてやらう、よく覚えて置け。此字を覚えてみると、今に番頭さんになつた時、帳付けが出来よ」

わたしが番頭さんになるのはいつのことやら、随分先きの先きの話で、その上、内の番頭さんは茴香豆といふ字を記入したことがない。さう思ふと馬鹿々々しくなつて

「そんなことを誰がお前に教へて呉れと言つたえ。草冠の下に回数の回の字だ」

孔乙己は俄に元氣づき、爪先きで櫃臺を弾きながら大ききうなづいて

「上出来、上出来。ぢや茴の字に四つの書き方があるのを知つてゐるか」

彼は指先を酒に浸しながら櫃臺の上に字を書き始めたが、わたしが冷淡に口を結んで遠のくと真から残念さうに溜息を吐いた。

又たび／＼左のやうなことがあつた。騒々しい笑聲が起ると、子供等は何處からとなく集つて来て孔乙己を取圍む。其時茴香豆は彼の手から一つ／＼子供等に分配され、子供等はそれを食べて仕舞つたあとでも尙ほ圍を解かず、小さな眼を皿の中に萃めてゐると、彼は急に五指をひろ

げて皿を覆ひ、背を丸くして

「澤山無いよ。わしはもう澤山持つてないよ」

といふかと思ふと忽ち身を起し

「多からず、多からず、多乎哉多からざる也」

と首を左右に振つてゐるので、子供等はキャツ／＼と笑ひ出し、ちり／＼に別れゆくのである。

かういふ風に孔乙己はいつも人を愉快ならしめてゐるが、自分は決してさうあらう筈がない。ほかの人だつたらどうだらう。かうしてゐられるか。

或日のことである。大方中秋節の二三日前だつたらうと思ふ。番頭さんはぶらり／＼と帳メめに掛り、黒板を取卸して、忽ち大聲を出した。

「孔乙己は暫く出て来ないが、未だ十九錢残つてゐるよ」

そこでわたしも暫く彼の見えないことを思ひ出したが、側に酒飲んでゐる人が

「彼奴は来る筈がない。腿の骨をぶつ挫いちゃつたんだ」

「え、何だと」

「相變らず泥棒してゐたんだ。今度は彼奴も眼が眩んだね。ところもあらうに丁擧人の家に入つたんだから、な。あすこの品物が盗み出せると思ふか」

「さうしてどうした」

「どうしたツて？ 謝罪状を書くより外はあるめえ。書いたあとで叩かれ、夜中まで叩かれどほしで、もう一度叩かれたら、ポキリと言つて腿の骨が折れて仕舞つた」

「それからどうした」

「それから腿が折れたんだ」

「折れてからどうした」

「どうしたか解るものか。多分死んだらう」

番頭は其上訊かうともせず、のりくらりと彼の帳合を續けてゐた。

中秋節が過ぎてから、風は日増しに涼しくなり、見る／＼うちに初冬も近づいた。わたしは棉入を著て丸一日火の側にゐて、午後からたつた一人の客位では眶がだらりとせざるを得ない。すると忽ち何處やらで

「一杯爛けて呉れ」

といふ聲がした。よく聞き慣れた聲だが眼の前には誰もゐない。伸び上つて見ると櫃臺の下の闕の上に孔乙己が坐つてゐる。顔が瘠せて黒くなり何とも言はれぬ見窄らしい風體で、破れ捨一枚著て兩膝を曲げ、腰にアンペラを敷いて、肩から繩で吊りかけてある。

「酒を一杯爛けて呉れ」

番頭さんも延び上つて見て

「お、孔乙己か、お前に未だ十九錢貸しがあるよ」

孔乙己は迎も見惨な様子で仰向いて答へた。

「それは此次返すから、今度だけは現金で、いい酒を呉れ」

番頭さんは例のひやかしかし口調で

「孔乙己、又やつたな」

今度は彼もいつもの違つて餘り辯解もせず只一言

「ひやかしかしいけない」

といふのみであつた。

「ひやかす？ 物を盗らないで腿を折られる奴があるもんか」

孔乙己は低い聲で

「高い所から落ちたんだ。落ちたから折れたんだ」

此時彼の眼付は此話を二度と持出さないやうに番頭さんに向つて頼むやうにも見えたが、いつもの四五人はもう集つてゐたので、番頭さんと一緒になつて笑つた。

わたしは爛した酒を運び出し、鬪の上に置くと、彼は破れたポケットの中から四文錢を掴み出した。その手を見ると泥だらけで、足で歩いて來たとは思はれないが、果して其通りで、彼は衆の笑ひ聲の中に酒を飲み干して仕舞ふと、忽ち手を支へて這ひ出した。

それからすつと長い間孔乙己を見たことがない。年末になると、番頭さんは黒板を卸して言つた。

「孔乙己はどうしたらうな。未だ十九錢貸しがある」

次の年の端午の節句にも言つた。

「孔乙己はどうしたらうな。未だ十九錢貸しがある」

中秋節にはもうなんにも言はなくなつた。

それから又年末が來たが、彼の姿を見出すことが出來なかつた。そして今になつたが、たうと

明日

「聲がしない。——小さいのがどうかしたんだな」

紅鼻の老拱は老酒の碗を手に取つて、さういひながら顔を隣の方に向けて唇を尖らせた。

藍皮阿五は酒碗を下に置き、平手で老拱の脊骨をいやといふほどドヤシつけ、何か意味ありげのことをがやく喋舌つて

「手前は、手前は……又何か想ひ出してやがる……」

片田舎の魯鎮は未だ中々昔風で、何處でも大概七時前に門を閉めて寝るのだが、夜の夜中に睡らぬ家が二軒あつた。一つは咸亨酒店で、四五人の飲友達が櫃臺を圍んで飲みつゞけ、一杯機嫌の大はしやぎ。も一つは其隣の單四嫂子で、彼女は前の年から後家になり、誰にも手頼らず自分の手一つで綿絲を紡ぎ出し、自活しながら三つになる子を養つてゐる。だから遅くまで起きてる

わけだ。

この四五日絲を紡ぐ音がばつたり途絶えたが、やはり夜更になつても睡らぬのは此二軒だけだ。だから單四嫂子の家に聲がすれば、老拱等のみが聴きつけ、聲がしなくとも老拱等のみが聴きつけるのだ。

老拱は叩かれたのが無上に嬉しいと見え、酒を一口がぶりと飲んで小唄を細々と唱ひはじめた。

一方單四嫂子は寶兒を抱へて寢臺の端に坐してゐた。地上には絲車が靜かに立つてゐた。暗く沈んだ燈火の下に寶兒の顔を照してみると、桃のやうな色の中に一點の青味を見た。「おみ籤を引いてみた。願掛もしてみた。薬も飲ませてみた」と彼女は思ひまはした。

「それに未だ一向向き目が見えないのは、どうしたもんだらう。あの何小仙の處へ行つて見せるより外はない。しかし此兒の病氣も晝は軽く夜は重いのかもしれない。あすになつてお日様が出たら、熱が引いて息づかひも少しは樂になるのだらう。これは病人としていつもありがちのことだ」

單四嫂子は感じの鈍い女の一人だつたから、この「しかし」といふ字の恐ろしさを知らない。い

ろんな悪いことが、これがあるために好くなり變ることがある。いろんな好いことがこれがあるために却つて悪くなり變ることがある。夏の夜は短い。老拱等が面白さうに歌を唱ひ終ると、まもなく東が白み初め、さうして又暫くたつと白かね色の曙の光が窓の隙間から射し込んだ。

單四嫂子が夜明けを待つのは此際他人のやうな樂なものではなかつた。何てまだるつこいことだらう。寶兒の息は殆んど一年も経つやうな長さで、現在あたりがハッキリして、天の明るさは燈火を壓倒し、寶兒の小鼻を見ると、開いたり窄んだりして只事でないことがよく解る。

「おや、どうしたら好からう。何小仙の處で見て貰はう。それより外に道がない」

彼女は感じの鈍い女ではあるが心の中に決斷があつた。そこで身を起して錢箱の中から毎日節約して貯め込んだ十三枚の小銀貨と百八十の銅貨をさらけ出し、皆ひつくるめて衣套の中に押込み、戸締をして寶兒を抱へて何家の方へと一散に走つた。

早朝ではあるが何家にはもう四人の病人が來てゐた。彼女は四十仙で番號札を買ひ五番目の順になつた。

何小仙は指先で寶兒の脈を執つたが、爪先が長さ四寸にも餘つてゐたので、彼女は内心畏敬して寶兒は助かるに違ひないと思つた。しかし中々落ちついてゐられないのでせはしなく訊き始め

た。

「先生、うちの寶兒は何の病ひでせう」

「此子は身體の内部が焦げて塞がつてゐる」

「構ひますまいか」

「先づ二服ほど飲めばなほる」

「此子は息苦しさうで小鼻が動いてゐますが」

「それや火が金に尅したんだ」

何小仙は皆まで言はずに目を閉ぢたので、單四嫂子は其上きくのも羞しくなつた。其時何小仙の向う側に坐してゐた三十餘りの男が一枚の處方箋を書き終り、紙の上の字を一々指して説明した。

「此最初に書いてある保嬰活命丸は買家濟世老店より外にはありません」

單四嫂子は處方箋を受取つて歩きながら考へた。彼女は感じの鈍い女ではあるが、何家と濟世老店と自分の家は、丁度三角點に當つてゐるのを知つてゐたので、藥を買つてから家へ歸るのが順序だと思つた。そこですぐに濟世老店の方へ向つて歩き出した。

老店の番頭も亦爪先を長く伸ばしてゐる人で、悠々と處方箋を眺め悠々と藥を包んだ。單四嫂子は寶兒を抱いて待つてゐると、寶兒は忽ち小さな手を伸ばして、彼女の髪の毛を攫み夢中になつて引張つた。これは今まで見たことのない舉動だから、單四嫂子はそら恐ろしく感じた。

日はまんまると屋根の上に出てゐた。單四嫂子は藥包と子供を抱へて歩き出した。寶兒は絶えず藻搔いてゐるので、路は果てしもなく長く、行けば行くほど重味を感じ、しやうことなしに、とある門前の石段の上に腰を卸すと、身内からにじみ出た汗のために著物が冷りと肌に觸つた。一休みして寶兒が睡りついたのを見て歩き出すと、又支へ切れなくなつた。すると忽ち耳元で人聲がした。

「單四嫂子、子供を抱いてやらうか」

藍皮阿五の聲によく似てゐた。ふりかへつてみると、果して藍皮が寢不足の眼を擦りながら後ろから跟いて來た。かういふ時に天將の一人が降臨して一臂の力を添へる事が、彼女の希望であつたのだらうが、今頼みもしないで出て來たのが此阿五將だ。しかし阿五には一片の俠氣があつて、無論どうあつても世話しないではゐられないのだ。だから暫く押問答の末、遂に許されて、阿五は彼女の乳房と子供の間に臂を挿入れ、子供を抱き取つた。一刹那、乳房の上が温く感じて

彼女の顔が眞赤にほてつた。二人は二尺五寸ほど離れて歩き出した。阿五は何か話しかけたが、單四嫂子は大半答へなかつた。暫く歩いたあとで阿五は子供を返し、昨日友達と約束した會食の時刻が来たことを告げた。單四嫂子が子供を受取ると、そこは我家の眞近で、向うの家の王九媽が道端の縁臺に腰掛けて遠くの方から話しかけた。

「單四嫂子、實兒はどんな工合だえ、先生に見て貰つたかえ」

「見て貰ひましたがね、王九媽、貴女は年をとつてるから眼が肥えてる。いつそ貴女のお眼鑑で見て戴きませう。どうでせうね、此子は」

「ウン……」

「どうでせうね、此子は」

「ウン……」

王九媽はぬすまひをなほしてちつと眺め、首を二つばかり前に振つて、又二つばかり横に振つた。

家へ歸つてやうやく薬を飲ませると、十二時もすでに過ぎてゐた。單四嫂子は氣をつけて様子を見た。いくらか樂になつたらしいが、午後になつて忽ち眼を開き

「媽……」

と一聲言つたまゝ元のやうに眼を閉ぢた。睡つて仕舞つたのだらう。しばらく睡ると、額や鼻先から玉のやうな汗が一粒々々にじみ出たので、彼女はこはくさはつてみると、膠のやうな水が指先に粘りつき、あわてて小さな胸元をなでおろしたが何の響もない。彼女はこらへ切れず泣き出した。

實兒の息は平穩から無に變じた。單四嫂子の聲は泣聲から叫びに變じた。此時近處の人が大勢集つて來た。門内には王九媽と藍皮阿五の類、門外には咸亨の番頭さんやら、赤鼻の老拱やらであつた。王九媽は單四嫂子のためにいろいろ指圖をして、一串の紙錢を焼き、又腰掛二つ、著物五枚を抵當にして銀二圓借りて來て、世話人に出す御飯の支度をした。

第一の問題は棺桶である。單四嫂子は未だほかに銀の耳輪と金著せの銀簪を一本持つてゐるので、それを咸亨の番頭さんに渡し、番頭さんが引受人になつて、なかば現金、なかば掛で棺桶を一つ買ひ取ることにした。藍皮阿五は横合ひから手を出して「そんなことは一切乃公に任せろ」と言つたが、王九媽は承知せず、「お前にはあした棺桶を昇がせてやる」と凹まされて、阿五はいやな顔をして「此糞婆め」といつたまゝ口を尖らせて突立つてゐた。そこで番頭さんが此役目を引

受けて晩になつて歸つて來た。棺桶はすぐに仕事に掛らせたから夜明け前に出來上つて來るとの返辭。

番頭さんが歸つて來た時には、世話人の飯は濟んでゐた。前にも言つた通り七時前に晚餐を食ふのが魯鎮の慣はしだからだ。衆は家へ歸つて寢て仕舞つたが、阿五はまだ咸亨酒店の櫃臺に凭れて酒を飲み、老拱も又ほがらかに唱つた。

丁度その時單四嫂子は寢臺のへりに腰を卸して泣いてゐた。寶兒は寢臺の上に横たはつてゐた。地上には絲車が靜かに立つてゐる。やうやくのことで單四嫂子の涙交りの宣告が終りを告げると、扉の邊が腫れ上つて非常に大きくなつてゐた。あたりの模様を見ると實に不思議のことがある。あつたことの凡てがあつたことは思へない。どう考へてみても夢としか思へない。凡てが皆夢だ。あした覺めれば自分は寢床の中にぐつすり睡つてゐて、寶兒も亦自分の側にぐつすり睡つてゐる。寶兒が覺めれば一聲「媽」と言つて、活きた龍、活きた虎のやうに跳ね起きて遊びにゆくに違ひない。

隣の老拱の歌聲はバツタリ歇んで咸亨酒店は燈火を消した。單四嫂子は眼を見張つてゐたが、どうしてもこれがあり得ることとは信ぜられない。鳥が鳴いて東の方が白みそめ、窓の隙間から

白かね色の曙の光が射し込んだ。

白かね色の曙の光は又だん／＼緋紅色を現はした。太陽の光は續いて屋根の背を照し、單四嫂子は眼を見張つたまゝぼかんと坐つてゐると、門を叩く音がしたので、喫驚して急いで門を開けた。門外には見知らぬ男が、何か重さうなものを背中に背負つて、後ろには王九媽が立つてゐた。

おい、彼は棺桶を昇いで來たのだ。

半日掛りでやうやく棺桶を蓋することが出來た。單四嫂子は泣いたり眺めたり、何がどうあらうとも蓋することを承知しない。王九媽達は面倒臭くなり、終ひにはむつとして、棺桶の側から彼女を一思ひに引剥がしたから、そのお蔭で漸くどたばたと蓋することが出來た。

しかし單四嫂子は彼女の寶兒に對して實にもう出來るだけのことをし盡して、何の不足もなかつた。

きのふは一串の紙錢を焼き、又午前中には四十九卷の大悲呪を焼き、納棺の時には極く新しい晴著を著せ、ふだん好きなおもちやを添へ——泥人形一つ、小さな木碗二つ、ガラス瓶二本——枕邊

に置いた。あとで王九媽が指折り數へて一つ／＼引合せてみたが、何一つ手落ちがなかつた。この日藍皮阿五は丸一日來なかつた。咸亨の番頭さんは單四嫂子のために二人の工夫を雇つてやると、一人が二百と十文大錢で棺桶を昇いで共同墓地へ行つて地上に置いた。王九媽は又煮焚きの手傳ひをした。大凡手を動かした者と口を動かした者には皆御飯を食べさせた。太陽が次第に山の端に落ちかゝらんとする色合ひを示すと、飯を食つた人達も覺えず家に歸りたい顔色を示した。そして結局皆家に歸つた。

單四嫂子はひどく眩暈を感じ、一休みすると少しは好くなつたが、續いて又異様なことを感じた。彼女はふだん出遇はないことに出遇つた。有り得べきことではないが而も的確に現はれた。想へば想ふほど不思議になつた。——此部屋が忽ち非常に森として來た。身を起して燈火を點けると室内は愈々靜まり返つた。そこでふら／＼歩き出し、門を閉めに行つた。歸つて來て寢臺の端に腰掛けると、絲車は靜かに地上に立つてゐる。彼女は心を定めてあたりを見廻してゐるうち居ても立つてもゐられなくなつた。室内は非常に靜まり返つた、のみならず又非常に大きくなつた、品物が餘りにな過ぎた。

非常に大きくなつた部屋は四面から彼女を圍み、非常に無過ぎた品物は四面から彼女を壓迫し、遂には喘ぐことさへ出來なくなつた。

寶兒は慥かに死んだのだと思ふと、彼女は此部屋を見るのもいやになり、燈火を吹き消して横たはつた。彼女は泣いてあの時のことを想ひ出した。自分は綿絲を紡いでゐると、寶兒は側に坐つて茴香豆を食べてゐる。黒目勝ちの小さな眼を睜つてしばらく想ひ廻してゐたが、「媽、父はワントンを賣つたから、わたしも大きくなつたらワントンを賣るよ。賣つたら賣つただけみんなお前に上げるよ」といつた。あの時はわたしも紡ぎ出した綿絲が丸で一寸々々皆意味があるやうに思はれた。一寸々々皆生きてゐた。

だが現在どうであらう。現在のことは實際彼女に取つては何の想出の種ともならない。——わたしは前にも言つたが、彼女は感じの鈍い女だ。感じの鈍い女に何の想出があらう。只此部屋は非常に靜かだ。非常に大きい。非常にガランとしてゐるとだけ、感じればそれでいいのだ。

しかし感じの鈍い單四嫂子も魂は返されぬもの位のことは知つてゐるから、此世で寶兒に逢ふことは出來ぬものと諦めて、太息を洩らして獨言をいつた。
「寶兒や、わたしの夢に現はれてお呉れ、お前はやつぱり此土地に残つてゐてね」
そこで眼をつぶつて早く眠つて寶兒に會はうとすると、自分の苦しい呼吸が此靜かなガランド

ウの中を通過するそれがハッキリ聞えた。

單四嫂子は遂にうつら／＼と夢路に入つた。室内は全く森閑とした。

此時、隣の赤鼻の小唄が丁度終りを告げた頃で、二人はふら／＼と咸亨酒店を出たが、老拱はもう一度喉を引搾つて唱ひ出した。

「憎くなるほど、可愛いお前、一人であるのは淋しかろ」

「アハ、、、」

藍皮阿五是手を伸ばして老拱の肩を叩き、二人は笑つたり押合つたり揉み苦茶になつて立去つた。

單四嫂子はもう睡つて仕舞つた。老拱等が出て行つたので咸亨酒店は店を閉めた。此時魯鎮は全く静寂の中に落ち、只此暗夜が明日に成り變ることを想はせるが、此静寂の中にも尙ほ奔る波がある。別に幾つかの犬がある。これも黒暗に躲れてオーオーと啼く。

(一九二〇年六月)

些細な事件

わたしは在所から都の中に飛込んで来て、一寸まばたきしたばかりでもう六年経つて仕舞つた。その間、耳にもし眼にも見た所謂國家の大事といふものは、勘定してみると随分少くないが、わたしの心の中には何の跡方も残らない。若し其事に就いて影響を説けと言つたら、只わたしの悪い癖を増長させるだけのことだ。——實を言へば、これがわたしをして日に／＼見るに足らない人間ならしめてゐるのだ。

だが爰に一つの小さな出来事があつて、それがわたしに取つては却つて意義があり、わたしを悪い癖の中から引放し、今に至つても忘れることの出来ないものである。

民國六年の冬、北風が猛烈に吹きまくつた。其頃わたしは仕事の都合で毎朝早く往來を歩かなければならなかつた。通りすぢには殆んど人影を見なかつたが、しばらくしてやつと一臺の人力

車をめつけ、それを雇つてS門まで挽かせた。まもなく風は小歇みになり、路上の浮塵はキレイに吹き拂はれて、行先には眞白な大道が一寸ぢ残つてゐた。車夫は勢込んで馳け出し、S門に近づいた時、車は忽ち人を引掛けてふら／＼と挽き倒した。

躓いたのは白髪交りの一人の女で著物はひどく破れてゐた。彼女は車道の隅から車の前を突然突切らうとしたので、車夫はこれを避けたが、彼女の破れた袖無しに釦がなかつた爲め、風に煽られて外に廣がり、梶棒に引掛つた。幸に車夫の方で素早く足を留めたからよかつたもので、でなければ彼女は大きな翻筋斗を一つ打つて、ひつくりかへり、頭から血を出したことだらう。

彼女は地に伏した時車夫は足を留めた。

わたしは、此老女が怪我した様子も見えないし、ほかに見てゐる人もないから、餘計なことして附け込まれ、手間を取つては困ると思ひ

「何でもないよ。早く行つて呉れ」

と車夫を促し立てた。車夫は肯き入れず——或は聞えなかつたかもしれぬ——轆を下におろし、その老女をいたはり扶け起し、身體を支へながら彼女に訊いた。

「どうかなさいましたか」

「突傷が出来ました」

わたしの見たところでは彼女はふら／＼と地に倒れて怪我する筈もないのに、甘くすれば附上る、本當に憎らしい奴だ、車夫も亦餘計なこととして自ら苦勞を求めてゐるのだから勝手にしやがれ、と思つた。しかし車夫は老女の言葉を聞くと少しも躊躇せず、そのまゝ彼女の臂を支へて一歩一歩先へ進んだ。

わたしは不思議に思つて前の方を見ると、そこに巡査の派出所があつた。大風の後で外には誰一人見えない。あの車夫があつた老女を扶けながら丁度大門の方へ向つて歩いてゐる。

わたしは此時突然一種異様な感じを起した。全身砂埃を浴びた彼の後影が、刹那に高く大きくなり、その上行けば行くほど大きくなり、仰向いてやうやく見える位であつた。而もそれはわたしに對して次第々々に一種の威壓になりかはり、果ては毛皮の著物の内側に隠された「小さなもの」を搾り出さうとさへするのである。

わたしの活力は此時多分停滞してゐたのだらう。ぢつと坐つたまゝで、派出所の中から一人の巡査が歩き出して来るまでは何の思付もなく、それを見てから漸く車を下りた。巡査はわたしに近づいて言つた。



「貴郎は雇ひ車でせう。あの車夫は貴郎を挽いてゆくことが出来ません」

わたしは思ひめぐらすまでもなく、外套のポケットから銅貨を一攫み出して巡査に渡した。

「どうぞ之れを貴郎から車夫に渡して下さい」

風はすつかり止んで往來はいとも静かであつた。わたしは歩きながら考へたが殆んど自分のことと思ひ及ぶことを恐れた。以前のことは皆て措き、今のあの銅貨一攫みは一體どういふわけなんだえ？ 彼を奨励する積りか？ わたしはこれでも車夫を裁判することが出来るのか？ わたしは自分で答ふことが出来ない。

このことは今でも未だ時々想ひ出し、わたしは之に因つて時々苦痛を押し切り、務めて自身に想到しようとする。幾年來の文治と武力は、わたしが幼少の時讀み馴れた「子曰詩云」のやうに、今其半句すらも誦誦し得ないが、たつた一つ此小さな事件だけは、いつもくわたしの眼の前に浮んで、時に依ると却つて一層明かになり、わたしをして慚愧せしめ、わたしをして日々新たに新たらしめ、同時に又わたしの勇氣と希望を増進する。

(一九二〇七月)

頭髮の故事

日曜日の朝、わたしは剃取曆のきのふの分を一枚あけて、新しい次の一枚の表面を見た。

「あ、十月十日——けふは雙十節だつたんだな。此曆には少しも書いてない」

わたしの先輩の先生Nは、折柄わたしの部屋に暇潰しに來てゐたが、此話を聞くと非常に不機嫌になつた。

「彼等はそれでいいんだ。彼等は覺えてゐないでも、君はどうしやうもないぢやないか。君が覺えてゐてもそれが又何になる」

このN先生といふ方は本來少し變な癖があつて、ふだん一寸したことに腹を立て、ちつとも世間に通ぜぬ話をする。さういふ時にはいつもわたしは彼一人に喋舌らせて一言も合槌を打たない。彼は一人で議論を始め、一人で議論を完結すればそれで納得するのだ。

彼は説く。

「わたしは北京の雙十節の次第を最も感服するのである。朝、警官が門口に行つて『旗を出せ』と吩咐ける。彼等は『はい、旗を出します』と答へる。何處の家でも大概は不承々に一人の國民が出て来て、斑點だらけの一枚の金巾を掲げて、かうしてすつと夜まで押しとほし——旗を収めて門を閉めるのであるが、そのうち幾軒は偶然取忘れて次の日の午前まで掲げて置く。彼等は記念日を忘れ、記念日も亦彼等を忘れる。

わたしも此記念日を忘れる者の一人だが、倘し想ひ出すとすれば、あの第一雙十節前後のことで、それが一時に胸に迫つて来て、いろいろの故人の顔が皆眼の前に浮び出し、居ても立つてもゐられなくなる。幾人の青年は、十年の苦心空しく、暗夜に一つの彈丸を受けて彼の命を奪られたことや、幾人の青年は暗殺に失敗して監獄に入れられ、月餘の苦刑を受けたことや、幾人の青年は遠大の志を抱きながら、忽ち行方不明になつて首も身體も何處へ行つたか知らん——彼等は社會の冷笑、惡罵、迫害、陷穽の中に一生を過し、現在彼等の墓場は早くも忘却され、次第々に地ならしされてゆく。わたしは此等の事を記念するに堪へない。それよりもわたしは今だに覺えてゐる小氣味のいい話をして聞かせよう」

Nは忽ち笑顔になり、手を伸ばして自分の頭を撫でまはしながら、聲高に語つた。「わたしの最も得意としたのは、最初の雙十節以後のことで、其時はもうわたしが道を歩いて人も人から笑はれることがない。

老兄、君は知つてるだらうが、髮の毛はわれ／＼中國人の寶であり、且つ敵である。昔から今までどれほど多くの人が、此頂きのために何の直打もない苦しみを受けてつゝあつたか？

すつと昔のわれ／＼の古人に就いて見ると、髮の毛は極めて軽く見られてゐたらしい。刑法に據れば人の最も大切なものは頭腦だ。それゆゑに大辟は上刑である。次に必要なものは生殖器である。それゆゑに宮刑と幽閉は、これも又人を十分威嚇するに足る罰である。髡に至つては微罪中の微罪だが、曾てどれほど多くの人が、くり／＼坊主にされた爲め、彼の社會から彼の大事な一生を蹂躪されたか知れん。

われ／＼は革命の講義をする時、楊州十日（清初更俗強制的殺戮）とか、嘉定屠城とか大口開いて言つたものだが、實は一種の手段に過ぎない。ひらたくいふと、あの時の中國人の反抗は亡國などのためではない、たゞ辮子を強ひられた爲に依るのだ。

頑民は殺し盡すべし、遺老は壽命が來れば死ぬ。辮子はもはやとどめ得た。洪、揚（長髮賊の領

袖(が)又もや騒ぎ出した。わたしの祖母が曾て語つた。その時の人民ほど艱いものはない。髪を蓄へて置けば官兵に殺される、辮子を付けて置けば長髮賊に殺される。

どれほど多くの中國人が此の痛くも痒くもない髪のために苦しみを受け、災難を蒙り、滅亡したか知れん」

Nは二つの眼を睜つて屋根裏の梁を眺め、しばらく思ひめぐらして尙ほ説き續けた。「まさか髪(の)毛(の)苦しみが、わたしの番に廻つて来ようとは思はなかつた。

わたしは留學に出るとすぐに髪を切つた。これは別に深い意味があつたわけではなく、只これがあるとなにかにつけて不便を感じるからだ。ところが、爰に意外にも何程かの同窓生——頭の上にぐる／＼と辮子を巻きつけた彼等が先づ甚だわたしを嫌ひ出し、監督も大に怒つて、わたしの學費の支給を差留め、中國に送り返すと言つた。幾日も経たぬうちにこの監督さん自身も人から辮子を剪られて逃走した。剪り取る人達の中には革命軍の鄒容といふ人もゐた。この人もそれがたぬ二度と留學することが出来ず、上海に歸つて来て、後には租界監獄の中で死んだが、君はもうとうに忘れて仕舞つたらうな。

四五年経つと家の都合が大分以前とは違つて来て、何か些細の仕事でもしなければ餓ゑさうに

なるので是非なく中國に歸つて来た。わたしは上海に著くや否や、一本の假辮子を買取り——その時二圓の市價であつた——家へ歸るまで付けて歩いた。母親は結局なんにも言はなかつたが、よその人は一目見ると先づ其辮子に就いて研究し始め、それが似非物であると思つて、すぐに冷笑を浴せかけ、わたしを斷頭の罪名に當てた。本家にあたる或者はわたしをお上に訴へる準備までしたが、後で革命黨が謀叛を起して或は成功するかも知れないと思つてこれだけは止めた。考へてみると似非物は眞物のザックバランに優ることはない。こでいつそのこと、辮子を廢し、洋服を着て、大手を振つて往來を歩いた。

街を通ると街中が笑ひ聲になつた。中には後へ跟いて来て罵る者がある。

『唐變木』
『假洋鬼』

そこでわたしは洋服を着ずに支那服に改めると、彼等の惡罵は一層激しくなつた。

いよく／＼せつば詰つた時、わたしは手に一本のステッキを持つて出掛け、さういふ奴等を片端から叩きのめした。で、彼等はやうやく罵らなくなつたが、未だ打つたことのない新しい地方へ行くことやつぱり罵られた。わたしは此事に就いて非常に悲哀を感じ、今も時々思ひ出すのである。

それはわたしの留學中に新聞に掲載された本田博士の南洋及び中國視察談である。この博士は支那語も馬來語もわからなかつた。或人が「君は話が出来ないでどうして旅行する」と聞くと、博士は持つてゐたステッキを示し、「これが即ち彼等の言葉さ。これさへあれば皆解る」と答へた。わたしは此記事を見た當座、腹が立つて三日ばかり飯も食へなかつた。ところがわたしは知らず知らず自分でそれをやつてゐたのだ。而もそれが彼等に對して一番よくわかるのだ。

宣統初年わたしは當地で某中學の校長を勤めてゐたが、同僚には嫌はれ、官僚には警戒され、終日氷倉の中に坐つてゐるやうな、刑場の側に立つてゐるやうな憂鬱さを感じたが、實は何をしなわけでもない、只一本の辮子がなかつたからだ。

或日のこと四五人の學生が突然わたしの部屋に入つて來た。

「先生、わたし達は辮子を剪らうと思ひますが」

「いけません」

「辮子がある方が好う御座いますか、無い方が好うございますか」

「無い方がいい」

「ではなぜいけないと被仰るのですか」

「する事が出来ないのです。お前達は未だ剪らない方がいい。待つてゐなさい」

彼等は何も言はず口を尖らせて出て行つた。さうして結局剪り取つて仕舞つた。

おや、まづいゝ、人聲がガヤ／＼した。わたしはそれでも知らん振りして、彼等のイガ栗頭と辮子頭と一緒に交つて講堂に登るに任せた。

さはさりながら此髮斬病は傳染した。三日目には師範學堂の學生が忽ち六本の辮子を剪り落した。晩になると六名の學生は隔離された。此六名は學校に行くことも出來ず、家へ歸ることも出來ず、ずつと第一雙十節の後まで、一ヶ月餘りも愚圖々々として、やうやく犯罪の烙印が消えた。

わたしはね、わたしも矢張り同様だつた。元年の冬、北京へ行く人と人から幾度も罵られたが、後ではわたしを罵つた人が警察で辮子を剪られた。それから二度と人に罵られたことがない、しかし田舎は知らない」

Nは非常に得意になつたが、忽ち沈んだ色を現はした。

「現在君達一派の理想家が爰に又女子の斷髮云々を八釜しく説いてゐるが、それは少しも得る處無くして、却つていろ／＼の苦痛を造り出すのだ！

現在すでに髮を斬つた女がそれに因つて學校へ入學が出來ず、或は學校から除名されつゝあるで

はないか。

改革するにも、武器がない。苦學するにも働く工場が何處にある。

やはり元のやうに娘を人の家に嫁にやり、一切を忘れしむるのが、反つて幸福だ。彼女をして怒ひ自由平等の話を覚えさせたら、それこそ一生涯の苦痛だらう。わたしはアルチバセフの言葉を借りて君達に訊ねる。君達は黄金時代の出現をこゝらの人達に豫約した。しかしこゝらの人達は一體何を興へられたか。

おゝ、造物の皮鞭が中國の脊髓の上に至らぬ時、中國は即ちとこしへに此一様の中國である。それ自身は決して一枝毫末の改變をも肯き入れない。

君達の口の中には毒牙のあり得る筈がない。併し何故に『蝮蛇』の二大文字を額の上に貼りつけて、ひたすら乞食を引張り出して打殺さうとするのか

Nの話は益々冴えて來たが、わたしの顔色が、あまり聞きたくないやうであると見るや、忽ち口を噤んで立上り帽子を取つた。

「歸るのか」

「ウン、雨が降りさうだからな」

わたしは黙々として彼を門口に送り出した。彼は帽子をかぶつて言った。

「いづれ又會はうよ。お邪魔して濟まなかつた。あすはいい挨拶に雙十節でないから、我々は何もかも忘れしう」

(一九二〇年十月)

風 波

河沿ひの地面から、太陽はその透きとほつた黄いろい光線をだん／＼に引上げて行つた。河端の烏臼木の葉はから／＼になつて、やうやく喘ぎを持ち堪へた。いくつかの藪蚊は下の方に舞ひさがつて、ぶん／＼と呻つた。農家の煙筒のけむりは刻一刻と細くなつた。女子供は門口の空地に水を撒いて、小さな卓子と低い腰掛をそこに置いた。誰にもわかる。もう晩飯の時刻が來たのだ。

老人と男たちは腰掛の上にすわつて無駄話をしながら大きな芭蕉團扇をゆらめかした。子供等は飛ぶが如くに馳け出した。或者は烏臼木の下にしやがんで賭けをして石コロを投げた。女は眞黒な干葉と松花のやうな黄いろい御飯を持ち出した。熱氣がもや／＼と立上つた。文人の酒船は河中を通つた。文豪は岸を眺め大に興じた。「苦勞も知らず、心配も知らず、こ

れこそ眞に田家の楽しみぢや！」

けれど文豪の此話は些か事實に背反してゐる。彼は九斤老太太の話をきゝのがしてゐたからだ。此時九斤老太太は不平の眞ツ最中であつた。「わしは命あつて七十九のけふまで生き延びたが、あまり長生きをし過ぎた。わしは世帯くづしの此さまを見たくはない。いつそ死んだ方が増しぢや。もうぢき御飯だといふのに、又煎り豆を出して食べをるわい。これぢや子供に食ひつぶされて仕舞ふわ」

彼の孫娘の六斤は丁度、一掴みの煎り豆を握つて眞正面から馳け出して來たが、此様子を見て、すぐに河べりの方へ飛んで行き、烏臼木の後ろに藏れて、小さな蝶々とんぼの頭を伸ばして「死にそこなひの糞婆」と囃し立てた。

九斤老太太は年の割に耳が敏かつた。けれど今の子供の言葉はつい聴きのがした。さうしてなほ獨言を續けた。「ほんとにこんな風では代々落ち目になるばかりだ」

此村には特別の習慣があつて、子供が出來ると秤に掛け、斤目に依つて名前を附ける。九斤老太太は五十の年を祝つてから、だん／＼と不平家になつた。彼女はいつも若い時の事をはなして、

天氣はこんなに熱くはなかつた、豆はこんなに硬くはなかつた、と、なんでも皆、今の世の中が悪くて昔の世の中がいいのだ。況して六斤は彼の祖父の九斤に比べると三斤足りない。彼の父の七斤に比べると一斤足りない。これこそ本當に正直正銘の事實だから彼女は、「代々落ち目になるばかりだ」と固く言ひ張るのである。

七斤ねえさんといふのは、彼女の倅の媳である。その時七斤ねえさんは飯籃をさげて卓の側に行き、卓上に飯籃を投げ卸してプリ／＼腹を立てた。「おばあさん、又そんなことを言つてゐるよ。内の六斤が生れた時には六斤五兩ありましたよ。内の秤は自家用の秤ですから掛目があつたので、十八兩が一斤です。若し十六兩秤をつかへば六斤は七斤餘りになります。わたしはさう思ふの。曾祖父や祖父は屹度十四兩秤をつかつたんですよ。普通の秤に掛ければ、せいぜい九斤か八斤位のもんです」

「代々落ち目になるばかりだ」九斤老太は同じ事を繰返した。

七斤ねえさんは之れに對して未だ答へもせぬうちに忽ち七斤が露路口から現はれた。そこで彼女は夫に向つて怒鳴りつけた。

「お前さん、なんだつて今時分歸つて來たの。何處へ行つてけつかつたの。人がお前の御飯を待つてゐるのが解らねえのか。此馬鹿野郎！」

七斤は田舎に住んではゐるが少しく野心を持つてゐた。彼の祖父から彼の代まで三代鋤鋤を取らなかつた。彼も亦先代のやうに人のために通ひ船を出してゐた。毎朝一度魯鎮から城へ行つて夕方になつて歸つて來た。さういふわけで中々世事に通じてゐた。例如ば何處其處では雷公が蜈蚣のお化けを劈き殺した。何處其處では箱入娘が夜叉のやうな子を生んだ。といふやうなことで好く知つてゐた。彼は村人の中では確かにもう指折の人物になつてゐた。けれど夏は燈火のつかぬうちに食事をするのが農家の慣はしであるから、歸りが遅くなつて鼻に小言をいはれるのは無理もないことである。

七斤は象牙の吸口と白銅の雁首の附いてゐる六尺餘りの斑竹の煙管を手にして、頭を低げてぶらぶら歩いて來た。彼は庭内に入つてひくい腰掛の上に腰を卸すと、六斤はそれをいいしほにして彼のそばに馳け寄り、お父さんと言つたが返辭もしない。

「代々落ち目になるばかりだ」九斤老太は又同じことを言つた。

七斤はそろ／＼頭を上げて溜息を吐き

「天子様がおかくれになつたさうだね」

七斤ねえさんは暫く呆れ返つてゐたが、急に何か思付き、「そりやあ、いい按排だね。天子様

がおかくれになれば大赦があるんだよ」

七斤は又溜息を吐き「乃公は辯子がな」

「天子様は辯子が要るのかね」

「天子様は辯子が要る」

「お前はなぜ知つてゐるの」七斤ねえさんは少しせき込んでせはしなく訊いた。

「咸亨酒店の中にある人が、皆さう言つてゐる」

七斤ねえさんは此言葉をきくとハツとした。これは決していいことぢやない。咸亨酒店へ行けば世間のことが皆わかる。さう思つて七斤の方に眼を移すと、そのざんぎり頭が馬鹿に目立つたので、腹が立つて堪らなくなり、彼を咎め、彼を悔み、彼を怨んだが、急に又焼け糞になつて、一杯の飯を高々と盛上げ七斤の眼の前に突きつけ、「お前さん、早くおまんまを食べておしまひなさいよ。泣きつ面をしたつて今更辯子が延びるもんぢやない」

太陽は末端の光線を收め盡して、水面はしのびやかに涼氣を回復した。地面の上にはお碗とお箸の響がした。人々の脊筋の上には又汗粒を吐き出した。七斤ねえさんは三碗の飯を食ひ完つて、ふと頭を上げると、胸の中が止め度なくはずんで來た。彼女は烏白木の葉影を通して、ちびの太つちよの趙七爺を見付け出したからである。彼はお納戸色のリンネルの長衫を着て、丁度今獨木橋の上を歩いて來るのであつた。

趙七爺は隣村の茂源酒店の主人である。五里四方の内ではたつた一人の圖抜けた人物で兼ねてなかくの學者先生である。彼は學問があるので些か遺老の臭氣がある。彼は十何冊ほどの金聖歎の批評した三國志を持つてゐる。坐つてゐるときにはいつも一字々拾ひ讀みして、五虎將の姓名を説きあかすのみならず、黄忠の字が汗升、馬超の字が孟起などといふことまで知つてゐる。革命以後、辯子を頭のでツペンに巻き込んで道士のやうな風體をしてゐたが「若し趙子龍が世に在らば、天下はこれほどまでに亂れはしない」といつも歎息してゐた。七斤ねえさんの眼力は確かだ。けふの趙七爺は以前のやうな道士ではない。つる／＼として頭の皮の頂上に、眞黒な髪の毛のあるのを早くも認めた。皇帝が崩御して、辯子が是非とも必要で、七斤の身の上に非常な危険のある事を彼女は察した。といふのは趙七爺の此リンネルの長衫は、ふだん無暗に著るもの

でない。三年このかた彼が此著作物に手を通したのは只の二度切りで、一度は彼の大きらひな瘡瘡の阿四が病氣した時、もう一度は彼の店の店を叩き壊した魯太爺が死んだ時だ。さうして今が丁度三度目だ。屹度これは彼自身に喜びがあつて、彼の仇の家に殃ひごとがあるのだ。

七斤ねえさんは覺えてゐる。二年前に七斤は酔拂つて一度、趙七爺を「賤胎」と罵つたことがある。そこで今たちどころに七斤の危険を直覺して、胸の中がドキン／＼と跳ね上つた。

趙七爺はずん／＼進んで来た。坐つて飯を食つてゐた人は皆立上つて、箸を自分の飯碗に差向け「七旦那、わたしどもと一緒に此處でお支度をなさいませ」

七爺は頻りにうなづいて「どうぞお構ひなく」といひながら、ずつと七斤家の食卓の側へ行つた。七斤達はのべつにお愛想をいふと、七爺は微笑を含んで「どうぞお構ひなく」を繰返しながら、彼等のお菜をこま／＼と研究し始めた。「いい匂ひの干葉だね。——風の吹くたんびにいい薫りがするよ」趙七爺は七斤の後ろに立つて、七斤ねえさんに向う側に眺めてこんな事を言つた。

「天子様がおかくれになつたのですか」と七斤はきいた。

七斤ねえさんは七爺の顔を見ると、せい一杯にお世辭笑ひをして「天子様がお隠れになつたら、いづれ大赦があるので御座いませうね」

「大赦ですか——大赦はいづれそのうち、どうしてもある筈です」と七爺はさう言つて仕舞ふと急に語氣を荒くした。

「だがお前の家の七斤の辮子はどうしたのだ。辮子は？ これはどうしても大事なことだ。お前達は知つてゐるだらうが長毛(長髮賊)の時、髪を留める者は頭を留めず、頭を留める者は髪を留めず」

七斤と彼の女房は本を讀んだことがないから、此引き事の奥妙を悟ることは出来なかつたが、何しろ學問のある七爺がこんな風にいふのだから事情が大變面倒で取返しつかぬものと察し、丸で死刑の宣告を受けたやうに、耳朶の中がガアンとして、もはやぐうのねも出なくなつた。

「代々落ち目になるばかりだ」九斤老太は不平の眞ツ最中であつたから、此機に乗じて趙七爺に向ひ「今の長毛(革命黨)は人の辮子を剪るので、坊さんだか、道士だか、見分けのつかぬ頭になつた。昔の長毛(長髮賊)はこんなもんぢやない。わたしは七十九まで生き延びて、長生きをし過ぎた。昔の長毛はキチンとした紅緞子で頭を包み、後ろの方へ下げてすつと後ろの方へ下げて、脚の跟の方まで下げた。王様は黄緞子でこれも後ろへ下げてゐた。黄緞子、紅緞子、黄緞子——わたしは長生きし過ぎた。七十九歳だ」

「代々落ち目になるばかりだ」九斤老太は不平の眞ツ最中であつたから、此機に乗じて趙七爺に向ひ「今の長毛(革命黨)は人の辮子を剪るので、坊さんだか、道士だか、見分けのつかぬ頭になつた。昔の長毛(長髮賊)はこんなもんぢやない。わたしは七十九まで生き延びて、長生きをし過ぎた。昔の長毛はキチンとした紅緞子で頭を包み、後ろの方へ下げてすつと後ろの方へ下げて、脚の跟の方まで下げた。王様は黄緞子でこれも後ろへ下げてゐた。黄緞子、紅緞子、黄緞子——わたしは長生きし過ぎた。七十九歳だ」

七斤ねえさんは立上つて誰にいふともなく喋つた。「こりやあ、どうしたら好からう。お婆さんも子供も内の者は皆あの手に頼つて暮してゐるのだ」

趙七爺は頭を揺つて言つた。「どうあつても仕方がない。辨子の無い者はこれ／＼の罪に當ると一條々々、書物の上に明白に出てゐる。家族が何人あらうともそんなことは頓著しない」

七斤ねえさんは書物の上に書いてあると聽いてすつかり絶望した。自分ひとりで慌てたところがしやうがないので忽ち恨みを七斤に移し、箸を取つて彼の鼻先きへつきつけ「これは臍抜けのお前が自分で撒いた種だよ。わたしはとうから言つてゐたんだ。船を出してはいけません、お城へ行つてはいけませんと。ところがあの時どうしても肯かないで、お城へころげ込んで行きやがつた。お城へ行くとすぐに辨子を切られて仕舞つた。あの時お前の辨子は黒絹のやうに光つてゐたが、今のさまを見る。坊主とも道士ともつかない變な頭になつて仕舞つた。お前は自業自得で仕方がないが、卷添へを食つたわたし達をどうして呉れるんだえ。活き腐れめ、咎人め」

村人は趙七爺が村へ來たのを見てみな大急ぎで飯を濟まして、七斤家の食卓のまはりに聚まつた。七斤は自分自身を指折の人物と信じてゐるのに、人前で女からこんな風にコキおろされては甚だ體裁が好くない。そこでぜひなく頭をあげて愚圖々々言つた。

「お前は今こそそんな事をいふが、あの時は……」

「なんだ。活き腐れめ、咎人め」

見物人の中で、八一ねえさんは心掛けの極くいい人であつた。彼女は二歳の忘れがたみを抱いて、七斤ねえさんの側で騒動の成行きを見てゐたが、此時心配のあまり慌てて口をきいた。「七斤ねえさん、もういいよ。人は神様でないから、誰だつて未來のことは分りません。あの時お前は何とも言はないのは、辨子が無くとも好かつたんぢやないか。況してお役所の旦那はいまだに御布れを出さないのを見ると――」

七斤ねえさんはしまひまで聽かぬうちに、もう二つの耳朶を眞赤にして箸を持つて振向き、それを八一ねえさんの鼻先きへ差しつけ「おや／＼、これは又妙なことを聞くもんだね、八一ねえさん、わたしはどう考へてみても、こんな出鱈目を言はれる覺えはありません。あの時わたしは三日の間泣きとほして此六斤の餓鬼までも連れ泣きしたのは、誰も皆知つてゐることです」

その時六斤は大きなお碗の中の飯を食ひ完つて、空碗を持上げ、手を伸ばして「お代り」と言つた。七斤ねえさんはいら／＼してゐたので、丁度六斤の蝶々／＼の眞上にあつた箸をあげて、急に下したから六斤の頭のまん中を叩きつけたわけである。「誰がお前に口出ししろと言つたえ。」

此間男の小寡婦め！」と大きな聲であてつけた。

ガランと一つ音がして、六斤の手の中の空碗が地のうへへころげ落ち、煉瓦の角にぶつかつて大きな缺け口が出来た。七斤は跳び上つて缺け碗を取上げ、破片を拾つて合せてみながら「畜生」と一つばやいて六斤を叩きのめした。九斤老太は泣き倒れてゐる六斤の手を取つて引越し「代々落ち目になるばかりだ」といひつゞけて一緒に歩き出した。

八一ねえさんも怒り出した。「七斤ねえさん、お前は棒を恨んで人を打つのだよ……」

趙七爺は初めから笑つてゐたが、八一ねえさんが「役所の旦那が御布れを出さない」と言つた時から、些か機嫌を損じて卓のまはりを歩き出し、此時すでに一周し完つて話を引取つた。「棒を恨んで人を打つ。それがなんだ。大兵が今にも此處へ到着するのをお前達は知らないのか。今度おいでになるのは張大帥だ。張大帥はすなはち燕人張翼徳の後裔で、彼が一度丈八の蛇矛を支持へて立つと、萬夫不當の勇がある。誰だつて彼に抵抗することは出来ない」

彼は両手をひろげて空拳を振り上げ、宛ら無形の蛇矛を握つてゐるやうな體裁で、八一ねえさんに向つて幾歩か突進した。「お前は彼に抵抗することが出来るか」

八一ねえさんは腹立ちのあまり子供を抱へて顛へてゐると、顔ぢう脂汗の趙七爺が忽ち眼を睜

つて突進して來たのでこはくなつて、言ひたいことも言はずにすた／＼歩き出した。

趙七爺もすぐ其跡に跟いて歩いた。衆人は八一ねえさんの要らぬ差出口を咎めながら通り路をあけた。剪り去つた辮子を延ばし始めた者が、幾人か交つてゐたが、早くも人中に躲れて彼の目を避けた。趙七爺はそんなものには目も呉れず人中を通り過ぎて、忽ち烏白木の陰に入り、「お前は抵抗することが出来るか」といひながら獨木橋の上へ出て悠々と立去つた。

村人はぼんやり突立つて腹の中でちつと考へてみると、乃公達は確かに張翼徳に對して抵抗は出来ない。さうすると七斤の命は確かに無いものだ。七斤は既に掟を犯した。想ひ出すと彼はいつも人に對して城内の新聞を語る時、長煙管を銜へて傲慢不遜の態度を示してゐたが、これは實に不埒なことで、今度の犯法に就いてもいくらか小氣味好く思はれた。彼等は何か議論を吐いてみようとしたが、議論の根據がないので、矢鱈にがん／＼騒いでゐると、藪蚊は素つ裸の腕に突當つて烏白木の下に飛び行き、そこに蚊の市をなした。そのうち彼等もぶら／＼歩き出しておのおの家に歸つた。七斤ねえさんもぶつ／＼言ひながら皿小鉢やテーブルを片付け、家に入つて門を閉めた。

七斤は缺け碗を持つて部屋に入り、闔の上に腰掛けて煙草を吸つてみた。何しろ非常な心配事

で、吸ひ込むのを忘れてゐると、象牙の吸口から出た六尺あまりの斑竹の先きにある白銅の火皿の中の火の光が、だん／＼と黒ずんで来た。彼は心の中で大變あぶなくなつたと思つたが、どういふ風にしていいのか、どんな計らひをしていいのか、非常にぼんやりして掴みどころがなかつた。

「辨子はね、辨子だ。丈八の蛇矛。代々落ち目になるばかりだ。天子様はお匿れになる。壊れたお碗は町へ持つてつて釘を打たせればいい。誰が抵抗することが出来るか。書物の上に一條々書いてある。畜生！……」

第二日の朝早く七斤はいつもの通り魯鎮から通ひ船を漕いでお城へ行き、晩になると又魯鎮に歸つて来た。けふは六尺の斑竹の煙管の外に一つのお碗を持つて来た。彼は晩飯の席上で九斤老太に向ひ、此お碗を城内で釘付けすると缺口口が大きいから銅釘が十六本要つた。一本が三文で皆で四十八文かかつた。

九斤老太は甚だ不機嫌だつた。「代々落ち目になるばかりだ。わしは長生きをし過ぎた。釘一つが三文。むかしの釘はそんなものではない。むかしの釘は何だ……わしは七十九になつた」

それから後でも七斤は日々に入城したが、家内はいつも薄闇かつた。村人は大抵廻避して彼が城内から持つて来た珍談を聞きに来ようとしなかつた。七斤ねえさんはいい機嫌になつてゐられない。いつも「咎人」と彼を罵つた。

十日ばかり過ぎて七斤は城内から歸つて来ると彼の女房は大層嬉しさうだ。「お前は城内で何か聞いておいでだらうね」

「なんにも聴かなかつた」

「天子様はお匿れにならないのだらう」

「彼奴等は何とも言つてゐなかつた」

「咸亨酒店の中で何とか言つてゐた人はなかつたかね」

「なんとも言つてゐなかつた」

「わたしは屹度天子様はお匿れにならないと思ふよ。わたしはけふ趙七爺の店の前を通ると、あの人は坐つて本を讀んでゐたが、辨子は前のやうに頭の上にまるめてゐたよ。そして長衫は著てゐなかつた」

「……………」

「お前はどう思ふ。ね、お匿れにならないのだらう」

「さうだね。お匿れにならないのだらう」

今の七斤は早くも又、七斤ねえさんと村人から相當の尊敬と相當の待遇を拂はれるやうになつた。夏になると彼等は以前のやうに自分の門口の空地の上で飯を食つたが、皆集つて来て嬉しげに話した。九斤老太はもう八十のお祝になつたが、相變らず不平で相變らず達者であつた。

六斤の頭の上の蝶々とは其時すでに一つの大きな辮子に變つてゐた。彼女は近頃纏足を始めたが、矢張りもとのやうに七斤ねえさんの手助けをして、十六本の釘を打つた飯碗を捧げて、跛を引きながら空地の上を往來してゐた。

(一九二〇年十月)

故郷

わたしは嚴寒を冒して、二千餘里を隔て二十餘年も別れてゐた故郷に歸つて來た。時はもう冬の最中で故郷に近づくに従つて天氣は小闇くなり、身を切るやうな風が船室に吹き込んでびゆうと鳴る。苔の隙間から外を見ると、蒼黄いろい空の下にしめやかな荒村があちこちに横たはつていさゝかの活氣もない。わたしはうら悲しき心の動きが抑へ切れなくなつた。

おゝ！ これこそ二十年來ときく想ひ出す我が故郷ではないか。

わたしの想ひ出す故郷は丸切り、こんなものではない。わたしの故郷はもつと佳いところが多いのだ。しかし其佳いところを記すには姿もなく言葉もないので、どうやら先づこんなものだと置いて置かう。さうしてわたし自身解釋して、故郷はもつと佳いものだと置いて置く。——進歩はしないがわたしの感ずるほどうら悲しいものでもなからう。これは只わたし自身の心境の變

化だ。今度の歸省はもとく何のたのしみもないからだ。

わたしどもが永い間身内と一緒に棲んでゐた老屋がすでに公賣され、家を明け渡す期限が本年一ぱいになつてゐたから、是非とも正月元日前に行かなければならない。それが今度の歸省の全部の目的であつた。住み慣れた老屋と永別して、その上又住み慣れた故郷に遠く離れて、今食ひ繋ぎをしてゐるよそ國に家移りするのである。

わたしは二日目の朝早く我が家の門口に着いた。屋根瓦のうへに莖ばかりの枯草が風に向つて顫へてゐるのは、丁度この老屋が主を更へなければならぬ原因を説明するやうである。同じ屋敷内に住む本家の家族は大概もう移轉したあとで、あたりはひとつそりしてゐた。わたしが部屋の外側まで来た時、母は迎へに出て来た。八歳になる甥の宏兒も飛出して来た。

母は非常に喜んだ。何とも言はれぬ淋しさを押包みながら、お茶を入れて、話をよそ事に紛らしてゐた。宏兒は今度初めて逢ふので遠くの方へ突立つて眞正面からわたしを見てゐた。

わたしどもはたうとう家移りのことを話した。

「あちらの家も借りることに極めて、家具もあらかた調べましたが、未だ少し足りないものもありますから、此處にある嵩張物を賣拂つて向うで買ふことにさせよう」

「それがいいよ。わたしもさう思つてね。荷拵へをした時、嵩張物は持運びに不便だから半分許り賣つてみたが中々お錢にならないよ」

こんな話をしたあとで母は語を繼いだ。

「お前さんは久しぶりで来たんだから、本家や親類に暇乞ひを済まして、それから出て行くことにさせよう」

「え、さうさせよう」

「あの閨土がね、家へ来るたんびにお前のことをきいて、是非一度逢ひたいと言つてゐるんだよ」と母はにこくして

「今度到着の日取を知らせてやつたから、多分来るかも知れないよ」

「お、閨土！ 随分昔のことですね」

此時わたしの頭の中に一つの神さびた畫面が閃き出した。深藍色の天空にかゝる月はまんまろの黄金色であつた。下は海邊の砂地に作られた西瓜畑で、果てしもなく碧緑の中に十一二歳の少年がぼつりと一人立つてゐる。項には銀の輪を掛け、手には鋼鐵の又棒を握つて一疋の土龍に向つて力任せに突き刺すと、土龍は身をひねつて彼の跨ぐらを潜つて逃げ出す。

此少年が閩土であつた。わたしが彼を知つたのは十幾つかの歳であつたが、別れて今は三十年にもなる。あの時分は父も在世して家事の都合もよく、わたしは一人の坊ツちやまであつた。其年は丁度三十何年目に一度廻つて来る家の大祭の年に當り、祭は鄭重を極め、正月中掲げられた影像の前には多くの供へ物をなし、祭器の撰擇が八釜しく行はれ、參詣人が雑沓するので泥棒の用心をしなければならぬ。わたしの家には忙月が一人切りだから手廻り兼ね、祭器の見張番に倅をよびたいと申出たので父は之れを許した。(此村の小作人は三つに分れてゐる。一年契約の者を長年といひ、日雇ひの者を短工といふ。自分で地面を持ち節期時や刈入時に臨時に人の家に行つて仕事をする者を忙月といふ)

わたしは閩土が來ると聞いて非常に嬉しく思つた。といふのはわたしは前から閩土の名前を聞き及んでゐるし、年頃もわたしとおつかつだし、閩月生れで五行の土が缺けてゐるから閩土と名づけたわけも知つてゐた。彼は仕掛良で小鳥を取ることが上手だ。

わたしは日々に新年の來るのを待ちかねた。新年が來ると閩土も來るのだ。まもなく年末になり、或日の事、母はわたしを呼んで

「閩土が來たよ」と告げた。わたしは馳け出して行つてみると、彼は炊事部屋にゐた。紫色の

丸顔! 頭に小さな漉羅紗帽をかぶり、項にキラ／＼した銀の頸輪を掛け、——これを見ても彼の父親がいかに彼を愛してゐるかが解る。彼の死去を恐れて神佛に願を掛け、頸に輪を掛け、彼を庇護してゐるのである——人を見て大層はにかんだが、わたしに對して特別だつた。誰もゐない時に好く話をして、半日経たぬうちに我々はすつかり仲よしになつた。

われ／＼は其時、何か知らんいろんなことを話したが、只覺えてゐるのは、閩土が非常にハシヤいで、未だ見たことのないいろ／＼の物を街へ來て初めて見たとの話だつた。

次の日わたしは彼に鳥をつかまへて呉れと頼んだ。

「それは出來ません。大雪が降ればいいのですがね。わたしどもの沙地の上に雪が降ると、わたしは雪を掻き出して小さな一つの空地を作り、短い棒で大きな箕を支へ、小米を撒きちらして置きます。小鳥が食ひに來た時、わたしは遠くの方で棒の上に縛つてある細を引くと、小鳥は箕の下へ入つて仕舞ひます。何でも皆ありますよ。稻鷄、角鷄、鶉、鶉、鶉、鶉……」

そこでわたしは雪の降るのを待ちかねた。閩土は又左のやうな話をした。

「今は寒くていけません、夏になつたらわたしの處へ被入つしやい。わたしどもは晝間海邊に貝殻取に行きます。赤いや青いや、鬼が見て恐れるのや、觀音様の手もあります。晩にはお

父さんと一緒に西瓜の見張りに行きますから、貴郎も被入つしやい」

「泥棒の見張をするのかえ」

「いゝえ、旅の人が喉が渴いて一つ位取つて食べても、家の方では泥棒の數に入れません。見張が要るのは猪猪、山あらし、土龍の類です。月明りの下でちつと耳を澄ましてゐるとラ、と響いて來ます。土龍が瓜を嚙んでるんですよ。其時貴郎は又棒を攫んでそつと行つて御覽なさい」

わたしはその所謂土龍といふものがどんなものか、其時ちつとも知らなかつた。——今でも解らない——只わけもなく、小犬のやうな形で非常に猛烈のやうに感じた。

「彼は咬みついて來るだらうね」

「こちらには又棒がありますからね。歩いて行つて見つけ次第、貴郎はそれを刺せばいい。こんな畜生は馬鹿に利巧な奴で、あべこべに貴郎の方へ馳け出して來て、跨の下から逃げてゆきます。彼奴の毛皮は油のやうに滑ツこい」

わたしは今までこれほど多くの珍らしいことが世の中にあらうとは知らなかつた。海邊にこんな五色の貝殻があつたり、西瓜にこんな危険性があつたり——わたしは今先きまで西瓜は水菓子屋の店に賣つてゐるものとばかり思つてゐた。

「わたしどもの沙地の中には大潮の來る前に、澤山跳ね魚が集つて來て、只それだけが跳ね廻つてゐます。青蛙のやうに二つの脚があつて……」

あゝ閩土の胸の中には際限もなく不思議な話が繋がつてゐた。それはふだんわたしどもの往來してゐる友達の知らぬことばかりで、彼等は本當に何一つ知らなかつた。閩土が海邊にゐる時彼等はわたしと同じやうに、高塚に圍まれた屋敷の上の四角な空ばかり眺めてゐたのだから。

惜しいかな、正月は過ぎ去り、閩土は彼の郷里に歸ることになつた。わたしは大哭きに哭いた。

閩土も又泣き出し、臺所に隠れて出て行くまいとしたが、遂に彼の父親に引張り出された。

彼は其後父親に託けて貝殻一包と見事な鳥の毛を何本か送つて寄越した。わたしの方でも二度品物を届けてやつたこともあるが、それきり顔を見たことが無い。

現在わたしの母が彼のことを持出したので、わたしのあの時の記憶が電の如くよみがへつて來て、本當に自分の美しい故郷を見きはめたやうに覺えた。わたしは聲に應じて答へた。

「それや面白い。彼はどんな風です」

「あの人かえ、あの子の景氣もあんまりよくないやうだよ」

母はさういひながら室の外を見た。

「おや又誰か来たよ。木器買ふと言つては手當り次第に持つて行くんだから、わたしが一寸見て來ませう」

母が出て行くと門外の方で四五人の女の聲がした。わたしは宏兒を側へ喚んで彼と話をした。字が書けるか、此家を出て行きたいと思ふか、などといふことを訊いてみた。

「わたしどもは汽車に乗つてゆくのですか」

「汽車に乗つてゆくんだよ」

「船は？」

「先づ船に乗るんだ」

「おや、こんなになつたんですかね。お鬚がまあ長くなりましたこと」

一種尖つたをかしな聲が突然わめき出した。

わたしは喫驚して頭を上げると、頬骨の尖つた脣の薄い、五十前後の女が一人、わたしの眼の前に突立つてゐた。袴も無しに股引穿きの兩足を踏ん張つてゐる姿は、丸で製圖器のコンパスみたいだ。

わたしはぎよつとした。

「解らないかね、わたしはお前を抱いてやつたことが幾度もあるよ」

わたしはいよゝ驚いたが、いい鹽梅にすぐあとから母が入つて來て側から

「此人は永い間外に出てゐたから、みんな忘れて仕舞つたんです。お前、覚えておいでだらうね」とわたしの方へ向つて

「これはすぢ向うの楊二嫂だよ。そら豆腐屋さんの」

おゝさう言はれると想ひ出した。わたしの子供の時分、すぢ向うの豆腐屋の奥に一日坐り込んでゐたのが慥か楊二嫂とか言つた。彼女は近處で評判の「豆腐西施」で白粉をコテ／＼塗つてゐたが、頬骨もこんなに高くはなく、脣もこんなに薄くはなく、それに又いつも坐つてゐたので、こんな分廻しのやうな姿勢を見るのはわたしも初めてで、その時分彼女があるために此豆腐屋の商賣が繁昌するといふ噂をきいてゐたが、それも年齢の關係で、わたしは未だ會て感化を受けたことがないから丸切り覺えてゐない。ところがコンパス西施はわたしに對して甚だ不平らしく、忽ち侮りの色を現はし、宛らフランス人にしてナポレオンを知らず、亞米利加人にしてワシントンを知らざるを嘲る如く冷笑した。

「忘れたの？ 出世すると眼の位まで高くなるといふが、本當だね」

「いえ、決してそんなことはありません、わたし……」
わたしは慌てて立上つた。

「そんなら迅ちゃん、お前さんに言ふがね。お前は金持になつたんだから、引越したつて中々御大層だ。こんな我樂多道具なんか要るもんかね。わたしに譲つてお呉れよ、わたしども貧乏人こそ使ひ道があるわよ」

「わたしは決して金持ではありません。こんなものでも賣つたら何かの足しまへになるかと思つて……」

「おや／＼お前は結構な道臺さへも捨てたといふ話ぢやないか。それでもお金持ぢやないの？
お前は今三人のお妾さんがあつて、外に出る時には八人早きの大轎に乗つて、それでもお金持ぢやないの？
ホ、何と被仰らうが、わたしを瞞すことは出来ないよ」

わたしは話のしやうがなくなつて口を噤んで立つてゐると

「全くね、お金があればあるほど塵ツ葉一つ出すのはいやだ。塵ツ葉一つ出さなければ益々お金が溜るわけだ」

コンパスはむつとして身を翻し、ぶつ／＼言ひながら出て行つたが、尙ほ、行きがけの駄賃

に母の手袋を一雙、素早く搔つ拂つてズボンの腰に捻ぢ込んで立去つた。

そのあとで近處の本家や親戚の人達がわたしを訪ねて來たので、わたしはそれに應酬しながら暇を偷んで行李をまとめ、こんなことで三四日も過した。

非常に寒い日の午後、わたしは晝飯を済ましてお茶を飲んでゐると、外から人が入つて來た。

見ると思はず知らず驚いた。この人は外でもない閩土であつた。わたしは一目見てそれと知つたが、それは記憶の上の閩土ではなかつた。身の丈は一倍も伸びて、紫色の丸顔はすでに變じてどんよりと黄ばみ、額には溝のやうな深皺が出来てゐた。目許は彼の父親ソックリで地腫れがしてゐたが、これはわたしも知つてゐる。海邊地方の百姓は年ぢう汐風に吹かれてゐるので皆が皆こんな風になるのである。彼の頭の上には破れた漉羅紗帽が一つ、身體の上には極く薄い棉入れが一枚、その著こなしがいかにも見すばらしく、手に紙包と長煙管を持つてゐたが、その手もわたしの覺えてゐた赤く丸い、ふつくらしたものではなく、荒つぽくざら／＼して松皮のやうな裂け目があつた。

わたしは非常に亢奮して何と言つていいやら

「あ、閩土さん、よく來て呉れた」

と先づ口を切つて、續いて連珠の如く湧き出す話、角鶏、飛魚、貝殻、土龍……けれど結局何かに弾かれたやうな工合になつて、只頭の中をぐるぐる廻つてゐるだけで口外へ吐き出すことが出来ない。

彼はのそりと立つてゐた。顔の上には喜びと淋しさを現はし、唇は動かしてゐるが聲が出ない。彼の態度は結局敬ひ奉るのであつた。

「旦那様」

と一つハッキリ言つた。わたしはぞつとして身顛ひが出さうになつた。なるほどわたしどもの間にはもはや悲しむべき隔てが出来たのかと思ふと、わたしはもう話も出来ない。

彼は頭を後ろに向け

「水生や、旦那様にお辭儀を下さい」

と背中に躲れてゐる子供を引出した。これは丁度三十年前の閩土と同じやうな者であるが、それよりずつと痩せ黄ばんで頸のまはりに銀の輪がない。

「これは五番目の倅ですが、人様の前に出たことがありませんから、はにかんで困ります」

母は宏兒を連れて二階から下りて来た。大方われわれの話聲を聞きつけて来たのだらう。閩

土は丁寧に頭を低げて

「大奥様、お手紙を有難く頂戴致しました。わたしは旦那様がお歸りになると聞いて、何しろハアこんな嬉しいことは御座いませせん」

「まあお前はなぜそんなに遠慮深くしてゐるの、先には丸で兄弟のやうにしてゐたぢやないか。やつぱり昔のやうに迅ちゃんとお言ひよ」

母親はいい機嫌であつた。

「奥さん、今はそんなわけにはゆきませせん。あの時分は子供のことで何もかも解りませんでした」

閩土はさう言ひながら子供を前に引出してお辭儀をさせようとしたが、子供は羞しがつて背中にこびりついて離れない。

「その子は水生だね。五番目かえ。みんなうぶだから懼がるのは當前だよ。宏兒が丁度いい相手だ。さあお前さん達は向うへ行つてお遊び」

宏兒は此話を聞くとすぐに水生をさし招いた。水生は俄に元氣づいて一緒になつて馳け出して行つた。母は閩土に席をすゝめた。彼はしばらくうぢうぢとして遂に席に著いた。長煙管を卓の

側に寄せ掛け、一つの紙包を持出した。

「冬のことでも何も御座いせんが、此青豆は家の庭で乾かしたんですから旦那様に差上げて下さ

」

わたしは彼に暮向のことを訊ねると、彼は頭を揺り動かした。

「中々大變です。あの下の子供にも手傳はせてをりますが、どうしても足りません。……世の中は始終ゴタついてをりますし、……どちらを向いてもお金の費ることばかりで、方途が知れません……實りが悪いし、種物を賣り出せば幾度も税金を掛けられ、元を削つて賣らなければ腐れるばかりです」

彼はひたすら頭を振つた。見ると顔の上には澤山の皺が刻まれてゐるが、石像のやうに丸切り動かない。多分苦しみを感ずるだけで表現することが出来ないのだらう。しばらく思案に沈んでゐたが煙管を持出して煙草を吸つた。

母は彼の多忙を察してあしたすぐに引取らせることにした。未だ晝飯も食べてゐないので臺所へ行つて自分で飯を焚いておあがりと言附けた。

あとで母とわたしは彼の境遇に就いて歎息した。子供は殖えるし、飢饉年は續くし、税金は重なるし、土匪や兵隊が亂暴するし、官吏や地主がのしかゝつて来るし、凡ての苦しみは彼をして一

つの木偶とならしめた。「要らないものは何でも彼にやるがいいよ。勝手に撰り取らせても」と母は言つた。

午後、彼は入用の物を幾つか撰り出してゐた。長卓二臺、椅子四脚、香爐と燭臺一對づつ、天秤一本。又此處に溜つてゐる藁灰も要るのだが、(わたしどもの村では飯を焚く時藁を燃料とするので、その灰は砂地の肥料に持つて来いだ)わたしどもの出發前に船を寄越して積取つてゆく。

晩になつてわたしどもはゆつくり話をしたが、格別必要な話でもなかつた。さうして次の朝、彼は水生を連れて歸つた。

九日目にわたしどもの出發の日が来た。閩土は朝早くから出て来た。今度は水生の代りに五つになる女の兒を連れて来て舟の見張をさせた。その日は一日急がしく、もう彼と話をしてゐる暇もない。來客も亦少からずあつた。見送りに來た者、品物を持出しに來た者、見送りと持出しを兼ねて來た者などがゴタ／＼して、日暮れになつてわたしどもがやうやく船に乗つた時には、此老屋の中にあつた大小の我樂多道具はキレイに一掃されて、塵ツ葉一つ残らずガラ空きになつた。

船はずん／＼進んで行つた。兩岸の青山はたそがれの中に深黛色の装ひを凝らし、皆連れ立つて船後の梢に向つて退く。

わたしは船窓に凭つて外のぼんやりした景色を眺めてゐると、忽ち宏兒が質問を發した。

「叔父さん、わたしどもはいつ此處へ歸つて來るんでせうね」

「歸る？ ハ、ハ、ハ。お前は向うに行き著きもしないのにもう歸ることを考へてゐるのか」

「あの水生がね、自分の家へ遊びに來て呉れと言つてゐるんですよ」

宏兒は黒目勝ちの眼をみはつてうつとりと外を眺めてゐる。

わたしどもは薄ら睡くなつて來た。そこで又閩土の話を持出した。母は語つた。

「あの豆腐西施は家で荷造りを始めてから毎日屹度やつて來るんだよ。きのふは灰溜の中から皿小鉢を十幾枚も拾ひ出し、論判の擧句、これは屹度閩土が埋めて置いたに違ひない、彼は灰を運ぶ時一緒に持歸る積りだらうなどと云つて、此事を非常に手柄にして『犬ぢらし』を擱んで丸で飛ぶやうに馳け出して行つたが、あの纏足の足でよくまああんなに早く歩けたものだね」

(犬ぢらしはわたしどもの村の養鶏の道具で、木盤の上に木柵を嵌め、中には餌を入れて置く。鶏は嘴が長いから柵をとほして啄むことが出来る。犬は柵に鼻が闖へて食ふことが出来ない。)

故に犬じらしといふ)

だん／＼故郷の山水に遠ざかり、一時ハッキリした少年時代の記憶が又ぼんやりして來た。わたしは今の故郷に對して何の未練も残らないが、あの美しい記憶が薄らぐことが何よりも悲しかった。

母も宏兒も睡つて仕舞つた。

わたしは横になつて船底のせゝらぎを聴き、自分の道を走つてゐることを知つた。わたしは遂に閩土と隔絶して此位置まで來て仕舞つた。けれど、わたしの後輩は矢張り一脈の氣を通はしてゐるではないか。宏兒は水生を思念してゐるではないか。わたしは彼等の間に再び隔膜が出来ることを望まない。然しながら彼等は一脈の氣を求むるために、凡てがわたしのやうに辛苦展轉して生活することを望まない。又彼等の凡てが閩土のやうに辛苦麻痺して生活することを望まない。又凡てが別人のやうに辛苦放埒して生活することを望まない。彼等はわたしどもの未だ經驗せざる新しき生活をしてこそ然る可きだ。

わたしはさう思ふと忽ち羞しくなつた。閩土が香爐と燭臺が要ると言つた時、わたしは内々彼を笑つてゐた。彼はどうしても偶像崇拜で、いかなる時にもそれを忘れ去ることが出来ない。

ところが現在わたしの所謂希望はわたしの手製の偶像ではなからうか。只彼の希望は遠くの方でぼんやりしてゐるだけの相違だ。夢うつゝの中に眼の前に野廣い海邊の緑の沙地が展開して来た。上には深藍色の大空に掛るまんまるの月が黄金色であつた。希望は本來有といふものでもなく、無といふものでもない。これこそ地上の道のやうに、初めてから道があるのではないが、歩く人が多くなると初めて道が出来る。

(一九二一年一月)

阿 Q 正傳

第一章 序

わたしは阿Qの正傳を作らうとしたのは一年や二年のことではなかつた。けれども作らうとしながら又考へなほした。これを見てもわたしは立言の人でないことが分る。從來不朽の筆は不朽の人を傳へるもので、人は文に依つて傳へらる。つまり誰某は誰某に靠つて傳へられるのであるから、次第にハッキリしなくなつてくる。さうして阿Qを傳へることになると、思想の上に何か幽靈のやうなものがあつて結末があやふやになる。

それはさうと此一篇の朽ち易い文章を作るために、わたしは筆を下すが早い、いろいろの困難を感じた。第一は文章の名目であつた。孔子様の被仰るには「名前が正しくないと話が脱線する」と。これは本來極めて注意すべきことで、傳記の名前は列傳、自傳、内傳、外傳、別傳、家傳、小傳などと随分蒼蠅いほど澤山あるが、惜しいかな皆合はない。

列傳として見たらどうだらう。此一篇はいろんな偉い人と共に正史の中に排列すべきものではない。自傳とすればどうだらう。わたしは決して阿Q其物でない。外傳とすれば、内傳が無し、又内傳とすれば阿Qは決して神仙ではない。然らば別傳としたらどうだらう。阿Qは大總統の上諭に依つて國史館に宣付して本傳を立てたことが未だ一度もない。——英國の正史にも博徒列傳といふものは決して無いが、文豪デッケンスは博徒別傳といふ本を出した。併しこれは文豪のやることでわれ／＼のやることではない。そのほか家傳といふ言葉もあるが、わたしは阿Qと同じ流れを汲んでゐるか、どうかしらん。彼の子孫にお辭儀されたこともない。小傳とすれば或はいいかもしれないが、阿Qは別に大傳といふものがない。煎じ詰めると此一篇は本傳といふべきものだが、わたしの文章の著想からいふと文體が下卑てゐて「車を引いて漿を賣る人達」が使ふ言葉を用ゐてゐるから、そんな僭越な名目はつかへない。そこで三教九流の數に入らない小説家の所謂「閑話休題、言歸正傳」といふ紋切型の中から「正傳」といふ二字を取出して名目とした。即ち古人が撰した書法正傳のそれに、文字の上から見ると甚だ紛らしいが、もうどうでもいい。

第二、傳記を書くには通例、しよつばなに「何某、あざなは何、どこその人也」とするのが當りまへだが、わたしは阿Qの姓が何といふか少しも知らない。一度彼は趙と名乗つてゐたやうで

あつたが、それも二日目にはあいまいになつた。

それは趙太爺の息子が秀才になつた時の事であつた。阿Qは丁度二碗の黄酒を飲み干して足踏み手振りして言つた。これで彼も非常な面目を施した、といふのは彼と趙太爺はもと／＼一家の分れで、こまかく穿鑿すると、彼は秀才よりも目上だと語つた。此時そばに聽いてゐた人達は肅然として些か敬意を拂つた。ところが二日目には村役人が阿Qを喚びに来て趙家に連れて行つた。趙太爺は彼を一目見ると顔ぢう眞赤にして怒鳴つた。

「阿Q！ キサマは何とぬかした。お前が乃公の御本家か。たはけめ」

阿Qは黙つてゐた。

趙太爺は見れば見るほど癪に障つて二三歩前に押し出し「出鱈目もいい加減にしろ。お前のやうな奴が一家にあるわけがない。お前の姓は趙といふのか」

阿Qは黙つて身を後ろに引かうとした時、趙太爺は早くも飛びかゝつて、びしやりと一つ呉れた。

「お前は、どうして趙といふ姓がわかつた。何處から其姓を分けた」

阿Qは彼が趙姓である確證を辯解もせず、只手を以て左の頬を撫でながら村役人と一緒に退

出した。外へ出ると又村役人から一通りお小言をきいて、二百文の酒手を出して村役人にお詫びをした。此話を聞いた者は皆言つた。阿Qは實に出鱈目な奴だ。自分で擲られるやうなことを仕出かしたんだ。彼は趙だか何だか知れたもんぢやない。よし本當に趙であつても、趙太爺が此處にゐる以上は、そんなたはごとを言つてはけしからん。それからといふものは彼の名氏を持ち出す者が無くなつて、阿Qは遂に何姓であるか、突きとめることが出来なかつた。

第三、わたしは又、阿Qの名前をどう書いていいか知らない。彼が生きてゐる間は、人は皆阿Qと叫んだ。死んだあとではもう誰一人阿Qの噂をする者がないので、どうして「これを竹帛に著す」ことが出来よう。「これ竹帛に著す」ことから言へば、此一篇の文章が皮切であるから、先づ、第一の難關にぶつかるのである。わたしはつくづく考へてみると、阿Qは、阿桂或は阿貴かもしれない。若し彼に月亭といふ號があつて或は生れた月日が八月の中頃であつたら、それこそ阿桂に違ひない。しかし彼には號がない。——號があつたかもしれないが、それを知つてゐる人は無い。——さうして生年月日を書いた手帖など何處にも残つてゐないのだから、阿桂ときめて仕舞ふのはあんまり亂暴だ。

若し又彼に一人の兄弟があつて阿富と名乗つてゐたら、それこそ屹度阿貴に違ひない。しかし彼は全くの獨り者であつてみると、阿貴とすべき左證がない。其他Q.H.と發音する文字は皆變積な意味が含まれ一層嵌りが悪い。以前わたしは趙太爺の倅の茂才先生に訊いてみたが、あれほど物に詳しい人でも遂に返答が出来なかつた。併し結論から言へば、陳獨秀が雑誌「新青年」を發行して羅馬字を提唱したので國粹が亡びて考へやうが無くなつたんだ。そこでわたしの最後の手段は或る同郷生に頼んで、阿Q事件の判決文を調べて貰ふより外はなかつた。さうして一ヶ月たつてやうやく返辭が來たのを見ると、判決文の中に阿Qの音に近い者は決して無いといふ事だつた。わたし自身としては本當にそれが無いといふことは言へないが、もう此上は調べやうがない。そこで、注音字母では一般に解るまいと思つて據所なく洋字を用ゐ、英國流行の方法で彼を阿Qと書し、更に省略して阿Qとした。これは近頃「新青年」に盲従したことで我ながら遺憾に思ふが、しかし茂才先生でさへ知らないものを、わたしどもに何のいい智慧が出よう？

法則に乖く。

わたしが幾分自分で慰められることは、たつた一つの阿の字が非常に正確であつた。こればかりはこぢつけやかこつけではない。誰が見ても可成り正しいものである。その他のことになると學問の低いわたしには何もかも突き止めることが出来ない。只一つの希望は「歴史癖と考證好」で有名な胡適之先生の門人等が、ひよつとすると將來幾多の新端緒を尋ね出すかもしれない。しかし其時にはもう阿Q正傳は消滅してゐるかもしれない。

第二章 優勝記略

阿Qは姓名も原籍も少々あいまいであつた。のみならず彼の前半生の「行狀」も亦あいまいであつた。それといふのも未莊の人達は只阿Qをコキ使ひ、只彼をおもちやにして、もとより彼の「行狀」などに興味を持つ者がない。そして阿Q自身も身の上話などしたことはない。ときたま人と喧嘩をした時、何かのはずみに目を睜つて

「乃公達だつて以前は——てめえよりや餘ッ程豪勢なもんだぞ。人をなんだと思つてゐやがるんだえ」といふ位が勢一杯だ。

阿Qは家が無い。未莊の土穀祠の中に住んでゐて一定の職業もないが、人に頼まれると日傭取になつて、麥をひけと言はれれば麥をひき、米を搗げと言はれれば米を搗ぎ、船を漕げと言はれば船を漕ぐ。仕事之餘る時には、臨時に主人の家に寢泊りして、濟んで仕舞へばすぐに出て行く。だから人は忙しない時には阿Qを想ひ出すが、それも仕事のことであつて「行狀」のことでは決して無い。一旦暇になれば阿Qも絲瓜もないのだから、彼の行狀のことなど猶更言ひ出す者が無い。しかし一度こんなことがあつた。或るお爺さんが阿Qをもちやげて「お前は何をさせてもソツが無いね」と言つた。此時、阿Qは臂を丸出しにして「支那チヨッキをぢかに一枚著てゐる」無性臭い見すばらしい風體で、お爺さんの前に立つてゐた。はたの者は此話を本氣にせず、やつぱりひやかしたと思つてゐたが、阿Qは大層喜んだ。

阿Qは又大層己惚れが強く、未莊の人などはてんで彼の眼中にない。ひどいことには二人の「文童」に對しても、一笑の價値さへ認めてゐなかつた。そも「文童」なる者は、將來秀才となる可能性があるもので、趙太爺や錢太爺が居民の尊敬を受けてゐるのは、お金がある事の外に、いづれも文童の父であるからだ。しかし阿Qの精神には格別の尊念が起らない。彼は想つた。乃公だつて倅があればもつと偉くなつてゐるぞ！ 城内に幾度も行つた彼は自然己惚れが強くなつてゐ

たが、それでゐながら又城内の人をさげすんでゐた。例へば長さ三尺幅三寸の木の板で作つた腰掛は、未莊では「長登」といひ、彼も亦さう言つてゐるが、城内の人が「條登」といふと、これは間違ひだ。をかした事だ、と彼は思つてゐる。鱈の煮浸しは未莊では五分切の葱の葉を入れるのであるが、城内では葱を絲切りにして入れる。これも間違ひだ、をかした事だ、と彼は思つてゐる。ところが未莊の人はまつたくの世間見ずで笑ふべき田舎者だ。彼等は城内の煮魚さへ見たことがない。

阿Qは「以前は豪勢なもん」で見識が高く、そのうへ「何をさせてもソツがない」のだから、殆んど一ぱしの人物と言つてもいい位のものだが、惜しいことに、彼は體質上少々缺點があつた。とりわけ人に嫌はられるのは、彼の頭の皮の表面にいつ出来たものか随分幾箇所も瘡だらけの禿があつた。これは彼の持物であるが、彼のおもはくを見るとあんなにいいものでもないらしく、彼は「癩」といふ言葉を嫌つて一切「頼」に近い音までも嫌つた。あとではそれを推しひろめて「亮」もいけない。「光」もいけない。其後又「燈」も「燭」も皆いけなくなつた。さういふ言葉を一寸でも洩さうものなら、それが故意であらうと無からうと、阿Qは忽ち頭ぢうの禿を眞赤にして怒り出し、相手を見積つて、無口の奴は言ひ負かし、弱さうな奴は擲りつけた。しかしどういふもの

か知らん、結局阿Qがやられて仕舞ふことが多く、彼はだん／＼方針を變更し、大抵の場合目を怒らして睨んだ。

ところが此怒目主義を採用してから、未莊のひま人は愈々附け上つて彼を擲り物にした。一寸彼の顔を見ると彼等はわざとおツたまげて

「おや、明るくなつて来たよ」

阿Qはいつもの通り目を怒らして睨むと、彼等は一向平氣で

「と思つたら、空氣ランプが此處にある」

アハハハハと皆は一緒になつて笑つた。阿Qは仕方なしに他の復讐の話をして

「てめえ達は、やつぱり相手にならねえ」

此時こそ、彼の頭の上には一種高尚なる光榮ある禿があるのだ。ふだんの斑ら禿とは違ふ。だが前にも言つたとほり阿Qは見識がある。彼はすぐに規則違反を感じて、もう其先きは言はな

し。閑人達は未だやめないで彼をあしらつてゐると、遂に打ち合ひになる。阿Qは形式上負かされて黄いろい辮子を引張られ、壁に對して四つ五つ鉢合せを頂戴し、閑人はやうやく胸をすかして

勝ち慢つて立去る。

阿Qはしばらく佇んでゐたが、心の中で思つた。乃公はつまり子供に打たれたんだ。今の世の中は全く成つてゐない……そこで彼も満足し勝ち慢つて立去る。

阿Qは最初此事を心の中で思つてゐたが、遂にはいつも口へ出して言つた。だから阿Qとふざける者は、彼に精神上の勝利法があることを殆んど皆知つて仕舞つた。そこで今度彼の黄いろい辮子を引摺む機會が來ると其人は先づ彼に言つた。

「阿Q、これでも子供が親爺を打つのか。さあどうだ。人が畜生を打つんだぞ。自分で言へ、人が畜生を打つと」

阿Qは自分の辮子で自分の兩手を縛られながら、頭を歪めて言つた。
「蟲ケラを打つと言へばいいだらう。俺は蟲ケラだ。——未だ放さないのか」

だが蟲ケラと言つても閑人は決して放さなかつた。いつもの通り、極く近くの何處かの壁に彼の頭を五つ六つぶつつけて、そこで初めてせい／＼して勝ち慢つて立去る。彼はさう思つた。今度こそ阿Qは凹垂れたと。

ところが十秒もたないうちに阿Qも満足して勝ち慢つて立去る。阿Qは悟つた。乃公は自ら

輕んじ自ら賤しむことの出来る第一の人間だ。さういふことが解らない者は別として、其外の者に對しては「第一」だ。狀元も亦第一人ぢやないか。「人を何だと思つてゐやがるんだえ」
阿Qはかういふ種々の妙法を以て怨敵を退散せしめたあとでは、いつも愉快になつて酒屋に馳けつけ、何杯か酒を飲むうちに、又別の人と一通り冗談を言つて一通り喧嘩をして、又勝ち慢つて愉快になつて、土穀祠に歸り、頭を横にするが早い、ぐろ／＼睡つて仕舞ふのである。
若しお金があれば彼は博奕を打ちに行く。一かたまりの人が地面にしゃがんでゐる。阿Qは其中に割込んで一番威勢のいい聲を出してゐる。
「青龍四百！」

「よし……あける……ぞ」

堂元は蓋を取つて顔ぢう汗だらけになつて唱ひ始める。

「天門當り——隅返し、人と、中張張手無し——阿Qの錢はお取上げ——」

「中張百文——よし百五十文張つたぞ」

阿Qの錢はこのやうな吟詠のもとに、だん／＼顔ぢう汗だらけの人の腰の邊に行つて仕舞ふ。彼は遂に己むを得ず、かたまりの外へ出て、後ろの方に立つて人の事で心配してゐるうちに、博奕

はずん／＼進行してお終ひになる。それから彼は未練らしく土穀祠に歸り、翌日は眼のふちを腫らしながら仕事に出る。

けれど「塞翁が馬を無くしても、災難と極まつたものではない」。阿Qは不幸にして一度勝つたが、反つてそれがために幾んど大きな失敗をした。

それは未莊の祭の晩だつた。其晩例に依つて芝居があつた。例に依つて澤山の博奕場が舞臺の左側に出た。囃の聲などは阿Qの耳から十里の外へ去つてゐた。彼は只堂元の歌の節だけ聴いてゐた。彼は勝つた。又勝つた。銅貨は小銀貨となり、小銀貨は大洋になり、大洋は遂に積みかさなつた。彼は素敵な勢ひで「天門兩塊」と叫んだ。

誰と誰が何で喧嘩を始めたんだか、サツパリ解らなかつた。怒鳴るやら殴るやら、バタ／＼馳け出す音などがして暫くの間眼が眩んで仕舞つた。彼が起き上つた時には博奕場も無ければ人も無かつた。身中に可成りの痛みを覺えて幾つも拳骨を食ひ、幾つも蹶飛ばされたやうであつた。彼はぼんやりしながら歩き出して土穀祠に入つた。氣がついてみると、あれほどあつた彼のお金は一枚も無かつた。博奕場にゐた者はたいてい此村の者では無かつた。何處へ行つて訊き出すにも訊き出しやうがなかつた。

まつ白なピカ／＼した銀貨！ 而もそれが彼の物なんだが今は無い。子供に盗られたことにして置けばいいが、それぢやどうも氣が濟まない。自分を蟲ケラ同様に思へばいいが、それぢやどうも氣が濟まない。彼は今度こそ些か失敗の苦痛を感じた。けれど彼は失敗を轉じて遂に勝ちとした。彼は右手を舉げて自分の面を力任せに引っぱらいた。すると顔がカツとして火照り出し可成りの痛みを感じたが、心は却つて落ち著いて來た。打つたのは正に自分に違ひないが、打たれたのはもう一人の自分のやうでもあつた。さうかうするうちに自分が人を打つてるやうな氣持になつた。——やつぱり幾らか火照るには違ひないが——心は十分満足して勝ち慢つて横になつた。彼は睡つて仕舞つた。

第三章 續優勝記略

それはさうと、阿Qはいつも勝つてゐたが、名前が賣れ出したのは、趙太爺の御ちやうちやくを受けてからのことだ。

彼は二百文の酒手を村役人に渡して仕舞ふと、ぶん／＼腹を立て一寝轉んだ。あとで思ひつた。

「今の世界は話にならん。倅が親爺を打つ……」

そこでふと趙太爺の威風を想ひ出し、それが現在自分の倅だと思ふと我れながら嬉しくなつた。彼が急に起き上つて「若寡婦の墓参り」といふ歌を唱ひながら酒屋へ行つた。此時こそ彼は趙太爺よりも一段うは手の人物に成り済ましてゐたのだ。

變積なこつたがそれからといふものは、果してみんなが殊の外彼を尊敬するやうになつた。これは阿Qとしては自分が趙太爺の父親になりすましてゐるのだから當然のことであるが、本當の處はさうでなかつた。未莊の仕來りでは、阿七が阿八を打つやうな事があつても、或は李四が張三を打つても、そんなことは元より問題にならない。是非とも或る名の知れた人、例は趙太爺のやうな人と交渉があつてこそ、初めて彼等の口の端に掛るのだ。一遍口の端に掛れば、打つても評判になるし、打たれてもそのお蔭様で評判になるのだ。阿Qの思ひ違ひなど勿論どうでもいいのだ。そのわけは？ つまり趙太爺に間違ひのある筈はなく、阿Qに間違ひがあるのに、なぜみんなは殊の外彼を尊敬するやうになつたか？ これは籠棒な話だが、よく考へて見ると、阿Qは趙太爺の本家だと言つて打たれたのだから、ひよつとしてそれが本當だつたら、彼を尊敬するのは至極穩當な話で、全くそれに越したことはない。でなければ又左のやうな意味があるかもしれない。

ない。聖廟の中のお供物のやうに、阿Qは猪羊と同様の畜生であるが、一旦聖人のお手がつくと、學者先生、中々それを粗末にしない。

阿Qはそれからといふものは随分長いこと偉張つてゐた。

或る年の春であつた。彼はほろ酔ひ機嫌で町なかを歩いてゐると、垣根の下の日當りに王鬍がもろ肌ぬいで虱を取つてゐるのを見た。忽ち感じて彼も身體がむづ痒くなつた。此王鬍は禿瘡でもある上に、鬍をぢむさく伸ばしてゐた。阿Qは禿瘡の一點は度外置いてゐるが、兎に角彼を非常に馬鹿にしてゐた。阿Qの考では、外に格別變つたところもないが、其頭に絡まる鬍は實に頗る珍妙なもので見られたさまぢやないと思つた。そこで彼は側へ行つて並んで坐つた。これが若しほかの人なら阿Qは勿論滅多に坐る筈はないが、王鬍の前では何の遠慮が要るものか、正直のところ阿Qが坐つたのは、つまり彼を持ち上げ奉つたのだ。

阿Qは破れ袷を脱ぎおろして一度引ツくらかへして調べて見た。洗つたばかりなんだが矢張りぞんざいなものかもしれない。長いことかゝつて三つ四つ捉まへた。彼は王鬍を見ると、一つ又一つ、二つ三つと口の中に抛り込んでピチ／＼と噛み潰した。

阿Qは最初失望してあとでは不平を起した。王鬍なんて取るに足らぬ奴でも、あんなにとつ

さり持つてゐやがる。乃公を見ろ、あるかねえか解りやしねえ。こりやどうも大に面目のねえこつた。彼は是非とも大きな奴を捫り出さうと思つてあちこち捜した。しばらく経つてやつと一つ捉まへたのは中くらゐの奴で、彼は恨めしさうに厚い脣の中に押込みヤケに噛み潰すと、パチリと音がしたが王鬚の響には及ばなかつた。彼は禿瘡の一つ一つを皆赤くして著物を地上に突放し、ペツと唾を吐いた。

「この毛蟲め」

「やい、瘡ツかき。てめえは誰の悪口を言ふのだ」王鬚は眼を擧げてさげすみながら言つた。

阿Qは近頃割合に人の尊敬を受け、自分も些か高慢稚氣になつてゐるが、いつもやり合ふ人達の面を見ると、矢張り心が怯れて仕舞ふ。ところが今度に限つて非常な勢だ。何だ、こんな鬚だらけの代物が生意氣言やがるとばかりで

「誰のこつたか、おらあ知らねえ」阿Qは立ち上つて、両手を腰の間に支へた。

「此野郎、骨が痒くなつたな」王鬚も立ち上つて著物を著た。

相手が逃げ出すかと思つたら、掴み掛つて來たので、阿Qは拳骨を固めて一突き呉れた。その拳骨が未だ向うの身體に届かぬうちに、腕を抑へられ、阿Qはよろ／＼と腰を浮かした。扭ぢつ

けられた辯子は塙の方へと引張られて行つて、いつもの通りそこで鉢合せが始まるのだ。

「君子は口を動かして手を動かさず」と阿Qは首を歪めながら言つた。

王鬚は君子でないと思へ、遠慮會釋もなく彼の頭を五つほど壁にぶつつけて力任せに突放すと、

阿Qはふら／＼と六尺餘り遠ざかつた。そこで鬚は大に満足して立去つた。

阿Qの記憶では大方これは生れて初めての屈辱といつてもいい、王鬚は頸に絡まる鬚の缺點で前から阿Qに侮られてゐたが、阿Qを侮つたことは無かつた。むろん手出しなど出来る筈の者ではなかつたが、ところが現在遂に手出しをしたから妙だ。まさか世間の噂のやうに皇帝が登用試験をやめて秀才も舉人も不用になり、それで趙家の威風が滅じ、それで彼等も阿Qに對して見下すやうになつたのか。そんなことはありさうにも思はれない。

阿Qは據所なくゐんだ。

遠くの方から歩いて來た一人は彼の眞正面に向つてゐた。これも阿Qの大嫌ひの一人で、即ち錢太爺の總領息子だ。彼は以前城内の耶穌學校に通學してゐたが、なぜかしらん又日本へ行つた。半年あとで彼が家に歸つて來た時には膝が眞直ぐになり、頭の上の辯子が無くなつてゐた。彼の母親は大泣きに泣いて十幾幕も愁歎場を見せた。彼の祖母は三度井戸に飛び込んで三度引上げら

れた。あとで彼の母親は到處で説明した。

「あの辮子は悪い人から酒に盛りつぶされて剪り取られたんです。本来あれがあればこそ大官になれるんですが、今となつては仕方がありません。長く伸びるのを待つばかりです」

さはいへ阿Qは承知せず、一途に彼を「偽毛唐」「外國人の犬」と思ひ込み、彼を見るたびに肚の中で罵り悪んだ。

阿Qが最も忌み嫌つたのは、彼の一本のまがひ辮子だ。擬ひ物と来てはそれこそ人間の資格がない。彼の祖母が四度目の投身をしなかつたのは善良の女でないと阿Qは思つた。

その「偽毛唐」が今近づいて来た。「禿げ、驢……」阿Qは今まで肚の中で罵るだけで口へ出して言つたことはなかつたが、今度は正義の憤りでもあるし、復讐の觀念もあつたから、思はず知らず出て仕舞つた。

ところが此禿の奴、一本のニス塗りのステッキを持つてゐて——それこそ阿Qに言はせると葬式の泣き杖だ——大跨に歩いて来た。此一刹那に阿Qは打たれるやうな氣がして、筋骨を引締め肩を聳かして待つてゐると果して

ピシヤリ。

確かに自分の頭に違ひない。

「彼奴のことを言つたんです」と阿Qは、側に遊んでゐる一人の子供を指さした。

ピシヤリ、ピシヤリ。

阿Qの記憶では大方これが今まであつた第二の屈辱といつてもいい。幸ひピシヤリ、ピシヤリの響のあとは、彼に關する一事件が完了したやうに、却つて非常に氣樂になつた。それに又「すぐ忘れて仕舞ふ」といふ先祖傳來の寶物が利き目をあらはし、ぶら／＼歩いて酒屋の門口まで来た時にはもう頗る元氣なものであつた。

折柄向うから来たのは、靜修庵の若い尼であつた。阿Qはふだんでも彼女を見ると屹度惡態を吐くのだ。況してや屈辱のあとだつたから、いつものことを想ひ出すと共に敵愾心を喚起した。

「けふはなぜこんな運が悪いかと思つたら、偕てこそためえを見たからだ」と彼は獨りでさう極めて、わざと彼女にきこえるやうに大唾を吐いた。

「ベツ、プツ」

若い尼は皆目眼も呉れず頭をさげてひたすら歩いた。すれちがひに阿Qは突然手を伸ばして彼女の剃り立ての頭を撫でた。

「から坊主！早く歸れ。和尚が待つてゐるぞ」

「お前は何だつて手出しをするの」

尼は顔ぢう眞赤にして早足で歩き出した。

酒屋の中の人は大笑ひした。己れの手柄を認めた阿Qはますますいい氣になつてハシヤギ出した。

「和尚はやるかもしれねえが、おらあやらねえ」彼は、彼女の頬ぺたを摘んだ。

酒屋の中の人は又大笑ひした。阿Qは一層得意になり、見物人を満足させるために力任せに捻りして彼女を突放した。

彼は此一戦で王爺のことも僞毛唐のことも皆忘れて仕舞つて、けふの一切の不運が報いられたやうに見えた。不思議なことにはピシヤリ、ピシヤリのあの時よりも全身が軽く爽やかになつて、ふら／＼と今にも飛び出しさうに見えた。

「阿Qの罰當りめ。お前の世嗣ぎは斷えて仕舞ふぞ」遠くの方で尼の泣聲がきこえた。

「ハハハ」阿Qは十分得意になつた。

「ハハハ」酒屋の中の人も九分通り得意になつて笑つた。

第四章 戀愛の悲劇

かういふ人があつた。勝利者といふものは、相手が虎のやうな鷹のやうなものであれかしと願ひ、それでこそ彼は初めて勝利の歡喜を感じるのだ。若し相手が羊のやうなものだつたら、彼は反つて勝利の無聊を感じる。又勝利者といふものは、一切を征服したあとで死ぬものは死に、降るものは降つて、「臣誠惶誠恐死罪死罪」といふやうな状態になると、彼は敵が無くなり相手が無くなり友達が無くなり、たつた一人上にある自分だけが別物になつて、凄しく淋しく反つて勝利者の悲哀を感じる。ところが我が阿Qに於てはこのやうな缺乏はなかつた。ひよつとするとこれは支那の精神文明が全球第一である一つの證據かもしれない。

見給へ。彼はふら／＼と今にも飛び出しさうな様子だ。

然しながら此一回の勝利が些か異様な變化を彼に與へた。彼は暫くの間ふら／＼と飛んでゐたが、やがて又ふらりと土穀祠に入つた。常例に據るとそこですぐ横になつて鼻をかくんだが、どうしたものか其晩に限つて少しも睡れない。彼は自分の親指と人差指がいつもよりも大層脂漲つて變な感じがした。若い尼の顔の上の脂が彼の指先に粘りついたのかもしれない。それとも又

彼の指先が尼の面の皮にこすられてすべつこくなつたのかもしれない。

「阿Qの罰當りめ。お前の世嗣ぎは断えて仕舞ふぞ」

阿Qの耳朶の中には此聲が確かに聞えてゐた。彼はさう想つた。

「ちげえねえ。一人の女があればこそだ。子が断え孫が断えて仕舞つたら、死んだあとで一碗の御飯を供へる者がない。……一人の女があればこそだ」

一體「不孝には三つの種類があつて後嗣ぎの無いのが一番悪い」、そのうへ「若敖之鬼餒而」これも亦人生の一大悲哀だ。だから彼もさう考へて、實際どれもこれも聖賢の教に合致してゐることをやつたんだが、只惜しいことに、後になつてから「心の駒を引き締めることが出来なかつた」

「女、女……」と彼は想つた。

「……和尚(陽器)は動く。女、女……女!……女!」と彼は想つた。

われ／＼は其晚いつ時分になつて、阿Qが漸く軒をかけたかを知ることが出来ないが、兎に角それからといふものは彼の指先に女の脂がこびりついて、どうしても「女!」を思はずにはゐられなかつた。

たつたこれだけでも、女といふものは人に害を興へる代物だと知ればいい。

支那の男は本来、大抵皆聖賢となる資格があるが、惜しいかな大抵皆女のために壊されて仕舞ふ。商は姐己のために騒動がもちあがつた。周は褒姒のために破壊された? 秦……公然歴史に出てゐないが、女のために秦は破壊されたといつても大して間違ひはあるまい。さうして董卓は貂蟬のために確實に殺された。

阿Qは本来正しい人だ。われ／＼は彼がどんな師匠に就いて教を受けたか知らないが、彼はふだん「男女の區別」を厳守し、且つ又異端を排斥する正氣があつた。例如ば尼、偽毛唐の類。——彼の學説では凡ての尼は和尚と私通してゐる。女が外へ出れば必ず男を誘惑しようと思ふ。男と女と話をすれば屹度破なことはない。彼は彼等を懲しめる考で、をり／＼目を怒らせて眺め、或は大聲をあげて彼等の迷ひを醒し、或は密會所に小石を投げ込むこともある。

ところが彼は三十になつて竟に若い尼になやまされて、ふら／＼になつた。このふら／＼の精神は禮教上から言ふと決してよくないものである。——だから女は眞に惡むべきものだ。若し尼の顔が脂漲つてゐなかつたら阿Qは魅せられずに済んだらう。若し尼の顔に覆面が掛つてゐたら阿Qは魅せられずに済んだらう——彼は五六年前、舞臺の下の人混みの中で一度或る女の股倉に足を挟まれたが、幸ひズボン隔着てゐたので、ふら／＼になるやうなことはなかつた。ところが

今度の若い尼は決してさうではなかつた。これを見てもいかに異端の悪むべきかを知るべし。

彼は「こいつは屹度男を連れ出すわえ」と思ふやうな女に對していつも注意してみてゐたが、彼女は決して彼に向つて笑ひもしなかつた。彼は自分と話をする女の言葉をいつも注意して聽いてゐたが、彼女は決して艶っぽい話を持ち出さなかつた。おゝこれが女の悪むべき點だ。彼等は皆「偽道德」を著てゐた。さう思ひながら阿Qは

「女、女！……」と想つた。

その日阿Qは趙太爺の家で一日米を搗いた。晩飯が済んで仕舞ふと臺所で煙草を吸つた。これが若しほかの家なら晩飯が済んで仕舞ふとすぐに歸るのだが趙家は晩飯が早い。定例に據ると此場合點燈を許さず、飯が済むとすぐ寢て仕舞ふのだが、端無くも又二三の例外があつた。

其一は趙太爺が、未だ秀才に入らぬ頃、燈を點じて文章を讀むことを許された。其二は阿Qが日雇ひに来る時は燈を點じて米搗くことを許された。此例外の第二に依つて、阿Qが米搗きに著手する前に臺所で煙草を吸つてゐたのだ。

吳媽は、趙家の中でたつた一人の女僕であつた。盥小鉢を洗つて仕舞ふと彼女も亦腰掛の上に坐して阿Qと無駄話をした。

「奥さんはけふで二日御飯をあがらないのですよ。だから日那は小妾の一人買はうと思つてゐるんです」

「女……吳媽……此チビごけ」と阿Qは思つた。

「うちの若奥さんは八月になると、赤ちやんが生れるの」

「女……」と阿Qは想つた。

阿Qは煙管を置いて立上つた。

「内の若奥さんは……」と吳媽は未だ喋舌つてゐた。

「乃公とお前と寢よう。乃公とお前と寢よう」

阿Qは忽ち強要と出掛け、彼女に對してひざまづいた。

一刹那、極めて森閑としてゐた。

吳媽は暫く神威に打たれてゐたが、やがてガタ／＼顫へ出した。

「あれーッ」

彼女は大聲上げて外へ馳け出し、馳け出しながら怒鳴つてゐたが、だん／＼それが泣聲に變つて來た。

阿Qは壁に對つて跪坐し、これも神威に打たれてゐたが、此時兩手をついて無性らしく腰を上げ、聊か沫を食つたやうな體で下ギマギしながら、帯の間に煙管を挿し込み、これから米搗きに行かうかどうしようかとまご／＼してゐるところへ、ポカリと一つ、太い物が頭の上から落ちて來た。彼はハツとして身を轉じると、秀才は竹の棒キレをもつて行手を塞いだ。

「キサマは謀叛を起したな。これ、こん畜生……」

竹の棒は又彼に向つて振り下された。彼は兩手を舉げて頭をかゝへた。當つたところは丁度指の節の眞上で、それこそ本當に痛く、夢中になつて臺所を飛び出し、門を出る時又一つ背中の上をどやされた。

「忘八蛋」

後ろの方で秀才が官話を用ゐて罵る聲が聞えた。

阿Qは米搗場に駈込んで獨り突立つてゐると、指先の痛みは未だやまず、それに又「忘八蛋」といふ言葉が妙に頭に殘つて薄氣味悪く感じた。此言葉は未莊の田舎者は曾て使つたことがなく、専らお役所のお歴々が用ゆるもので印象が殊の外深く、彼の「女」といふ思想など、急にどこへか吹つ飛んで仕舞つた。しかし、ぶつ叩かれて仕舞へば事件が落著して何の障りがないのだから、

すぐに手を動かして米を搗き始め、しばらく搗いてゐると身内が熱くなつて來たので、手をやめて著物をぬいだ。

著物を脱ぎおろした時、外の方が大變騒々しくなつて來た。阿Qは自體賑やかなことが好きで、聲を聞くとすぐに聲のある方へ馳け出して行つた。だん／＼側へ行つてみると、趙太爺の庭内でたそがれの中ではあるが、大勢集つてゐる人の顔の見分けも出來た。先づ目につくのは趙家のうちぢうの者と二日も御飯を食べないでゐる若奥さんの顔も見えた。他に隣の郷七嫂や本當の本家の趙白眼、趙司晨などもゐた。

若奥さんは下部屋から丁度吳媽を引張り出して來たところだ

「お前はよそから來た者だ……自分の部屋に引込んでゐてはいけない……」

郷七嫂も側から口を出し
「誰だつてお前の潔白を知らない者はありません……決して氣短なことをしてはいけません」といつた。

吳媽はひた泣きに泣いて、何か言つてゐたが聞き取れなかつた。

阿Qは想つた。「ふん、面白い。このチビどけが、どんな惡戲をするかしらんで？」

彼は立聞きしようと思つて趙司晨の側までゆくと、趙太爺は大きな竹の棒を手に持つて彼を
目
蒐けて跳び出して来た。

阿Qは竹の棒を見ると、此騒動は自分が前に打たれた事と關係があるんだと感づいて、急に米
搗場に逃げ歸らうとしたが、竹の棒は意地悪く彼の行手を遮つた。そこで自然の成行きに任せて
裏門から逃げ出し、一寸の間に彼はもう土穀祠の宮の中になつた。阿Qは坐つてゐると肌が粟立つ
て来た。彼は冷たく感じたのだ。春とはいへ夜になると残りの寒さが身に沁み、裸でゐられるも
のではない。彼は趙家に置いて来た上衣がつく／＼欲しくなつたが、取りに行けば秀才の恐ろし
い竹の棒がある。さうかうしてゐるうちに村役人が入つて来た。

「阿Q、お前のお袋のやうなものだぜ。趙家の者にお前がふさげたのは、つまり目上を犯したん
だ。お蔭で乃公はゆうべ寝ることが出来なかつた。お前のお袋のやうなものだぜ」

こんな風に通じ教訓されたが、阿Qは勿論黙つてゐた。擧句の果てに、夜だから役人の酒
手を倍増しにして四百文出すのが當前だといふことになつた。阿Qは今持合せがないから二つ
の帽子を質に入れて、五つの條件を契約した。

- 一、明日紅蠟燭一對(目方一斤の物に限る)線香一封を趙家に持参して謝罪する事。
- 二、趙家では道士を喚んで首縊りの幽霊を祓ふ事(首縊り幽霊は最も癡猛なる悪鬼で、阿Qが女
を口説いたのも其祟りだと假想する)。費用は阿Qの負擔とす。
- 三、阿Qは今後決して趙家の鬩を越えぬ事。
- 四、吳媽に今後意外の變事があつた時には、阿Qの責任とす。
- 五、阿Qは手間賃と給を要求することを得ず。

阿Qはもちろん皆承諾したが、困つたことにはお金が無い。幸ひ春でもあるし、要らなくなつ
た棉入れを二千文に質入れして契約を履行した。さうして裸になつてお辭儀をしたあとは、確か
に幾文か残つたが、彼はもう帽子を請け出さうと思はず、あるだけのものは皆酒にして思ひ切
りよく飲んで仕舞つた。

一方趙家では、蠟燭も線香もつかはずに、大奥さんが佛參の日まで藏つて置いた。さうしてあ
の破れ上衣の大半は若奥さんが八月生んだ赤坊のおしめになつて、其切屑は吳媽の鞋底に使は
れた。

第五章 生計問題

阿Qはお禮を済ましてもとのお廟に歸つて來ると、太陽は下りて仕舞ひ、だん／＼世の中が變になつて來た。彼は一々想ひ廻した結果つひに悟るところがあつた。その原因はつまり自分の裸にあるので、彼は破れ袷が未だ一枚残つてゐることを想ひ出し、それを引掛けて横になつて眼を開けてみると太陽は未だ西の墻を照してゐるのだ。彼は起き上りながら「お袋のやうなものだ」と言つてみた。

彼はそれから又いつものやうに街へ出て遊んだ。裸者の身を切るやうなつらさはないが、だんだん世の中が變に感じて來た。何か知らんが未莊の女は其日から彼を氣味悪がつた。彼等は阿Qを見るに皆門の中へ逃げ込んだ。極端なことには五十に近い鄒七嫂まで人のあとに跟いて潛り込み、其上十一になる女の兒を喚び入れた。阿Qは不思議でたまらない。「此奴等はどれもこれもお嬢さんのやうなしなしてゐやがる。なんだ、賣淫め」

阿Qはこらへ切れなくなつてお馴染の家に行つて探りを入れた。——但し趙家の闖だけは跨ぐことが出来ない——何しろ様子が頗る變なので、何處でも屹度男が出て來て、蒼蠅さうな顔付を

見せ、丸で乞食を追拂ふやうな體裁で

「無いよ無いよ。向うへ行つて呉れ」と手を振つた。

阿Qは愈々不思議に感じた。

此邊の家は前から手傳が要る筈なんだが、今急に暇になるわけがない。こりやあ屹度何か曰くがある筈だ、と氣をつけてみると、彼等は用のある時には小DONをよんでゐた。此小Dは極々みすばらしい奴で瘦せ衰へてゐた。阿Qの眼から見ると王爺よりも劣つてゐる。ところが此小Dはツばめが遂に阿Qの飯碗を取つて仕舞つたんだから、阿Qの怒は尋常一様のものではない。彼はぶん／＼しながら歩き出した。さうして忽ち手をあげて呻つた。

「鐵の鞭で手前を引ツばたくぞ」

幾日かのあとで、彼は遂に錢府の照壁(衝立の壁)の前で小Dにめぐり逢つた。「驕の出會ひは格別ハツキリ見える」もので、彼はづか／＼小Dの前に行くと小Dも立止つた。

「畜生！」阿Qは眼に稜を立て口の端へ沫を吹き出した。

「俺は蟲ケラだよ。いいぢやねえか……」と小Dは言つた。

したでに出られて阿Qは却つて腹を立てた。彼の手には鐵の鞭が無かつた。そこで只毆るより

仕様がなかつた。彼は手を伸して小Dの辮子を引摺むと、小Dは片ッぽの手で自分の辮根を守り、片ッぽの手で阿Qの辮子を摺んだ。阿Qも亦空いてゐる方の手で自分の辮根を守つた。

以前の阿Qの勢を見ると小Dなど問題にもならないが、近頃彼は飢餓のため痩せ衰へてゐるので五分々々の取組となつた。四つの手は二つの頭を引摺んで雙方腰を曲げ、半時間の久しきに渡つて、錢府の白壁の上に一組の藍色の虹形を映出した。

「いいよ。いいよ」見てゐた人達は大方仲裁する積りで言つたのであらう。

「よし、よし」見てゐる人達は、仲裁するのか、ほめるのか、それとも煽てるのか知らん。

それはさうと二人は人のことなど耳にも入らなかつた。阿Qが三步進むと小Dは三步退き、遂に二人とも突立つた。小Dが三步進むと阿Qは三步退き、遂に又二人とも突立つた。およそ半時間……未荘には時計がないからハッキリしたことは言へない。或は二十分かもしれない……彼等の頭はいづれも埃がかゝつて、額の上には汗が流れてゐた。さうして阿Qが手を放した間際に小Dも手を放した。同じ時に立上つて同じ時に身を引いてどちらも人ごみの中に入つた。

「覚えてゐろ、馬鹿野郎」阿Qは言つた。

「馬鹿野郎、覚えてゐろ」小Dも亦振向いて言つた。

此一幕の「龍虎圖」は全く勝敗がないと言つていい位のものだが、見物人は満足したかしらん、誰も何とも批評するものもない。さうして阿Qは依然として仕事に頼まれなかつた。

或日非常に暖か風がそよ／＼と吹いて大分夏らしくなつて来たが、阿Qは却つて寒さを感じた。しかしこれにはいろ／＼のわけがある。第一腹が耗つて蒲團も帽子も上衣もないのだ。今度棉入れを賣つて仕舞ふと、禪子は残つてゐるが、こればかりは脱ぐわけには行かない。破れ給が一枚あるが、これも人にやれば鞋底の資料になつても、決してお金にはならない。彼は往來でお金を拾ふ豫定で、とうから心掛けてゐたが、未だめつからない。家の中を見廻したところで何一つない。彼は遂におもてへ出て食を求めた。

彼は往來を歩きながら「食を求め」なければならぬ。見馴れた酒屋を見て、見馴れた饅頭を見て、すん／＼通り越した。立ちどまりもしなければ欲しいとも思はなかつた。彼の求むるものは

此様なものではなかつた。彼の求むるものは何だらう。彼自身も知らなかつた。未荘はもとより大きな村でもないから、まもなく行き盡して仕舞つた。村端は大抵水あ田でつた。見渡す限りの新稲の若葉の中に幾つか丸形の活動の黒點が挟まれてゐるのは、田を耕す農夫であつた。阿Qは此田家の楽しみを鑑賞せずひたすら歩いた。彼は直覺的に彼の「食を求め

る「道はこんなまだるつこいことではいけないと思つたから、彼は遂に静修庵の垣根の外へ行つた。

庵のまはりは水田であつた。白壁が新緑の中に突き出してゐた。後ろの低い垣の中に菜畑があつた。

阿Qは暫くためらつてゐたが、あたりを見ると誰も見えない。そこで低い垣を這ひ上つて何首烏の蔓を引張るとザラ／＼と泥が落ちた。阿Qは顛へる足を踏みしめて桑の樹に攀ぢ昇り、畑中へ飛び下りると、そこは繁りに繁つてゐたが、老酒も饅頭も食べられさうなものはない。西の垣根の方は竹藪で、下に澤山筍が生えてゐたが生憎ナマで役に立たない。そのほか菜種があつたが實を結び、芥子菜は花が咲いて、青菜は伸び過ぎてゐた。

阿Qは試験に落第した文章のやうな謂れなき屈辱を感じて、ぶら／＼園門の側まで来ると、忽ち非常な喜びとなつた。これは明かに大根畑だ。彼がしがんで抜き取つたのは、一つ極く丸いものであつたが、すぐに身をかどめて歸つて来た。これは確かに尼ツちよものだ。尼ツちよなんてものは阿Qとしては若草の屑のやうに思つてゐるが、世の中の事は「一步退いて考へ」なければならぬ。だから彼はそ／＼に四つの大根を引抜いて葉をむしり捨て著物の下まへの中に藏

ひ込んだが、其時もう婆の尼は見つけてゐた。

「おみどふ(阿彌陀佛)、お前はなんだつて此處へ入つて来たの、大根を盗んだね……まあ呆れた。罪作りの男だね。おみどふ……」

「俺はいつお前の大根を盗んだえ」阿Qは歩きながら言つた。

「それ、それ、それで盗まないといふのかえ」と尼は阿Qの懐ろをさした。

「これはお前の物かえ。大根に返辭をさせることが出来るかえ。お前……」

阿Qは言ひも完らぬうちに足もちやげて馳け出した。追つ馳けて来たのは、一つの頗る肥大の黒狗で、これはいつも表門の番をしてゐるのだが、なぜかしらんけふは裏門に来てゐた。黒狗はわん／＼追ひついて来て、あはや阿Qの腿に噛みつきさうになつたが、幸ひ著物の中から一つの大根がころげ落ちたので、狗は驚いて飛びしさつた。阿Qは早くも桑の樹にかじりつき土堀を跨いだ。人も大根も皆垣の外へころげ出した。狗は取残されて桑の樹に向つて吠えた。尼は念佛を申した。

尼が狗をけしかけやせぬかと思つたから、阿Qは大根を拾ふ序に小石を掻き集めたが、狗は追ひかけても来なかつた。そこで彼は石を投げ捨て、歩きながら大根を噛つて、此村もいよく黙

目だ、城内に行く方がいいと想つた。
大根を三本食つて仕舞ふと彼は已に城内行を執行した。

第六章 中興から末路へ

阿Qが再び未莊に現はれた時は其年の中秋節が過ぎ去つたばかりの時だ。人々は皆おツたまげ、阿Qが歸つて来たと言つた。そこで前の事を回想してみると、彼はいつも城内から歸つて来ると非常な元氣で人に向つて吹聴したもんだが、今度は決してそんなことはなかつた。ひよつとすると、彼はお廟の番人に話したかもしれない、未莊のしきたりでは趙太爺と錢太爺ともう一人秀才太爺が城内に行けば問題になるだけで、僞毛唐でさへも物の數にされないのだから、況んや阿Qに於てをやだ。だから番人の親爺も彼のために宣傳する筈もないのに、未莊の人達がどうして知つてゐたのだらう。

だが阿Qの今度の歸りは前とは大に違つてゐた。確かに甚だ驚異の値打があつた。空の色が黒くなつて来た時、彼は醉眼朦朧として、酒屋の門前に現はれた。彼は櫃臺の側へ行つて、腰の邊から伸した手に一杯握つてゐたのは銀と銅。櫃臺の上にざらりと置き、「現金だぞ、

酒を持つて来い」と言つた。見ると新しい袷を着て、腰の邊には大搭連がどつしりと重みを見せ、帯紐が下へさがつて弓狀の弧線をなしてゐる。

未莊の仕來りとして誰でも一寸目覺ましい人物を見出した時、侮るよりも先づ敬ふのである。現在これが明かに阿Qであると知りながら破れ袷の阿Qとは別々である。古人の言葉に「たとひ三日の間でも別れた人に逢つた時には目を見張つて其特徴を見出さなければならん」といつてゐる。さういふわけで、ボーイも番頭も見ず知らずのそこの人も、一種の疑ひを持ちながら自然と敬ひの態度を現はした。

番頭は先づ合點して話しかけた。

「ほう阿Q、お前さん、歸つておいでだね」

「歸つて来たよ」

「景氣がいいねえ。お前さんは——にゐたの……」

「城内に行つてゐた……」此一つのニウスは二日目に未莊ぢうに傳はつた。人々はみな、現金と新しい袷を持つてゐる阿Qの中興史を聴きたく思つた。さういふわけで、酒屋の中でも茶館の中でも廟の軒下でも、皆だんくりに探りを入れて聴き出した。その結果阿Qは新奇の畏敬を得た。

阿Qの話では、彼は擧人太爺の家のお手傳をしてゐた。此一節を聞いた者は皆かしこまつた。此老爺は姓を白といひ城内切つての擧人であるから改めて姓をいふ必要がない。擧人といふ話が出ればつまり彼である。これは未莊だけでさう言つてゐるのではない、此邊百里の區域の内は皆さうであつた。人々は殆んど大抵彼の姓名を擧人老爺だと思つてゐた。其お方のお屋敷でお手傳してゐたのは勿論敬ふべきことである。けれど阿Qの言ふことにや、彼はもう行つてやる氣はない。此擧人老爺は實に非常な「馬鹿者」だ。此話を聞いた者はみな歎息して嬉しがつた。阿Qは擧人老爺の家で働くやうな人ではないが、働かないのも惜しいこつた。

阿Qの話でみると、彼が歸つて來たのは城内の人が氣に入らぬからであるらしい。これはつまり、長凳（長床几）を條凳といふことや、葱の絲切を魚の中に入れたり、そのうへ近頃見つけ出した缺點は、女の歩き方がいやにねぢれて甚だよくない。しかし又大に敬服すべき方面もある。早い話が未莊の田舎者は三十二枚の竹牌（牌の目の二面を以て成立つた牌）を打つだけのことで、麻將を知つてゐる者は偽毛唐だけであるが、城内では小さな餓鬼までが皆よく知つてゐる。なんだつて偽毛唐が、城内の十歳そこゝの子供の手の中に入つて仕舞ふのか。これこそ「小鬼が閻魔様と同資格で會見する」様なもので、聽けば赤面の到りだ。「てめえ達は、首斬を見たことがあるめ

え」と阿Qは言つた。「ふん、見てくれ、革命黨を殺すなんておもしろいもんだぜ」
彼は首をふるると、丁度まん中にゐた趙司晨の顔の上に唾がはねかゝつた。此一言に皆の者はぞつとした。だが阿Qは一向平氣であたりを見廻し、忽ち右手をあげて、折柄頸を延して聽き惚れてゐる王翳のぼんのくぼを目蒐けて、打ちおろした。

「びしやりー」
王翳は驚いて跳び上り稻妻のやうな速力で頸を縮めた。見てゐた人達は氣味悪くもあり、をかしくもあつた。それからといふものは王翳の馬鹿野郎、随分長い間、阿Qの側へは近寄らなかつた。ほかの人達も亦同じやうであつた。

阿Qは此時、未莊の人の眼の中の見當では、趙太爺以上には見えないが、たいていおつかつた偉さに思はれてゐたといつても、さしたる語弊はなからう。

さうかうする中に此阿Qの評判は、忽ち未莊の女部屋の奥に傳はつた。未莊では錢趙兩家だけが大家で、其他はたいてい奥行が浅かつた。けれども女部屋は詰り女部屋であるから一つの不思議と言つてもいい。女どもは寄るとさはると屹度其話をした。鄒七嫂が阿Qの處から買つた一枚のお納戸絹の袴は古いには違ひないが、たつた九十仙だつた。趙白眼の母親も——一説には趙司

晨の母親だといふことだが、それはどうかしらん——彼女も亦一枚の子供の眞赤な瓦斯織の單衣物を買つたが、未だ一寸手を通したばかりの物がたつた三百大錢の九一串であつた。

そこで彼等は眼を皿のやうにして阿Qを見た。絹袴が無い時には、絹袴の出物は無いかと彼に訊ねてみたと思つた。瓦斯織の單衣がほしい時には、瓦斯織の單衣の出物は無いかと彼に訊ねて見たく思つた。今度は阿Qを見ても逃げ込まないで、却つて阿Qのあとを追馳けて、袖を引止めた。

「阿Q、お前はもつと外に絹袴を持つてゐるだらう。え、無いつて。わたしは單衣物もほしいんだよ。あるだらう」

あとでは此様なことが、端近い女部屋から終に奥深い女部屋に傳はつた。鄒七嫂は嬉しさの餘り彼の絹袴を趙太太の處へ持つて行つてお目利きをねがつた。趙太太は又これを趙太爺に告げて一時頗る眞面目になつて話をしたので、趙太爺は晩餐の卓上秀才太爺(息子)と討論した。阿Qは全くどうも少し怪しい。われ／＼の戸締りもこれから注意しなければならんが、しかし彼の品物で、未だ買つてやつていいやうなものがあるかもしれないと思つた。殊に趙太太は直段が安く品物がいい皮の袖無しが欲しいと思つてゐた時だから、遂に家族は決議して鄒七嫂にたのんで阿Qを

すぐに喚んで来いと言つた。且つ之れが爲に第三の例外をひらいて此晩特にしばらく燈をつけることを許された。

油は残り少くなつたが阿Qは未だ到着しなかつた。趙家の内の者は皆待ち焦れて、欠伸をして阿Qの氣紛れを恨み、鄒七嫂のぐうたらを怨んだ。趙太太は春の一件があるので来ないかもしれないと心配したが、趙太爺は、そんなことはない、乃公がよべば屹度来ると思つた。果して趙太爺の見識は高かつた。阿Qは結局鄒七嫂のあとへ跟いて来た。

「此人は只無い無いとばかり言つてゐるんですが、そんならぢかに話して呉れとわたしは言つたんです。彼は何かいふにちがひありません。わたしも言ひます——」鄒七嫂は息をはずませてゐた。

「太爺！」阿Qは薄笑ひしながら簷下に立つてゐた。

「阿Q、お前、大分お金を儲けて来たといふ話だが」と趙太爺はそろ／＼近寄つて阿Qの全身を目分量した。

「何しろ結構なこつた。そこで……噂によるとお前は古著を澤山持つてゐるさうだが、此處へ持つて来て見せるがいい……外でもない、乃公も欲しいと思つてゐるんだ……」

「郷七嫂にも話した通りですが、皆賣切れました」

「賣切れた！」趙太爺の聲は調子が脱れた。「どうしてそんなに早く賣切れたのだ！」

「あれは友達のもので、品數もあんまり多くは無いのですが、少し許り分けてやつたんです」

「そんなことを言つても、未だいくらあるに違ひない」

「たつた一枚幕が残つてをります」

「幕でもいいから持つて来てお見せ」と趙太太は慌てて言つた。

「そんな物はあしたでもいいや」趙太爺はさほど熱心でもなかつた。「阿Q、これからなんでも

品物がある時には、先づ、乃公の處へ持つて来て見せるんだぞ」

「値段は決してほかの家よりすくなく出すことはない」秀才は言つた。

秀才の奥さんはチラリと阿Qの顔を見て彼が感動したかどうかを窺つた。

「わたしは皮の袖無しが一枚欲しいのだが」と趙太太は言つた。

阿Qは應諾しながらも不承々々に出て行つたから、氣にとめてゐるかどうかしらん。これは趙

太爺を非常に失望させ、腹が立つて氣掛りで欠伸がとまつて仕舞ふ位であつた。秀才太爺も阿Q

の態度に非常な不平を抱き、此「忘八蛋」警戒する必要がある。いつそ村役人に吩咐けて此村に置

かないことにしてやらうと言つたが、趙太爺は、そりや好くないことだと思つた。さうすれば怨
みを受けることになる。況してあゝいふことをする奴は大體老いたる鷹は、巢の下物を食はな
い」のだから、此村ではさほど心配するには及ぶまい。只自分の家だけ夜の戸締を少々嚴重にして
置けばいい。

秀才も此「庭訓」には非常に感心してすぐに阿Q追放の提議を撤回し、又郷七嫂にも言ひ含め
て、決してこのやうなことを人に洩らして呉れるな、と言つた。

けれど郷七嫂は次の日の藍袴を黒色に染め替へて阿Qの疑ふべき節を言ひ布らして歩いた。

確かに彼女は秀才の阿Q驅逐の一節を持ち出さなかつたが、これだけでも阿Qに取つては非常
に不利益であつた。最先きに村役人が尋ねて来て、彼の幕を奪つた。阿Qは趙太太に見せる約束
をしたと言つたが、村役人はそれを返しもせず尙ほ毎月何程かの附届けをしると言つた。それ
から村の人も彼に對して忽ち顔付を改めた。疎略なことはするわけもないが却つて甚だ遠ざかる
氣分があつた。此氣分は前に彼が酒屋の中で「びしやり」と言つた時の警戒とは別種のものであつ
た。「敬して遠ざかる」やうな分子が随分多まじつてゐた。

閑人の中には阿Qの奥底を根掘り葉掘り探究する者があつた。阿Qは包まず隠さず自慢らしく

彼の經驗談をなした。

阿Qは小さな馬の脚に過ぎなかつた。彼は垣の上にあがることも出来なければ、洞の中に潛ることも出来なかつた。只外に立つて品物を受取つた。或晩彼は一つの包を受取つて相棒がもう一度入ると、まもなく中で大騒ぎが始まつた。彼はおぞけをふるつて逃げ出し、夜どほし歩いて終に城壁を乗り越え未莊に歸つて來た。彼はこんなことは二度とするものでないと誓つた。此辯明は阿Qに取つては一層不利益であつた。村の人の阿Qに對して「敬して遠ざかる」ものは仕返しはこはいからだ、ところが彼はこれから二度と泥棒をしない泥棒に過ぎないのだ。してみると「これも亦畏るゝに足らない」ものだつた。

第七章 革命

宣統三年九月十四日——即ち阿Qが搭連を趙白眼に賣つてやつた其日——眞夜中過ぎに一つの大きな黒苦の船が趙屋敷の河添ひの埠頭に著いた。此船は黒暗の中に揺られて來た。村人はぐつすり寢込んでゐたので、皆知らなかつた。出て行く時は明け方近かつたがそれが却つて人目を引いた。こつそり調べ出した結果に據ると、船は結局舉人老爺の船であると知れた。

此船はとりもなほさず大不安を未莊に運んで呉れて、晝にもならぬうちに全村の人心は非常に動搖した。船の使命はもとより趙家の極秘であつたが、茶館や酒屋の中では、革命黨が入城するので、舉人老爺がわれゝの田舎に避難して來たと、皆言つた。唯鄒七嫂だけはさうとは言はず、あれは詰らぬガラクタ道具や襪襪著物を入れた箱で舉人老爺が保管を頼んで來たが、趙老爺が突返して仕舞つたんですと言つた。實際舉人老爺と趙秀才はもとからあんまり仲のいい方ではないので「しん身の泣き寄り」などする筈がない。況して鄒七嫂は趙家の隣にゐるので見聞が割合に確實だ。だから大概彼女の言ふことには間違ひがない。

さういふものの、謠言はなかく盛んだ。舉人老爺は自身來たわけではないが長い手紙を寄越して趙家と「仲直り」をしたらしい。趙太爺は腹の中が一變して、どうしても彼に悪い處がないと感じたので箱を預り、現に趙太太の床の下を塞いでゐる。革命黨のことに就いては、彼等は其晩城に入つて、どれもこれも白鉢巻、白兜で、崇正皇帝の白装束を著てゐたといふ。

阿Qの耳朶の中にも、とうから革命黨といふ話を聞き及んで、今年又眼ぢかに殺された革命黨を見た。彼は何處から來たかしらん。一種の意見を持つてゐた。革命黨は謀反人だ、謀反人は俺はいやだ、悪むべき者だ、斷絶すべき者だ、と一途にかう思つてゐた。ところが百里の間に名の

響いた擧人老爺がこの様に懼れたときは、彼も亦些か感心させられずにはゐられない。況して村鳥のやうな未莊の男女が慌て惑ふ有様は、彼をして一層痛快ならしめた。

「革命も好からう」と阿Qは想つた。

「こゝらにゐる馬鹿野郎どもの運命を革めてやれ。恨むべき奴等だ。憎むべき奴等だ……さうだ、乃公も革命黨に入つてやらう」

阿Qは近來生活の費用に窘しみ内々可成りの不平があつた。おまけに晝間飲んだ空き腹の二杯の酒が、廻れば廻るほど愉快になつた。さう思ひながら歩いてゐると、身體がふらりと宙に浮いて來た。どうした機か、ふと革命黨が自分であるやうに思はれた。未莊の人は皆彼の俘虜となつた。彼は得意のあまり叫ばずにはゐられなかつた。

「謀反だぞ、謀反だぞ」

未莊の人は皆恐懼の眼付で彼を見た。かういふ風な可憐な眼付は、阿Qは今まで見たことがなかつた。一寸見たばかりで彼は六月氷を飲んだやうにせい／＼した。彼は一層元氣づいて歩きながら怒鳴つた。

「よし、……乃公がやらうと思へばやるだけの事だ。乃公が氣に入つた奴は氣に入つた奴だ。」

タツタ、チャン／＼。

後悔するには及ばねえ。酔うて錯り斬る鄭賢弟。

後悔するには及ばねえ。ヤーヤーヤー……

タツタ、チャン／＼、ドン、チャラン、チャン。

乃公は鐵の鞭でてめえ達を叩きのめすぞ……

趙家の二人の旦那と本家の二人の男は、表門の入口に立つて革命のことで大論判してゐた。阿

Qはそれに目も呉れず頭をもちやげてまつすぐに過ぎ去つた。

「ドン／＼……」

「Qさま」と趙太爺はおづ／＼しながら小聲で彼を喚びとめた。

「チャン／＼」阿Qは彼の名前の下に、「さま」といふ字が繋がつて來ようとは、まさか思ひも依ら

「なかつた。これは外の話で自分と關係がないと思つたから、只「ドンチャン、ドンチャン、チャラン、チャン／＼」と言つてゐた。

「Qさん」

「思切つてやつつけろ……」

「阿Q！」秀才は仕方なしにもとの通りに其名を喚んだ。

阿Qはやうやく立ちどまつて首をかしげて訊いた。「なんだね」

「Qさま……當節は……」と趙太爺は口を切つたが、言ひ出す言葉もなかつた。「當節は……素晴らしいもんだね」

「素晴らしいと？ あたりまへよ。何をしようが乃公の勝手だ」

「……Q、わしのやうな貧乏仲間は大丈夫だらうな」と趙白眼はこはく訊いた。革命黨の口振りを探るつもりであつたらしく。

「貧乏仲間？ てめえは乃公より金があるぞ」阿Qはさう言ひながらすぐに立去つた。

みんな萎れ返つて物も言はない。趙家の親子は家に入つて灯ともしごろまで相談した。趙白眼も家に歸るとすぐに腰のまはりの搭連をほどいて女房に渡し、箱の中に藏めた。

阿Qは一通りぶら／＼飛び廻つて土穀祠に歸つて來ると、もう酔は醒めてしまつた。

その晩、廟祝の親父も意外の親しみを覚えて阿Qにお茶を薦めた。阿Qは彼に二枚の煎餅をねだり、食べて仕舞ふと四十匁蠟燭の剩り物を求めて燭臺を借りて火を移し、自分の小部屋へ持つて行つてひとり寝た。彼は言ひ知れぬ新しきと元氣があつた。蠟燭の火は元宵（正月）の晩のやう

にパチ／＼と撥ね進つたが、彼の思想も火のやうに撥ね進つた。

「謀反？ 面白いな……來たぞ來たぞ。一陣の白鉢巻、白兜、革命黨は皆ダンピラをひつさげて鋼鐵の鞭、爆彈、大砲、葵形に尖つた兩刃の劍、鎖鎌。土穀祠の前を通り過ぎて『阿Q、一緒に來い』と叫んだ。そこで乃公は一緒に行く、此時未莊の村烏、一群の男女こそは、いかにも氣の毒千萬だぜ。『阿Q、命丈けはどうぞお赦し下さいまし』誰が赦してやるもんか。先づ第一に死ぬべき奴は小Dと趙太爺だ。其外秀才もある。偽毛唐もある。……残る奴ばらは何本ある？ 王なんて奴は残してやるべき筋合の者だが、まあどうでもいいや……」

「品物は……すぐに入り込んで箱を開けるんだ。元寶、銀貨、モスリンの著物……秀才夫人の寢臺を先づ此廟の中へ移して、そのほか錢家の卓と椅子。或は趙家の物でもいい。自分は懐ろ手して小Dなどは顎でつかひ、おい、早くやれ。愚圖々々するとぶんなぐるぞ」

「趙司晨の妹はまづい。郷七嫂の小娘は二三年たつてから話をしよう。偽毛唐の女房は辮子の無い男と寝てゐるが、はッ、こいつはたちが好くねえぞ。秀才の女房は眼蓋の上に疵がある——暫く逢はないが吳媽は何處へ行つたかしら……惜しいことに彼奴少し脚が太過ぎる」

阿Qは彼の胸算用がすつかり片づかぬうちにもう軒をかけた。四十匁蠟燭は燃え残つて五分ほ

どになり、赤々と燃え上る火光は、彼の開け放しの口を照した。

「すまねえ、すまねえ」阿Qは忽ち大聲上げて起き上つた。頭を擧げてきよろ／＼あたりを見廻して四十匁蠟燭に目をつけると、すぐに又頭をおろして睡つて仕舞つた。

次の日は遅く起きて往來に出て見たが、何もかも元の通りであつた。彼はやつぱり肚が耗つてゐた。彼は何か想つてゐながら想ひ出すことが出来なかつた。忽ち何かきまりがついたやうな風で、のそり／＼と大跨に歩き出した。さうして有耶無耶のうちに靜修庵についた。

庵は春の時と同じやうな靜けさであつた。白壁と黒門、彼は一寸思案して前へ行つて門を叩いた。一疋の狗が中で吠えた。彼は急いで瓦のカケラを拾ひ上げ、もう一度前へ行つて、今度は力任せにぶつ叩いて黒門の上に幾つも瘡瘡が出来た時、やうやく人の出て来る足音がした。

阿Qは慌てて瓦を持ちなほし馬のやうに足をふんばつて、黒狗と開戦の準備をした。だが庵門は只一すぢの透間をあけたのみで、黒狗が飛び出すことはないと思つたので、近寄つて行くと、そこに一人の老いたる尼がゐた。

「お前は又來たのか。何の用だえ」と尼は呆れ返つてゐた。

「革命だぞ。てめえ知つてゐるか」と阿Qは口籠つた。

「革命、革命とお言ひだが、革命は一遍済んだよ。……お前達は何だつてそんな騒ぎをするんだえ」尼は眼のふちを赤くしながら言つた。

「何だと？」阿Qは訝つた。

「お前は未だ知らないのだね。あの人達はもう革命を済ましたよ」

「誰だ？」阿Qは更に訝つた。

「秀才と偽毛唐さ」

阿Qは意外のことにおつつかつてわけもなく面喰つた。尼は彼の出鼻をへし折つて隙さず門を閉めた。阿Qはすぐに押し返したが固く締つてゐた。もう一度叩いてみたが返辭もしない。

これもやつぱり其日の午前中の出来事だつた。機を見るに敏なる趙秀才は革命黨が城内に入つたと聞いて、すぐに辮子を頭の上に巻き込み、今までのつと仲悪で通したあの錢毛唐の處へ御機嫌伺ひに行つた。これは「みなともに維れ新たり」の時であるから、彼等は話が弾んで立ちどころに情意投合の同志となり、互に相約して革命に投じた。

彼等はいろ／＼想ひ廻して、やつと想ひ出したのは靜修庵の中の「皇帝萬歲萬、萬歲！」の一つの龍牌だ。これこそすくにも草擲すべきものだと思つたから、二人は時を移さず靜修庵へ行くと、

老いたる尼が邪魔をしたので、彼等は尼を滿洲政府と見做し、頭の上に少からざる棍棒と鐵拳を加へた。尼は彼等が歸つたあとで氣を靜めてよく見ると、龍牌は已に碎けて地上に横たはつてゐるのは尤もだが、觀音様の前にあつた一つの宣徳爐が見當らないのが不思議だ。

阿Qはあとで此事を聞いて頗る自分の朝寢坊を悔んだ。それにしても彼等が阿Qを誘はなかつたのは奇ッ怪千萬である。阿Qは一歩退いて考へた。

「彼等が、今まで知らずにゐる筈はない。阿Qは已に革命黨に投じてゐるのぢやないか」

第八章 革命を許さず

未莊の人心は日々に安靜になり、噂に據れば革命黨は城内に入つたが、何も格別變つたことがない。知縣さまはやつぱり元の位置にゐて何か名目が變つただけだ。擧人老爺は何になつたか——此等の名目は未莊の人には皆わからなかつた。——お上が兵隊を連れて來ることは、これも前からいつもあることで、格別不思議なことでもないが、只一つ恐ろしいのは、ほかに幾らか不良分子が交つてゐて、内部の擾亂を計つてゐることだ。さうして二言目には手を動かして辮子を剪つた。聽けば隣村の通ひ船を出す七斤は途中で引摺まつて、人間らしくないやうな體裁にされて仕

舞つたが、それさへ大した恐怖の數に入らない。未莊の人は本來城内に行くことは少いの、たまたま行く用事があつても差控へて仕舞ふから、此危険にぶつかる者も少い。阿Qも城内に行つて友達に逢ひたいと思つてゐたが、此話を聞くとやめなければならぬ。

だが未莊の人も改革なしでは濟まされなかつた。幾日の後、辮子を頭に巻込む者が逐漸増加した。手ツ取り早く言ふと一番最初が茂才公だ。その次が趙司晨と趙白眼だ。後では阿Qだ。これが若し夏ならば、辮子を頭の上に巻込み、或は一つのかたまりにするのはもとより何も珍らしい事ではないが、今は秋の暮で、此特別の歳事記が行はれたのは、辮子を巻込んだ連中に取つては非常な英斷と言はなければならぬ。未莊としてはこれも亦改革の一つでないといふことは出來ない。

趙司晨は頭の後ろを空坊主にして歩いた。これを見た人は大きな聲を出して言つた。

「ほう、革命黨が來たぞ」

阿Qは非常に羨しく思つた。彼はとうから秀才が辮子をわがねたといふニウスを聞いてゐたが、自分が其様な事をしていいかといふ事に就いて少しも思ひ及ばなかつた。現在趙司晨がかうなつて見ると、急に眞似てみたくなつて實行の決心をきめた。彼は一本の竹箸に辮子を頭の上に

わがね、しばらくためらつてゐたが、思切つて外へ出た。

彼が往來に出ると、人は皆彼を見るには見るが何にも言はない。阿Qは初め不快に感じてあとになるとだん／＼不平が高じて来た。彼は近頃怒りツぽくなつた。實際彼の生活は謀叛前よりは餘程増した。人は彼を見ると遠慮して、どこの店でも現金は要らないといふ、だが阿Qは結局少からざる失望を感じた。もう革命を済ましたのに、こんなわけはない筈だ。さうして一度小Dを見るに愈々彼の肚の皮が爆發した。

小Dも亦頭の上に辮子をわがねた。而も且つあきらかに一本の竹箒を挿してゐた。阿Qはこんなことを彼が仕出かさうとは全く思ひも依らぬことだつた。自分としても亦彼がこのやうな事するのは決して許されない。小Dは何者だらう？ 阿Qはすぐにも小Dに引摺んで、彼の竹箒を捻ぢ折り、彼の辮子をほかして、うんと横面を引ツばたいて、彼が生年月日時の八字を忘れ、圖々しくも革命黨に入つて来た罪を懲らしめてやりたくなつて溜らなくなつたが、結局それも大目に見て、ベツと唾を吐き出し、只睨みつけてゐた。

この幾日の間、城内に入つたのは偽毛唐一人だけであつた。趙秀才は箱を預つたことから、自身擧人老爺を訪問したくは思つてゐたが、辮子を剪られる危険があるので中止した。彼は一封の「黄傘格」の手紙（柿油引の方罫紙）を書いて、偽毛唐に託して城内に届けて貰ひ、自分を自由黨に紹介して呉れと頼んだ。偽毛唐が歸つて来た時には、秀才は四元の銀を拂つて胸の上に銀のメダルを掛けた。未莊の人は皆驚嘆した。これこそ柿油黨（自由と同音、柿油は防水の爲め雨傘に引く、前の黄傘格に對す）の徽章で翰林を抑へつけたんだと思つてゐた。趙太爺は俄に肩身が廣くなり倅が秀才に中つた時にも増して目障りの者が無い。阿Qを見ても知らん顔をしてゐる。

阿Qは不平の眞最中に時々零落を感じた。銀メダルの話を聴くと彼はすぐに零落の眞因を悟つた。革命黨になるのには、投降すればいいと思つてゐたが、それが出来ない。辮子を環ねればいと思つたがそれも駄目だ。第一、革命黨に知合がなければいけないのだが、彼の知つてゐる革命黨はたつた二つしか無かつた。其一つは城内でバサリとやられて仕舞つた。今は只偽毛唐一人を知つてゐるだけで、其毛唐の處へ、相談に行くより外は無かつた。

錢家の大門は開け擴げてあつた。阿Qは、おつかなびつくり入つて行つた。彼は中へ入りかけて非常に驚いたのは、偽毛唐が丁度廣場のまん中に突立つて、眞黒な洋服を着て、銀メダルを付けて、手には曾阿Qを懲らしめたステッキを持つて、一尺餘りの辮子を披いて肩の上に振り下げ、丸で蓬々髪（ほうくがみ）の劉海仙人のやうな恰好で立つてゐたのだ。向き合つて立つてゐたのは、趙白眼

の外三人の閑人で、丁度今恭々しくお話を伺つてゐるところだ。

阿Qはこつそり近寄つて趙白眼の後ろに立ち、心の中ではお引立に預からうと思つてゐるんだが、偕て何と言つたらいいものか、言ひ出す言葉を知らなかつた。

彼を偽毛唐といふのはもとより好くないことだ。西洋人も穩かでない。革命黨も穩かでない。洋先生といへば或はいいかもしれない。

洋先生は眼を白黒して、丁度講義の眞最中であつたから、阿Qに眼も呉れない。

「乃公はせつかちだから顔を見るとすぐに言つた。洪君！ われ／＼は著手しよう。併し彼は結局No.1と言つた。これは洋語だからお前達には分らない。さうでなければもつと早く成功したんだぞ。兎に角、これは彼が大事を取つて仕事をした方面なんだ。彼等は再三再四湖北に行つて呉れと乃公に頼んだが、乃公はそれでも承知しない位だ。誰がこんな小つぽけな縣城の中で事を起さうと願ふ奴があるもんか……」

「えーと、こーつ」阿Qは彼の話が途切れたひまに精一杯の勇氣を振起して口をひらいた。だが、どうしたわけか洋先生と、彼を喚ぶことが出来なかつた。

話を聽いてゐた四人の者は喫驚して阿Qの方を見た。洋先生もやうやく彼に目をとめた。

「何だ」

「わたし……」

「出て行け」

「わたしも……に入りたさ」

「生意氣いふな。ころがり出ろ」と洋先生は人泣かせ棒を振上げた。

趙白眼と閑人は口を揃へて怒鳴つた。

「先生がころがり出ると被仰るのに、てめえは肯かねえのか」

阿Qは頭の上に手を翳して、覺えず知らず門外に逃げ出した。洋先生は追ひ馳けても來なかつた。阿Qは六十歩餘りも馳け出してやうやく歩みを弛め心の中で憂愁を感じた。洋先生が彼に革命を許さないとすると、外に仕様がなない。これから決して白鉢巻、白兜の人が彼を迎へて來るといふ望を起すことが出来ない。彼が持つてゐた抱負、志向、希望、前途が只一筆で棒引されて仕舞つた。閑人のお布れが行届いて、小D、王鬚などに話の種を呉れたのは、やつぱり今度の事であつた。

彼はこのやうな所在なさを感じたことは今まで無いやうに覺えた。彼は自分の辮子を環ねたこ

と就いて無意味に感じたらしく、侮蔑をしたくなつて復讐の考から、立ちどころに辯子を解きおろさうとしたが、それも亦遂に其儘にして置いた。彼は夜になつて遊びに出掛け、二杯の酒を借りて肚の中に飲みおろすと、だん／＼元氣がついて来て、思想の中に白鉢巻、白兜のカケラが出現した。

或日のことであつた。彼は常例に依り夜更けまでうろつき廻つて、酒屋が戸締をする頃になつて漸く土穀祠に歸つて来た。

「パン、パン」

彼は忽ち一種異様な音聲をきいたが爆竹では無かつた。一たい彼は賑やかな事が好きで、下らぬことに手出しをしたがる質だから、すぐに暗の中を探つて行くと、前の方に些か足音がするやうであつた。彼は聴耳立ててゐると、いきなり一人の男が向うから逃げて来た。彼はそれを見るやとすぐに跡に跟着いて馳け出した。その人が曲ると阿Qも曲つた。曲つて仕舞ふと其人は立ちどまつた。阿Qも亦立ちどまつた。阿Qは後ろを見ると何も無かつた。そこで前へ向つて人を見ると小Dであつた。

「何だ」阿Qは不平を起した。

「趙……趙家がやられた。掠奪……」小Dは息をはずませてゐた。

阿Qも胸がドキ／＼した。小Dはさう言つて仕舞ふと歩き出した。阿Qは一旦逃げ出したものの、結局「其道の仕事をやつた」事のある人だから殊の外度胸が据つた。彼は路角に蹶り出て、ぢつと耳を澄まして聴いてゐると何だかざわ／＼してゐるやうだ。そこで又ぢつと見澄ましてゐると白鉢巻、白兜の人が大勢ゐて、次から次へと箱を持出し、器物を持出し、秀才夫人の寧波寢臺を持ち出したやうでもあつたがハッキリしなかつた。

彼はもう少し前へ出ようとしたが兩脚が動かかなかつた。

その夜は月が無かつた。未莊は暗黒の中に包まれて甚だしんとしてゐた。しんとしてゐて羲皇の頃のやうな太平であつた。阿Qは立つてゐるうちにじれつたくなつて来たが、向うでは矢張り前と同じやうに、往つたり来つたりしてゐるらしく、箱を持ち出したり器物を持ち出したり、秀才夫人の寧波寢臺を持ち出したり……

持ち出したと言つても、彼は自分で些か自分の眼を信じなかつた。それでも一步前へ出ようとはせず、結局自分の廟の中に歸つて来た。

土穀祠の中は、一層まつ闇だつた。彼は大門をしつかり締めて、手探りで自分の部屋に入り、

横になつて考へた。かうして氣を靜めて自分の思想の出どころを考へてみると、白鉢巻、白兜の人は確かに著いたが、決して自分を呼び出しには來なかつた。いろんないい品物は運び出されたが、自分の分け前は無い。これは全く偽毛唐が悪いのだ。彼は乃公に謀叛を許さない。謀叛を許せば、今度乃公の分け前がないことはないぢやないか？ 阿Qは思へば思ふほど、イラ／＼して來て耐へ切れず、おもふさま怨んで毒々しく罵つた。

「乃公には謀叛を許さないで、自分だけが謀叛するんだな。馬鹿、偽毛唐！ よし、てめえが謀叛する。謀叛すれば首が無いぞ。乃公はどうしても訴へ出てやる。てめえが縣内に引廻されて首の無くなるのを見てやるから覺えてゐろ。一家一族皆殺した。すばり、すばり」

第九章 大團圓

趙家が掠奪に遭つてから、未莊の人は大抵みな小氣味よく思ひながら恐慌を來した。阿Qも亦いい氣味だと思ひながら内々恐れてゐると、四日過ぎての眞夜中に彼は忽ち城内につまみ出された。その時はしんの闇夜で、一隊の兵士と一隊の自衛團と一隊の警官と五人の探偵がこつそり未莊に到着して闇に乗じて土穀祠を圍み、門の眞正面に機關銃を据ゑつけたが、阿Qは出て來なかつた。

つた。

しばらくの間、様子が皆目知れないので、彼等は焦らずにはゐられなかつた。そこで二萬錢の賞金を懸けて二人の自衛團が危険を冒してやつとことごと垣根を越えて、内外相應じて一齊に闖入し、阿Qを掴み出して廟の外の機關銃の左側に引据ゑた。其時彼は漸くハッキリ眼が醒めた。

城内に著いた時には已に正午であつた。阿Qは自分で自分を見ると、壊れかゝつたお役所の中に引廻され、五六遍曲ると一つの小屋があつて、彼は其中へ押し込められた。彼は一寸よろけたばかりで、丸太を整列した門が彼の後ろを閉ぢた。其他の三方はキツタテの壁で、よく見ると室の隅にもう二人ゐた。

阿Qは随分どぎまぎしたが、決して非常な苦悶ではなかつた。それは土穀祠の彼の部屋は此部屋よりも決してまさはることは無かつたからだ。そこにゐた二人は田舎者らしく、だん／＼懇意になつて話してみると、一人は擧人老爺の先々代に滞つてゐた古い地租の追徴であつた。もう一人は何のこつたか好く解らなかつた。彼等は阿Qにわけを訊くと、阿Qは臆面なく答へた。「乃公は謀叛を起さうと思つたからだ」

阿Qは午後から丸太の門の外へ引きずり出され大廣間に行つた。正面の高い所にくり／＼坊主

の親爺が一人坐してゐた。阿Qは此人は坊さんかもしれないと思つて、下の方を見ると、兵隊が整列して、兩側に長い著物を著た人が十幾人も立つてゐた。中にはイガ栗坊主の親爺もあるし、一尺許り髪を残して後ろの方に披いてゐた偽毛唐によく似た奴もあつた。彼等は皆同じやうな佛頂面で目を怒らして阿Qを見た。阿Qはこりやあ屹度お歴々に違ひないと思つたから、膝の關節が自然と弛んでべたりと地べたに膝をついた。

「立つて物を言へ、膝を突くな」と長い著物の人は一齊に怒鳴つた。

阿Qは承知はしてゐるが、どうしても立つてゐることが出来ない。我れ知らず身體が縮こまつて其勢に押されて揚句の果ては膝を突いて仕舞ふ。

「奴隸根性！……」と長い著物を著た人はさげすんでゐたやうだが、其上立てとも言はなかつた。

「お前は本當にやつたんだらうな。ひどい目に遭はぬうちに言つて仕舞へ。乃公はもうみんな知つてゐるぞ。やつたならそれでいい。放してやる」とくりくり坊主の親爺は、阿Qの顔を見詰めて物柔かにハッキリ言つた。

「やつたんだらう」と長い著物を著た人も大聲で言つた。

「わたしはどうから……來ようと思つてゐたんです……」阿Qはわけも分らず「通り想ひ廻し

て、やつとこんな言葉をキレトくに言つた。

「そんならなぜ來なかつたの」と親爺はしんみりと訊いた。

「偽毛唐が許さなかつたんです」

「嘘を吐け。此場になつてもう遅い。お前の仲間は今何處にゐる」

「何でげす？」

「あの晩、趙家を襲つた仲間だ」

「あの人達は、わたしを喚びに來ません。あの人達は、自分で運び出しました」阿Qは其話が出ると憤々した。

「持ち出して何處へ行つたんだ。話せば赦してやるよ」親爺は又しんみりとなつた。

「わたしは知りません。……あの人達はわたしを呼びに來ません」

そこで親爺は目遣ひをした。阿Qは又丸太格子の中に抛り込まれた。彼が二度目に同じ格子の中から引きずり出されたのは二日目の午前であつた。

大廣間の模様は皆もとの通りで、上座には、矢張りくりくり坊主の親爺が坐して、阿Qは相變らず膝を突いてゐた。

親爺はしんみりときいた。「お前はほかに何か言ふことがあるか」

阿Qは一寸考へてみたが、別に言ふ事もないので「ありません」と答へた。

そこで一人の長い著物を著た人は、一枚の紙と一本の筆を持つて、阿Qの前に行き、彼の手の中に筆を挿し込まうとすると、阿Qは非常におつたまげて、魂も身に添はぬ位に狼狽した。彼の手が筆と關係したのは今度が初めてで、どう持つていいか全くわからない。すると其人は一個所を指して花押の書き方を教へた。

「わたし、……わたしは……字を知りません」阿Qは筆をむんづと攔んで愧かしさうに、恐る恐る言つた。

「ではお前のやりいいやうに丸でも一つ書くんだね」

阿Qは丸を書かうとしたが筆を持つ手が顫へた。そこで其人は彼のために紙を地上に敷いてやり、阿Qはうつぶしになつて一生懸命に丸を書いた。彼は人に笑はれちや大變だと思つて正確に丸を書かうとしたが、悪むべき筆は重く、ガタ／＼顫へて、丸の合せ目まで漕ぎつけると、ピンと外へ脱れて瓜のやうな恰好になつた。

阿Qは自分の不出来を愧かしく思つてゐると、其人は一向平氣で紙と筆を持ち去り、大勢の人

は阿Qを引いて、もとの丸太格子の中に抛り込んだ。

彼は丸太格子の中に入れても格別大して苦にもしなかつた。彼はさう思つた。人間の世の中は大抵もとから時に依ると、掴み込まれたり掴み出されたりすることもある。時に依ると紙の上には丸を書かなければならぬこともある。だが丸といふものがあつて丸くないことは、彼の行ひの一つの汚點だ。併しそれもまもなく解つて仕舞つた、孫子であればこそ丸い輪が本當に書けるんだ。さう思つて彼は睡りに就いた。

ところが其晩舉人老爺は中々睡れなかつた。彼は少尉殿と仲たがひをした。舉人老爺は贓品の追徴が何よりも肝腎だと言つた、少尉殿は先づ第一に見せしめをすべしと言つた。少尉殿は近頃一向舉人老爺を眼中に置かなかつた。卓を叩き腰掛を打つて彼は説いた。

「一人を鎗玉に上げれば百人が注意する。ねえ君！ わたしが革命黨を組織してから未だ二十日にもならないのに、掠奪事件が十何件もあつて丸切り舉らない。わたしの顔が何處に立つ？ 罪人が擧つても君は未だ愚圖々々してゐる。これが旨く行かんと乃公の責任になるんだよ」

舉人老爺は大に窮したが、猶ほ頑固に前説を固持して贓品の追徴をしなければ、彼は即刻民政の職務を辭任すると言つた。けれど少尉殿はびくともせず、「どうぞ御隨意になさいませ」と言つ

た。

そこで學人老爺は其晩たうとうまんじりとしなかつたが、翌日は幸ひ辭職もしなかつた。

阿Qが三度目に丸太格子から掴み出された時には、即ち學人老爺が寝つかれない晩の翌日の午前であつた。彼が大廣間に來ると上席にはいつもの通り、くりく坊主の親爺が坐つてゐた。阿Qも亦いつもの通り膝を突いて下にゐた。親爺はいとも懇ろに尋ねた。「お前は未だほかに何か言ふことがあるかね」

阿Qは一寸考へたが別に言ふこともないので、「ありません」と答へた。

長い著物を著た人と短い著物を著た人が大勢ゐて、忽ち彼に白金巾の袖無しを著せた。上に字が書いてあつた。阿Qは甚だ心苦しう思つた。それは葬式の著物のやうで、葬式の著物を著るのは縁喜が好くないからだ。併しさう思ふまもなく彼は兩手を縛られて、すんくお役所の外へ引きずり出された。

阿Qは屋根無しの上の車の上に昇ぎあげられ、短い著物の人が幾人も彼と同座して一緒にゐた。

此車は立ちどころに動き始めた。前には鐵砲をかついだ兵隊と自衛團が歩いてゐた。兩側には大勢の見物人が口を開け放して見てゐた。後ろはどうなつてゐるか、阿Qには見えなかつた。し

かし突然感じたのは、こいつはいけねえ、首を斬られるんぢやねえか。

彼はさう思ふと心が顛倒して二つの眼が暗くなり、耳朶の中がガーンとした。氣絶をしたやうでもあつたが、しかし全く氣を失つたわけではない。或時は慌てたが、或時は又却つて落著いた。

彼は考へてゐるうちに、人間の世の中はもとくこんなもんで、時に依ると首を斬られなければならぬこともあるかもしれない、と感じたらしかつた。

彼は又見覚えのある路を見た。そこで少々變に思つた。なぜお仕置に行かないのか。彼は自分が引廻しになつて皆に見せしめられてゐるのを知らなかつた。しかし知らしめたも同然だつた。

彼は只人間世界はもとく大抵こんなもんで、時に依ると引廻しになつて皆に見せしめなければならぬものであるかもしれない、と思つたかもしれない。

彼は覺醒した。これはまはり道してお仕置場にゆく路だ。これは屹度すばりと首を刎ねられる

んだ。彼はガツカリしてあたりを見ると、丸で蟻のやうに人が附いて來た。さうして圖らずも人ごみの中に一人の吳媽を發見した。随分しばらくだつた。彼女は城内で仕事をしておたのだ。彼は忽ち非常な羞恥を感じて我れながら氣が減入つて仕舞つた。つまりあの芝居の歌を唱ふ勇氣がないのだ。彼の思想は宛ら旋風のやうに、頭の中を一まはりした。「若寡婦の墓参り」も立派な歌

ではない。「龍虎圖」の「後悔するには及ばぬ」も餘りつまらな過ぎた。やつぱり「手に鐵鞭を執つてキサマを打つぞ」なんだらう。さう思ふと彼は手を舉げたくなつたが、考へてみると其手は縛られてゐたのだ。そこで「手に鐵鞭を執り」さへも唱へなかつた。

「二十年過ぎれば之れも亦一つのものだ……」阿Qはゴタ／＼の中で、今まで言つたことのない此言葉を「師匠も無しに」半分ほどひり出した。

「好!!!」と人ごみの中から狼の吠聲のやうな聲が出た。

車は停まらずに進んだ。阿Qは喝采の中に眼玉を動して吳媽を見ると、彼女は一向彼に眼を止めた様子もなく只熱心に兵隊の背の上にある鐵砲を見てゐた。

そこで、阿Qはもう一度喝采の人を見た。

此刹那、彼の思想は宛ら旋風のやうに腦裏を一廻りした。四年前に彼は一度山下で狼に出遇つた。狼は附かず離れず跟いて来て彼の肉を食はうと思つた。彼は其時全く生きてゐる空は無かつた。幸ひ一つの薪割を持つてゐたので、漸く元氣を引起し、未莊まで持ちこたへて來た。これこそ永久に忘れぬ狼の眼だ。憶病でゐながら鋭く、鬼火のやうにキラめく二つの眼は、遠くの方から彼の皮肉を刺し通すやうでもあつた。ところが彼は今まで見た事もない恐ろしい眼付

を更に發見した。鈍くもあるが鋭くもあつた。すでに彼の話を咀嚼したのみならず、彼の皮肉以上の代物を嚼みしめて、附かず離れずとこしへに彼の跡にくつついて來る。此等の眼玉は一つに繋がつて、もう何處かそこらで彼の靈魂に咬みついてゐるやうでもあつた。

「助けて呉れ」

阿Qは口に出して言はないが、其時もう二つの眼が暗くなつて、耳朶の中がガアンとして、全身が木葉微塵に飛び散つたやうに覺えた。

當時の影響からいふと最も大影響を受けたのは、却つて舉人老爺であつた。それは盜られた物を取返すことが出來ないで、家ぢうの者が泣き叫んだからだ。その次に影響を受けたのは趙家であつた。秀才は城内へ行つて訴へ出ると、革命黨の不良分子に辮子を剪られた上、二萬文の懸賞金を損したので家ぢうで泣き叫んだ。その日から彼等の間にだん／＼遺老氣質が發生した。

輿論の方面からいふと未莊では異議が無かつた。むろん阿Qが悪いと皆言つた。ぴしやりと殺されたのは阿Qが悪い證據だ。悪くなければ銃殺される筈が無い。併し城内の輿論は反つて好くなかつた。彼等の大多數は不満足であつた。銃殺するのは首を斬るより見ごたへがない。その

上なげあんなに意氣地のない死刑犯人だつたらう。あんなに長い引廻しの中に歌の一つも唱はな
いで、折角跡に跟いて見たことが無駄骨になつた。

(一九二一年十二月)

端午節

方玄綽は近頃「大差ない」といふ言葉を愛用し殆んど口癖のやうになつた。それは口先ばかり
でなく彼の頭の中にしかと根城を据ゑてゐるのだ。彼は初め「いづれも同じ」といふ言葉をつかつ
てゐたが、後でこれはびつたり来ないと感じたらしく、そこで「大差ない」といふ言葉に改め、す
つとつかひ續けて今日に及んでゐる。

彼は此平凡な警句を發見してから少からざる新しき感慨を引起したが、同時に又幾多の新しき
慰安を得た。譬へば目上の者が目下の者を抑へつけてゐるのを見ると、以前は癢に障つてたまら
なかつたが、今はすつかり氣を更へて、いづれ此少年が子供を持つと、大概こんな大見榮を切る
のだらうと、さう思ふと何の不平も起らなくなつた。又兵隊が車夫を擲ると以前はむつとしたが、
倘し此車夫が兵隊になり、兵隊が車夫になつたら大概こんなもんだらうと、さう思ふともう何の

氣掛りもなかつた。

さういふ風に考へた時、時に又疑ひが起る。自分は此惡社會と奮闘する勇氣がないから、殊更心にもなくかういふ逃げ路を作つてゐるのぢやないか。甚だ「是非の心無き」に近く、好きに改めるに如かざるに遠しといふわけで、この意見が結局彼の頭の中に生長して來た。

彼が此「大差無し」説を最初公表したのは、北京の首善學校の講堂であつた。何でも歴史上の事柄に關して説いてゐたのであつたが、「古今の人相違からず」といふことから、各色人種の等しき事、「性相近し」に説き及ぼし、遂に學生と官僚の上に及んで大議論を誘發した。

「現在社會で最も廣く行はれる流行は官僚を罵倒すること、此運動は學生が最も甚しい。だが官僚は天のなせる特別の種族ではない。取も直さず平民の變化したもので、現に學生出身の官僚も少からず、老官僚と何の撰ぶところがあらう。『地を易へれば皆然り』思想も言論も舉動も風采も元より大した區別のあるものではなく、則ち學生團體の新に起した許多の事業は、すでに弊害を免れ難く、其大半は線香花火のやうに消滅したではないか。全く大差無しである。但し中國將來の考慮すべき事は乃ち此處にあるので……」

講堂の中には二十名餘りの學生が散在してゐた。或者はいかにもさうだ、といふやうな顔付した。此話を好いと思つたのだらう。或者は憤然とした。青年の神聖を侮辱すると思つたのだらう。他の幾人は微笑を含んで彼を見た。大方彼自身の辯解とこれを見たのだらう。方玄緯は官僚を兼ねてゐたからである。

しかし此推定は皆誤りであつた。實際これは彼の新不平に過ぎないので、不平を説いてはゐるが、彼の分に安する一種の空論にしかあり得ない。彼は自分では氣がつかないが、怠け者のせむか、それとも又役に立たないせむか、兎に角運動を肯じないで、分に安じ己を守る人らしく見えだ。大臣は彼に神經病があるのを罪無きものに思ひ、彼の地位に動搖が來さないから、彼は一言も言ひ出さないのだ。教員の月給が半年ほど渡らないが、一方には官俸を取つて支持してゐるから、彼は一言も言ひ出さないのだ。教員が聯合して月給の支拂を要求した時、彼は内心大人げないことだ、騒々しいことだと思つたが、官僚が度を越えて教員を疎外したといふ話を聞き及んで聊か感ずるところあり、其後一轉して自分も丁度金に困り、さうしてほかの官僚は教員を兼任してゐないといふ事實を確めたので初めて成程と感づいたのである。

彼は金に差支へたが教員の團體には加入しなかつた。併し衆が罷業すれば講堂には出ない。政府は「授業をすればお金をやる」と聲明したが、此言葉は彼に取つては非常に恨めしかつた。丸で

果實を見せびらかして猿を使ふやうなものである。それに或大教育家の説得が甚だ氣に食はなかつた。

「片手に書物を抱へて片手に錢を要求するのは甚だ高尚でない」と、彼は此時、初めて彼の夫人に對して不平を洩した。

「おい、たつた二皿だけか？ どういふわけなんだえ、これは」
高尚でないといふ説を聞いた其日の晩、彼はお惣菜を眺めてさう言つた。

新教育を受けたことのない奥さんには學名もなければ雅號もなかつた。だから別に何と言ひやうもなかつた。舊例に據れば「夫人」と呼んでいいのだけれど、彼は古臭いのが嫌ひで、「おい」といふ一語を發明した。夫人は彼に對して「おい」といふ一語すらも所持せず、たゞ面と向つて話すだけである。それでも習慣法に據つて、その言葉が彼に對して發せられるといふことが解るのである。

「だけど、先月の分は一割五分しかないのですもの、みんな遣ひ切つて仕舞ひました。きのふのお米はそれやもう、やうやくのことで借りて來たんですよ」
彼女は卓の側に立つて彼と顔を合せた。

「そら見ろ、本を教へて月給取るのが卑しいか。これは皆連絡のあることで、人は飯を食はなければならん、飯は米で作らなければならん、米は錢で買はなければならん。こんな些細のことを知らないのか……」

「全くさうよ、お金なしではお米が買へません、お米なしでは御飯が焚けません……」
彼女の兩方の頬べたがふか／＼動き出した。此怒つたやうな答案は、丁度彼の「大差無し」に殆んどびつたり符合するものである。續いて彼女は頭をくるりと向うへむけて歩き出した。習慣法に據れば、これは討論中止の宣告を表示したものである。

凄風冷雨の此一日が來てから、教員等は政府に未拂月給を請求したので、新華門前の泥々の中で軍隊に打たれ、頭を破り、血だらけになつた後で、慥かに何程かの月給が渡つた。方立紳は手を一ひと動かさずにお金を受取つた。古い借金を少し片づけたが未だ中々大ものが残つてゐた。それは官俸の方が頗る停滞してゐたからで、かうなるといくら清廉潔白の官吏でも、月給を催促しないではゐられない。況してや教員を兼ねた方立紳は、自然教育會に同情を表することになつた。だから衆が罷業の繼續を主張すると、彼は未だ一度も其場に臨んだことはないが、しんから悦服して公共の決議を守つた。

それはさうと政府は遂に金を拂つた。學校も亦開校した。ところが其二三日前に、學生聯盟は政府に一文を上呈し、「教員が授業しなかつたら未拂月給を渡す必要はない」と言つた。これは少しも効力がなかつたが、方玄緯は前の「授業すればお金をやる」といふ政府の言葉を思ひ出し、「大差無し」の一つの影が眼の前に浮び出し、どうしても消滅しない。そこで彼は講堂の上で公表した。

右の通り此「大差なし」を煎じ詰めると、そこに一種の私心的不平が伴うてゐることがわかり、決して自分が官僚を兼ねてゐることを辯解したものではない。只いつもかういふ場合に彼は常に喜んで、中國將來の運命といふやうな問題を持出し、憤みを忘れて自分が立派な憂國の志士であるやうに振舞ふ。人々は常に「自ら知るの明なきを苦しむものである。」

しかし「大差無し」の事實は又々發生した。政府は先づ人の頭痛の種を痔く教員を放つたらしかし、あとではあつても無くていいやうな役人どもを放つたら可した。未拂ひ又未拂ひ、さきに教員を輕蔑してゐた役人どもは、其うち幾人かは月給支拂要求大會の驍將となつた。二三の新聞には彼等を卑み笑ふ文字が甚だ多く現はれたが、方玄緯はこれを少しも不思議とは思はない。何となれば彼の「大差無し」説に依つて、新聞記者は未だ潤筆料の支拂ひが停止しないから、かう

いふ呑氣な記事を書くので、萬一政府若しくは後援者が補助金を斷つに至つたら、彼等の大半は大會に赴くだらうと認識したからである。

彼は既に教員の月給支拂請求に同情したので、自然同僚の月給支拂請求にも賛成した。しかし彼は衆と一緒に金の催促にはゆかない。矢張りいつものやうにお役所の中に坐り込んでゐる。彼は一人偉がつてゐるのぢやないかと疑ふ人もあつたが、それは一種の誤解に過ぎない。彼自身の説に據ると、生れてこの方、人は彼に向つて借金の催促をするが、彼は人に向つて貸金の催促をしたことがない。だから此點に於いては「長ずる處にあらす」。その上彼は手に經濟の權を握る人物が大嫌ひだ。此種の人物は一旦權勢を失つて、大乘起信論を捧げ、佛敎の原理を講ずる時には勿論甚だ「誦然親しむべき」ものがある。けれど未だ寶座の上にある時には結局一つの闇魔面で、他人は皆奴隸のやうに見え、自分ひとりが此見すばらしい奴の生殺の劍を握つてゐると思つてゐる。さういふわけで彼は此種の人物を見るのもいやだし、又見たいとも思つてゐない。此氣癖が時に依ると、自分ながらも一人離れて偉く見えるが、同時に實は本領がないのぢやないかと疑ふことがある。

誰も彼も左を求め右を求め、一節期一節期を愚圖々々に押し通して來たが、方玄緯などは以

前に比べると逆もあがきを取りにくくなつて来た。だから追ひ使ひのボーイや出入の商人はいふまでもなく、彼の奥さん、方太太ですらも彼に對してだんく敬意を缺くやうになつて来た。彼女は近頃調子を合せず、いつも一人極めの意見を持出し、押し強い仕打ちがあるのを見てもよくわかる。五月四日の午前に追つて彼は役所から歸つて来ると、彼女は一攫みの勘定書を彼の鼻先に突きつけた。これは今までにないことである。

「すつかりメめ上げると百八十圓。此拂ひが出来ますか」

彼女は彼に目も呉れずに言つた。

「フン、乃公はあすから官吏はやめだ。金の引換券は受取つたが、給料支拂要求大會の代表者は金を握り締め、初めは同じ行動を取らない者にはやらないと言つたが、あとでは、又、彼等の跡へ跟いて行つてぢかに受取れと言つた。彼等はけふお金を握ると急に闇魔面になつた。乃公は實際見るのもいやだ。金は要らない、役人もやめだ。これほどひどい屈辱はない」

方太太は此稀れに見るの公憤を見ていさゝか愕然としたが、すぐに又落ちついて

「わたしはやはり御自分で取りに被入る方がいいと思ひます。これぢやしやうがありませんからね」

と、彼女は彼の顔色を窺つた。

「乃公は行かない。これは官俸だよ。賞與ではないぞ。定例に依つて會計課から送つて来るのが當りまへだ」

「だけど、送つて来なかつたらどうしませうね。お、昨日いふのを忘れましたが、子供の月謝を度々催促されて、若し此上拂はないと學校で……」

「馬鹿言へ、大きな大人を教育してさへ金が取れんに、子供に少し許り本を讀ませて金が要るのか」

彼はもう理窟も何も放つたらかして彼女を校長がはりにして鬱憤を晴らすつもりでゐるらしいから手がつけられない。で、彼女はなんにも言はない。

二人は黙々として晝飯を食つた。彼は一しきり考へ込んでさも惱ましげに出て行つた。

舊例に依れば近年は節期や大晦日の一日前にはいつも彼は夜中の十二時頃、やうやく家に到着して歩きながら懐中を探り大聲出して

「おい、取つて来たよ」

と、ごちや交ぜにした中國交通銀行の紙幣を彼女に渡し、顔の上には聊か得意の色があつた。

ところが五月四日のけふといふけふは先例を破つて彼は七時前に歸つて来た。

方太太は大層心配して、彼は辭職したかもしれないと、そつと顔色を覗いて見たが、別段悲觀した様子も見えない。

「どうしてこんなに早かつたの」

彼女は彼の顔色を見定めて言つた。

「拂出しが十分でないから受取ることが出来ない。銀行はとつくに門を閉めて仕舞つたから、八日まで待つより外はない」

「自分で被入つたの」

彼女は恐る／＼きいた。

「自分で行くことは取消されてやつぱり會計課から分送することになつた。しかしけふはもう銀行が閉まつたから、三日休んで八日の午後まで待たなければならぬ」

彼は席に腰を卸し地面を見詰めながら一口お茶をのんでやうやく口をひらいた。

「いい按排に役所の方では未だ問題が起らないから、大概八日になつたらお金が入るだらう……あんまり懸念にしない親戚や友達のところへ金を借りにゆくのは、實につらい話だ。わたしは午

後厚釜しく金永生を訪ねて暫く話をした、彼はわたしが給金を請求せぬことや、直接受領せぬことを非常な清高な行ひとして賞讃したが、わたしが五十圓融通して呉れと申込むと、忽ち彼の口の中へ一攫みの鹽を押し込んだやうに大凡彼の顔ぢうで皺の出来るところは皆皺が出来た。近頃は家賃が集まらないし、商賣の方では元を食ひ込むし、これでも中々困つてゐるのですよ。同僚の前へ行つて取るべきものを取るのには當然ですから、さういふことにおしなさい、とすぐにわたしを弾き出した」

「節句の眞際になつて金を借りに行つたつて、誰が貸すもんですか」

方太太は當りまへのやうな顔付で少しも口惜しがらない。

方女嬢は頭をさげて、これは無理もないことだ。わたしと金永生は元から深い識合ひではなかつた。彼は續いて去年の暮れのことを思ひ出した。そのとき一人の同郷生が十圓借りに来た。彼は明かにお役所の判のついである手形を持つてゐたが、その人が金を返して呉れないと困ると思つて、甚だ六ツかしい面を作り、役所の方からは未だ月給が下らない、學校の方も駄目で、實に「愛してはゐるが助けることが出来ない」と言つて彼を空手で追ひ歸した。其時自分はどうな顔をしてゐたか。勿論自分では見ることは出来ないが、何しろ頗る息がつまり唇が顫へて、頭を動

かしてゐたに違ひない。

それはさうと彼は、ふと何かいい想ひつきをしたやうに、ボーイを呼んで命令を發した。

「街へ行つて『蓮花白』を一瓶借りて來い」

店屋は明日の拂ひを當てにしてゐるから大抵貸さないことはあるまい。若し貸さなければ彼等は當然の罰を受けて、明日は一文も貰へないのだ。

蓮花白は首尾よく手に入つた。彼は二杯のむと青白い顔が眞赤になつた。飯を食つて仕舞ふと彼は頗る上機嫌になり、太巻のハートメンに火を點け、卓上から嘗試集を攫み出し、床の上に横たはつて見てゐた。

「ぢや、あしたは出入の商人の方はどうしませう」

方太は突然押掛けて來て床の前に突立つた。

「商人? …… 八日の午後來いと言へ」

「わたしにはそんなことが言へません。向うで信用しません、承知しません」

「信用しないことがあるもんか。向うへ行つて聞けばわかる。役所ぢうの人は誰一人貰つてゐない。皆八日だ」

彼は人差指を伸ばして蚊帳の中の空間に一つの半圓を畫いた。方太はその半圓を見てゐると、忽ちその手は嘗試集を攫んだ。

方太は此横車押を見て、あいた口が塞がらなかつた。

「わたしやこんな風ぢや逆もやりきれませんよ。これから先きのことを考へて、何か他の事でも始めたら……」

彼女は遂にべつの道を求めた。

「何か他の方法といつても、乃公は『筆の上では筆耕生にもなれないし、腕力では消防夫にもなれない』、別にどうしやうもない」

「貴郎は上海の本屋に文章を書いてやりませんか」

「上海の本屋? あいつも愈々原稿を買ふ段になると、一つく字を勘定するからね。空間は勘定の中に入れない。お前、見たらう。乃公があゝの白話詩を作つた時、空間がどの位あつたか。恐らく一冊書いて三百文位のものだ。印税は半年経つても音沙汰がない。『遠くの水では近處の火事が救へない』、逆も面倒だよ」

「そんなら此處の新聞社におやりになつてみたら……」

「なに、新聞社にやると？ 此處の一番大きな新聞社へ、乃公は此間或る學生を世話して、向うの編輯の顔で原稿を買つて貰つたが、一千字書いても幾らにもならん、朝から晩まで書き詰めに書いても、お前達を養ふことが出来ない。況して乃公の肚の中にはあんまり名文章がないからな」

「そんなら節句が過ぎたら、どうする積りなんです」

「節句が過ぎたら？ やつぱり官吏さ。あした商人が来て金呉れと言つたら、八日の午後に来いと言ひさへすればいい」

彼は嘗試集を取つて又読み始めた。方太太は慌てて語をついだ。

「節句が過ぎて八日になつたら、わたしや……いつそのこと富籤でも買つた方がいいと思ひますわ」

「馬鹿な！ そんな無教育なことを言ふ奴があるもんか」

彼は忽ちあの時のことを想ひ出した。金永生から追拂はれて、ぼんやりとして稻香村(菓子屋)の前まで来ると、店先にぶらさげてある一斗樹大の廣告文字を見た。「一等幾萬圓」には一寸心が動いたが、或は足の運びがのろくなつたのかもしれない、兎に角臺口の中に残つてゐるのは僅に六

十錢。實はそれを捨てかねたから思ひ切りよく遠のいたのだ。彼が顔色を變へると、方太太は彼女の無教育を怒つたのかと思つて話の結末をつけずに退出した。方玄緯も亦話の結末をつけずに腰を伸ばして嘗試集を読み始めた。

(一九二二年六月)

白光

陳士成が縣の試験の發表を見て、家へ歸つて来た時にはもう午後であつた。彼は行つた時には手ツ取早く揭示板を見て、先づ上段の陳字を捜した。陳字も少くはないが、皆先きを争ひ、遅るるを恐れるやうに彼の眼の中に躍り上つて来た。しかしそれに繋がつてゐるのは士成の二字ではなかつた。彼は新規巻きなほしにもう一度十二枚の揭示の圓圖の中を一つ一つ捜して尋ねて人名を皆見盡したが、遂に陳士成の名を見出すことが出来なかつた。彼は只試験場の壁の前に突立つてゐた。

涼風はそよ／＼と彼の白髪交りの短い髪の毛を吹き散らしたが、初冬の太陽は反つて暖かに彼を照し、日に晒された彼は眩暈を感じて、顔色は灰色に成り變り、過勞のため赤く腫れ上つた二つの眼の中から奇妙な閃光が飛び出した。此時は、實はもう壁の上の揭示などは眼の中にない。

只澤山の眞黒な〇〇がふら／＼と眼の前に浮び出してゐるのだ。

づば抜けた秀才として初等試験から高等試験まで立續けに及第し……村の物持はあらゆる手段を以て縁を繋ぎ求め、人々は皆神佛のやうに畏敬し、深く前の輕薄を悔いて氣を失ふばかり……自分の襪履屋敷の門内を賃借りする雜姓を追ひ出し——追ひ出すどころか、中々どうして彼等自身で運び出す——家屋は面目を一新して門口には旗竿と扁額……位が欲しければ京官となるもし、金が欲しければ地方官となるがいい。……彼は常日頃割り當ててゐた行先が、此時潮を受け、たキンカ糖の塔のやうに、ガラリと崩れて、只うづ高き破片のみが餘つてゐた。彼は藻抜きの殻をぐるりと廻して知らず／＼家路に著いた。

彼は漸く自分の家の門口に著いた。七人の生徒は一齊に口を開けてがや／＼と本を読み始めた。彼はびつくりして、耳の側で鐘を叩かれたやうに感じた。見ると七人の頭が小さな辮子を引いて眼の前に浮び上つた。部屋中に浮び上つて黒い輪に挟まれながら跳り出した。彼は椅子に腰を卸してよく見ると、彼等は夜學に来てゐるのだが、彼の顔色を窺ふやうにも見えた。

「歸つてもうさ」

彼はやうやくのことで、これだけのことを悲しげに言つた。

子供等はぞんざいに本を包んで小腕に抱へ、砂煙を揚げて馳け出して行つた。
陳士成は未だいろ／＼の小さな頭が黒い輪に挟まれて眼の前に踊り出すのを見た。それが、時には交ぜこぜになり、時には又異様な陣立に排列され、遂にだん／＼減少してぼんやりとして来た。

「今度もこれでお終ひ」

彼はびつくりして跳び上つた。明らかに耳の側で話してゐるのである。振り返つてみると人がゐるわけではない。まるでポーンと一つ、鐘を叩くやうにも聞えたので、自分の口でもいひなほしてみた。

「今度もこれでお終ひ」

彼は忽ち片方の手を上げて指折數へて考へてみると、十一、十三回、今年も入れて十六回だ、たうとう文章のわかる試験官が一人も無かつた。眼があつても節穴同然、氣の毒なこつた、と思はずクス／＼と噴き出したが、又憤然として忽ち本の包の中から、正しく書き寫した制藝文と試験用紙を脱き出し、それを持つて外へ出た。家の門まで出ると凡てがハッキリ見え出し、一群の鶏も彼を笑つてゐるので度肝を抜かれて引込んだ。

彼は部屋に入つて席に著くと、二つの眼が異常に光つた。彼の眼はいろ／＼のものを見ながら甚だ攫みどころのない。キンカ糖の塔のやうに崩れた行先が眼の前に横たはつた。此行先はひたすら廣大にのみなりゆきて、彼の一切の路を堰き止めた。

よその家の煮焚きの煙は、すつと前に消え盡して、箸もお碗も洗つて仕舞つたが、陳士成は未だ飯も作らない。此處の長屋を借りて住む趙錢李孫(源平藤橘)は長いしきたりを知つてゐて、凡そ縣試験の年頭に當り、成績が發表されたあとで、このやうな彼の眼付を見ると、匆々門を締め、餘計なことに關係せぬに越したことはないから、眞先きに人聲が絶え、續いて次から次へと燈火を消して仕舞ふので、牙え渡つた月が獨りゆる／＼と寒夜の空に出現した。

青い空は一つの海のやうな工合で、そこに聊か見える浮雲は、宛ら筆洗の中で白筆を洗つたやうに棚曳き、牙え渡つた月は陳士成に向つて冷やかな波を灌ぎかけ、初めは只新に磨いた一面の鐵鏡に過ぎなかつたが、此鏡は却つて正體の知れぬ陳士成の全身を透きとほして、彼の身體の上に鐵の月明を映じた。

彼は室外の院子の中をさまよつてゐたが、眼の裡が頗るハッキリしてあたりは靜まり返つてゐた。靜まり返つた中にわけもなくいざこざが起つて来て、彼の耳許にしつかりとした、せはしな

い小聲が聞えた。

「右へ廻れ、左へ廻れ」

彼は伸び上つて耳を傾けると其聲はだん／＼高くなつて

「右へ廻れ」

と言つた。

彼は覺えてゐた。此庭は彼の家が未だこれほど落ち目にならぬ時、夏になると彼の祖母と共に毎晩此處へ出て涼んだ。其時彼は十歳にもならぬ脾弱な子供で、竹榻の上に横たはり、祖母は榻の側に坐していろいろな面白い昔話をして呉れた。祖母は彼女の祖母から聞いた話をした。陳氏の先祖は大金持だよ。此部屋は先祖がお釜を起したところで、無数の銀が埋めてあるさうだから、子孫の中で福分のある者がそれを掘り當てるのだらうが、未だ一向出て来ない。埋めてあるところは一つの謎の中に藏されてある。

「右へ廻れ、左へ廻れ、前へ行け、後ろへ行け、樹目構はず量れ金銀」

此謎に就いて陳士成はつね／＼心に掛けて推測してゐたが、惜しいかな、やうやく解きほごしたかと思ふと、すぐに又はぐれて仕舞ふ。一度彼は健かに見當つけて、唐家に貸してある家の下

に違ひない、と睨んだが、向うへ行つて掘り出す勇氣はない。幾度も考へなほすうちにだん／＼さうらしくなくなつて来た。自分の部屋の中にいくつも掘り返した穴の痕は、前かた試験に落第して其都度腹を立てた擧動の跡で、のち／＼それを見ると羞かしくなつて、人に合せる顔もないやうに思はれた。

しかし今夜は鐵の光が陳士成を閉ぢ籠めて、あのねと勧めた。彼が愚圖ついてゐると、正しき證明を與へ、そのうへしんみりした催促が加はるので、どうしても自分の部屋の中へ眼をやらすにはゐられない。

白き光！ それは一本の團扇のやうにひらく／＼と彼の部屋の中に閃いた。

「たうとう此處にあつた」

彼はさういひながら獅子のやうに馳け出して部屋の中に飛び込んだ。飛び込んだ時にはもう白き光の影もなく、只薄暗い元の部屋に壊れかゝつた數ある卓子がみな黒暗の中に隠れてゐた。彼は爽やかな氣分になつて突立ち、もう一度ゆる／＼腫を定めて見ると、白き光はハッキリと見え出して来た。今度は一層廣大に硫黄の火よりもハッキリとして白く、朝霧よりもほんのりとして濃やかに、東の壁の書卓の下から立上つた。

陳士成は獅子のやうに馳け出して、門の後ろに行つて、手を伸して鋤を探り出すと、一寸の黒い影にぶつかつた。彼はなぜかしらんが少しこはくなつて、慌てて燈火をつけてみると、別に不思議はない。やはり鋤が寄せかけてあるのだ。彼は卓子を片寄せて、鋤を振上げて四つの大タイルを一氣に掘り起し、身を僂めて見ると、いつものやうに黄いろい砂があつた。袖をまくし上げて砂を掻き起すと、下から黒い土が出て來た。彼は極めて用心深く一鋤々々、掘り下げて行つたが、深夜のことではあるし、鐵の尖に土の當る音は、兎に角重々しく、隠しおほせる響ではない。

坑の深さが二尺餘りに達したが、甕の口が出て來ない。陳士成はいら／＼して力任せに掘り下げると、コツンと一つひ／＼破れる音がして頗るひどく手にこたへ、鋤の尖に何か固いものがぶつかつた。そこで慌てて鋤を投げ出し、探つてみると一つの大タイルが下にあつた。彼は顫へながら一生懸命にそのタイルを掘り起し、前と同様の黒土を澤山掻きわけてみたが、やはり際限なく感ずるうち、忽ち小さな硬いものに觸れた。丸いもの！ 大方一つの鏽だらけの錢！ 其外瀬戸物のカケラが二つ三つ出て來た。

陳士成は汗みづくになつて掻き分けたが、心が上の空になつてガタ／＼顫へてゐると、又一つ奇妙なものにぶつかつた。それは馬の掌に似たやうなもので手にさはると甚だ脆い。彼は用心深く撮み上げ、燈光の下でよく見ると、斑に剥げ爛れた下顎の骨で、上には不揃ひに切れ落ちた齒が一行に並んでゐる。此下顎の骨は握つてゐるうちにむく／＼と跳ね返り、遂にげら／＼笑ひ出して口をきいた。

「今度もこれでお終ひ」

彼はひやりとして手を放した。下顎の骨はふら／＼と坑の底へ歸つてゆくと同時に彼は中庭に逃げ出した。彼は偷み眼して部屋の中を覗くと、燈光はさながら輝き、下顎の骨はさながら冷笑つてゐる。これは只事でないからもう一度向うを見る氣にもなれない。彼は少し離れた簷下に身を躲してやうやく落ち著きを得たが、此落ち著きの中に忽ちひそ／＼とさ／＼やく聲が聞えた。

「此處ではない。……山の中へ行け」

陳士成は曾て白晝、街の中でこれと同じ人聲を聞いたことを想ひ出し、彼はもう一度聞かぬ先きに、お／＼さうだと悟つた。彼は突然仰向いて空を見ると、月はすでに西高峯の方面に隠れ去つた。町を去る三十五里の西高峯は眼の前にあり、笏を執る朝臣の如く眞黒に頑張つて、其周圍にギラ／＼とした白光は途方もなく擴がつてゐた。而も此白光は遠くの方ではあるが、正に前面に

あつた。

「さうだ。あの山に行かう」

彼はかう決して打ちしをれて出て行つた。幾度も門を開け閉てする音がしたあとで、門の中はひっそりしてそよとの聲もない。燈火は一しきり明るくなつて空部屋と洞空を照したが、パチパチと幾聲か破裂したあとで、だんく縮少して、ありたけになつた残油はすでに燃え盡して仕舞つた。

「城門を開けて下さい」

大きな希望を含みながら恐怖の悲聲、かげろふにも似てゐる西關門前の黎明の中に戦々兢々として叫んだ。

二日目の日中、西門から十五里の萬流湖の中に一つの土左衛門を見た人があつて大騒ぎとなり、終に地保の耳に達し、土地の者に引揚げさせてみると、それは五十餘りの男の死體で、「中肉中脊、色白く鬚無し、すつばだかで上衣も下袴も無い。或人がそれは陳士成だといつたが、近處の者は面倒くさがつて見にも行かなかつた。死體の引受人もないから縣の役人が立會つて検屍の

上、地保に渡して埋葬した。死囚に至つては當然問題ではない。死人の衣服を剥ぎ取ることはいつもあることで、謀殺の疑ひを引起す餘地がない。さうして検屍の證明では、「生前、水に落ちて水底に藻掻いたから、十本の指甲の中には皆河底の泥が食ひ込んでゐる」と。

(一九二二年六月)

兎と猫

わたしどもの裏庭の奥に住んでゐる三太太は、夏のうち一對の白兎を買取り、彼の子供等の玩具にした。

此一對の白兎は乳離れがしてから餘り長くはないらしく、畜生ではあるが彼等の天真爛漫を見出される。しかし眞直ぐに立つた小さな赤味を帯びた耳と、びく／＼動かす鼻と、どぎまぎした眼は、知らぬところに移つて来たせゐでもあらう。住みなれた家にゐた時の安心さはない。かういふものは縁日へ行つて自分で買へば、一つが高くとも二吊文に過ぎないが、三太太は一圓拂つた。それはボーイをやつて上店から買つて來させたからだ。

子供等はもちろん大喜びで、取圍んで見る。他にSといふ一匹の小犬がある。馳け出して來てふん／＼嗅いでみて、嘍を一つして二三歩退いた。三太太は叱りつけ

「S、咬みつくると承知しないよ。よく覚えておいで」

と彼の頭を掌で叩いた。Sはあとじさりしてそれから決して咬みつかうともしない。

此一對の兎は結局裏窓に面した小庭の中に締め込まれてゐる日が多かつた。聞けば大層壁紙を破ることが好きで、又たび／＼木器の脚を噛む。此小庭の内に桑の樹が一本ある。桑の實が地に落ちると、彼等は逆も喜んでそれを食ひ、ほうれん草をやつても食はない。烏や鵲が下りて來ると、彼等は身を僂めて後脚で地上に強く弾みを掛け、ポンと一つ跳ね上る有様は、宛ら一團の雪が舞ひ上つたやうで、烏や鵲はびつくりして逃げ出す。こんなことがたび／＼あるので其後、はもう近づいて來ない。三太太の話では、烏や鵲は一寸食物を横取りする位だから一向差支へありませんが、憎らしいのは、あの大きな黒猫ですよ。いつも低い垣根の上で執念深く見詰めてゐます。これは用心しなければならぬのですが、幸ひにSと猫と鼻突き合せてゐるから、未だ何事も仕出かさないのせう。

子供等は時々彼等を捉まへて玩弄にする。彼等はお愛想よく、耳を立て鼻を動かし小さな手の輪組の中におとなしく立つてゐるが、少しでも隙があれば逃げ出さうとする。彼等の夜の伏所は小さな木箱である。中に藁を敷き、裏窓の軒下に置いてある。

このやうな日を幾月も送つた後、彼等は忽ち自分で土を掘り始めた。掘り出しかたが非常に早く、前脚で搔くと後脚で蹴る。半日経たぬうちに一つの深い洞を掘り上げた。皆不思議に思つてよく調べてみると、一匹の腹が他の一匹のそれよりも肥えてゐた。彼等は二日目に枯草と木の葉を銜へて洞内に入り半日あまり急がしかつた。

衆は大に興じ屹度小兎が出来るのだらうと言つた。三太太は子供等に對して戒嚴令を下し、これから決して捉まへてはなりませんぞといふ。わたしの母も彼等の家族の繁榮を喜び、生れて乳離れがしたら、二匹別けて貰つてこちらの窓下で飼つてみようと言つた。

彼等はそれから自分で造つた洞府の中に住んで時々出て来ては何か食べてゐたが、後ではバツタリ姿を見せなくなつた。前以て食糧を藏ひ込んであるのか知らんが兎に角食ひに出て来ない。十日許り過ぎて三太太はわたしに言つた。あの二匹は又出て来ましたが、大方生れるとすぐに小兎が死んだんでせう、雌の方は乳が非常に張つてゐて、子供を哺育した模様は更に見えませぬ。彼女は腹立たしげに語つたが、どうも仕方がない。

或日、日ざしが非常に暖かく風もなく木の葉は凡て動かなかつたが、後ろの方で頻りにどよめく笑聲を聞いた。聲を尋ねて目をやると、大勢の人が三太太の裏窓に靠れて、庭内を跳ね廻る一

匹の小兎を見てゐた。それは彼の父母が買はれて来た時よりもつと小さかつたが、彼は後脚を弾いて躍り上ることをもう知つてゐた。子供等は先きを争つてわたしに告げた。もう一つ小さいのが、洞の口から首を出したんですが、すぐに引込んで仕舞ひました。あれは弟でせう。その小さいのはい寸草の葉を擇んで食つたが、親兎は許さぬらしく、往々口を突き出して横合ひから奪ひ取り、自分も決して食はない。子供等はどつと笑ひ出した。小さいのは喫驚して跳ね上り、洞の中に潜り込んだ。親兎は洞門の口まで跟いて行つて、前脚で子供の脊骨を押し、押し込んだ後、土を搔き起して穴を封じた。

それから小庭の内は急に賑やかになつた。窓口でも時々人が覗いて見る。

さうして遂に小さいのも大きいのも丸で見えなくなつた。其時毎日雨が降つてゐたので、三太太は又あの黒猫の毒手を心配したが、わたしはさうでないと言つた。氣候が寒いから隠れてゐるので、日があたれば屹度出て来ます。

日が出たが彼等は出て来ない。そのうち衆は彼等のことなど忘れて仕舞つた。

ひとり三太太はいつも其處へ行つてほうれん草をやつてゐたから、いつも其處へ行くと想ひ出した。或時彼女は窓裏の小庭に入つてみると、壁の隅に別に一つの穴を發見した。それから又元